



Title	本草和名の成立と継承
Author(s)	武, 倩
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13408号
Issue Date	2019-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13408
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91520
Type	doctoral thesis
File Information	Wu_Qian.pdf



平成 30 年度博士学位論文

本草和名の成立と継承

北海道大学大学院文学研究科

専攻 言語文学

指導教員 池田証壽

氏名 武 倩

目次

1 序論	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
1.3 論文の構成	3
2 本草和名の研究史	5
2.1 江戸明治初期の考証学者による研究	5
2.1.1 多紀元簡の考証（附：本草和名書名の由来）	5
2.1.2 狩谷掖斎の考証（附：本草和名著者の来歴）	6
2.1.3 小島父子の考証	8
2.1.4 森父子の考証	9
2.2 現代の学者による研究	9
2.2.1 書誌学分野の研究	9
2.2.2 国語学分野の研究	10
2.2.3 医史学分野の研究	14
3 本草和名の諸本	16
3.1 はじめに	16
3.2 先行研究の整理	16
3.3 本草和名の写本	18
3.3.1 台北故宮博物院蔵万延元年影写本	19
3.3.2 無窮会蔵万延元年影写本	20
3.3.3 台北故宮博物院蔵博愛堂鈔本	21
3.4 本草和名の版本	23
3.4.1 版本の成り立ち	24
3.4.2 小島父子書入れ本：国会本と静嘉堂文庫本	27
3.4.3 森父子書入れ本：全集本底本と松本書屋本	31
3.4.4 松本書屋本と国会本の関係	33
3.5 版本・写本間の異文を示す校讐	37
3.5.1 原鈔本とは	38
3.5.2 原鈔本の空字・欠字を示す校正符号	40
3.5.3 版本の欠字を示す書入れ	41

3.5.4	松本書屋本による原鈔本の再建	42
3.6	おわりに	42
4	本草和名の出典	45
4.1	はじめに	45
4.2	漢籍出典に関する凡例	45
4.3	新修本草	49
4.3.1	新修本草の諸本	49
4.3.2	新修本草仁和寺古写本の伝鈔経緯	53
4.3.3	新修本草を用いた校讐：本草和名版本に見られる小島宝素の書入れ	58
4.4	新修本草以外の漢籍出典	61
4.4.1	医書	61
4.4.2	非医書	66
4.5	おわりに	67
5	本草和名の組織	68
5.1	はじめに	68
5.2	本草和名データベースの概要	68
5.2.1	入力方針	68
5.2.2	フィールド構成	69
5.3	本草和名の漢名	70
5.3.1	版本・写本間の異文	70
5.3.2	見出しの漢名	71
5.3.3	項目内の漢名	73
5.4	本草和名の和名	76
5.4.1	版本・写本間の異文	76
5.4.2	和名注記の統計	77
5.4.3	和名の万葉仮名	78
5.5	おわりに	80
6	倭名類聚抄における本草和名の出典注記	81
6.1	はじめに	81
6.2	先行研究の到達点と本研究の課題	83
6.2.1	先行研究の到達点	83
6.2.2	本研究の目的	85
6.3	両書の体裁と引用方法	86
6.3.1	倭名類聚抄の序文と体裁	86

6.3.2	本草和名の凡例と体裁.....	88
6.4	両書の間で共通する新修本草以外の漢籍出典.....	90
6.4.1	出典名と引用例数の一覧.....	90
6.4.2	共通する項目の分析.....	92
6.5	おわりに.....	98
7	倭名類聚抄における本草和名の誤引.....	99
7.1	はじめに.....	99
7.2	誤引とは.....	99
7.2.1	誤引の意味.....	99
7.2.2	誤引が生じた背景.....	100
7.3	河野（1983）の諸点.....	101
7.3.1	出典名「本草」「陶弘景注」「蘇敬注」の同定.....	101
7.3.2	孫引きの指摘.....	102
7.4	狩谷掖斎による誤引の指摘.....	108
7.4.1	新修本草の本文にない内容を「本草云」として引用している例.....	108
7.4.2	新修本草の本文にある内容を「○○云」として引用している例.....	109
7.4.3	新修本草の両注・その他の諸書における誤引.....	110
7.5	狩谷掖斎の考証.....	111
7.5.1	テキストの厳選.....	111
7.5.2	祖形の推定.....	112
7.5.3	和訓の関連に対する分析.....	112
7.5.4	倭名類聚抄引用書の選定に対する分析.....	114
7.6	おわりに.....	115
8	結論.....	116
8.1	全体のまとめ.....	116
8.2	今後の課題と展望.....	117
	参考文献.....	118
	謝辞.....	124

1 序論

1.1 研究の背景

「本草」とは東洋医学で薬の原料となる薬用植物のことで、広く動物・鉱物も含むが、その学問は本草学と呼ばれる。本草学は中国で生まれた学問であり、本草書の編纂は後漢の『神農本草経』まで遡る。それを校訂・加注したのが陶弘景（六朝）の『本草経集注』（『集注本草』『本草集注』とも）である。さらに、この『本草経集注』を増補・加注したのが蘇敬（唐）の『新修本草』である。

『新修本草』は 659 年に、高宗の勅命を奉じて編纂されたもので、中国最古の勅撰本草書である。それが奈良時代に日本に導入され、医学生の教科書として重宝された。『日本国見在書目録』（893 頃）には 165 部・1309 巻に及ぶ医薬書が載せられているので、同じ時期に、他の医薬書も大量に伝来していたと考えられる。平安初期に成立した類書『秘府略』（831 年）や漢和辞典『新撰字鏡』（898～901 年）には本草関連の内容が記されており、ここからも、当時の日本において本草学への関心が次第に高まっていったことが窺える。

延喜年間（918 年頃）に、侍医である深根輔仁が醍醐天皇の勅命を奉じて、『新修本草』を範にとって、日本最古の薬名辞典『本草和名』を編纂した。平安時代には、中国文献の日本向け注釈書の編纂が盛んに行われていたが、その中で成立した『本草和名』も注釈書の要素を色濃く持ち合わせている。『本草和名』は『新修本草』を主体とし、『食経』等によって増補され、実に千種以上の薬用動植物を収録している。そして、単なる漢籍の抄録に留まらず、薬物の漢名に万葉仮名和訓や日本での産出状況も注記されており、平安時代の語彙・文化・物産などを知るための貴重な資料である。また、平安中期を代表する漢和辞典『倭名類聚抄』

（934 年頃）、日本最古の医学全書『医心方』（984 年頃）などにも引用され、その後の辞書や医薬書の編纂に大きな影響を与えた。中国本草学の本格的受容は、本書によって口火が切られたといえよう。次の図 1-1 は、本論文で主として取り上げる本草書や辞典類とその影響関係を、時系列に沿って簡略に図示したものである。

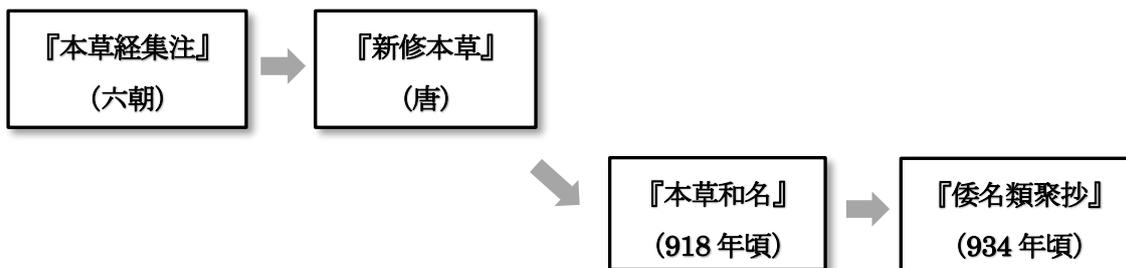


図 1-1 「本草和名の成立と継承」関係図

鎌倉時代以降、人々の本草学への関心は次第に薄まっていったものの、江戸時代になってから、その関心が再び高まり、日本独自の本草学がめざましい発展を遂げ、後に博物学的な研究に発展した。明治に至ると、本草学は主に植物学・生薬学に受け継がれた。

安定した統治が続いた江戸時代では、本草学のみならず、考証学の研究も盛んに行われていた。長く所在不明であった『本草和名』の古写本が幕府の紅葉山文庫で発見されたのを機に、多くの考証学者が本書の研究に取り組んできた。重要な人物としてまず挙げられるのは、古写本を発見した多紀元簡（たきげんかん）である。元簡は紅葉山文庫古写本を校訂し、出版したことによって本書を再び世に広めた。その後、狩谷掖斎（かりやえきさい）、小島宝素（こじまほうそ）父子、森立之（もりりっし）父子はそれぞれ異なる関心から『本草和名』について詳しく研究し、本書の版本に書き入れを加えた。このような研究の蓄積をもとに、狩谷掖斎は『倭名類聚抄』に対する箋注を完成させた。小島宝素と森立之は『新修本草』や『神農本草経』など中国の古逸本草書の復元を成し遂げた。これらの研究成果は江戸時代の考証学の、一つの到達点を示しており、現在の文献研究においても参考されるべき所が多い。

近年、『本草和名』に関する研究は、主に国語学と医史学の分野で行われてきた。国語学の分野においては、古辞書への引用資料という観点から研究が進められてきており、医史学の分野においては、日中医学交流史の観点から調査がなされてきた。この他、民族植物学や博物学史における関連研究も散見される。しかし、その存在自体が人文科学と自然科学の狭間に位置するとでもいうべき文献であるために、『本草和名』についてのまとまった研究は管見の限り見当たらない。その上、数少ない『本草和名』の研究を見ていくと、江戸考証学者の研究成果を顧みない傾向があるかのようでもある。

1.2 研究の目的

明治以来、西洋医学はめざましく発達し、医療界の主流となってきた。しかし近年、西洋医学だけでは治療が難しい疾患もあるなど、その限界も見えつつある。このような中で、東洋医学の価値を再認識する動きが見えてきている。人類の長い歴史の中で培われてきた東洋医学だけに、その影響力がますます高まることには疑う余地がないだろう。

筆者は日本語の歴史的研究を志すものであるが、東洋医学の奥深さにも興味が尽きず、そこで、『本草和名』という資料に出会った。『本草和名』は東洋医学の原点ともいえる本草学を日本に導入した上で、それを日本化させた先駆的な存在であった。中国の本草書にある薬学的な記述が省略され、「動植鉱物名彙」的な内容に再構成されているもので、本書に記されている本草語彙は同時代に編纂された漢和辞典の『倭名類聚抄』に吸収され、当時及び以後の日本人の言語生活に一定の影響を及ぼしたと考えられる。

本研究は江戸考証学者の研究を踏まえた上で、書誌学、医史学、情報学の知識を取り入れ、国語資料である『本草和名』の成立と継承を明らかにするのを目的とする。具体的には、

- | | | | |
|---|-----------------------|------|--------|
| ① | どのような形で伝存しているか | (諸本) | |
| ② | どのような漢籍を引用しているか | (出典) | } (成立) |
| ③ | どのような構造を持っているか | (構造) | |
| ④ | どのように『倭名類聚抄』に引用されているか | | (継承) |

という四つの課題の究明を目指して、研究を進めていく。

①諸本の研究は『本草和名』研究の基礎である。本書に関しては、近年、国語学の分野においては、写本の所在が知られておらず、底本として利用されてきたのは日本古典全集所収の版本である。しかし、その版本がどれほど忠実に祖本の全容を反映しているかという点に関しては、疑問視する意見も多い。そのため、諸本の現存状況及び相互関係を明らかにし、より信頼性の高い底本を紹介することが期待されている。

②出典および③構造についての調査と分析は、『本草和名』の成立の研究に繋がる。『本草和名』は、『新修本草』をはじめとする多くの漢籍を引用している。これらの漢籍にある薬物の漢名を集めた上で、万葉仮名による和名を対照させている。ところが、本書に引用される漢籍にはどのようなものがあり、漢籍にある内容がどのような構成で取り入れられているかについては、先行研究では十分に検討されていない。この部分の検討は関連する研究の空白を埋めるという点においても重要である。

④『倭名類聚抄』への引用に関する考察は、『本草和名』の継承の研究として位置づけられる。『本草和名』の書名が『倭名類聚抄』の序文に載せられていることから、同書が『倭名類聚抄』の重要な出典であることは間違いない。しかし、『倭名類聚抄』は実際の引用において、『本草和名』の名を明記しないことが殆どである。それ故に両書の関連項目の判定は難しく、これまでの研究でも議論されてきたため、先行研究を見直した上で、『倭名類聚抄』における『本草和名』の引用の仕方を再検討する必要がある。

1.3 論文の構成

本論文は、序論と結論を入れて、8章から構成される。序論では研究背景と研究目的を述べ、結論では全体のまとめと今後の課題を述べる。本論は第2章から第7章までの6章からなる。次に順を追って、本論各章で検討する内容について紹介する。

第2章では、『本草和名』に関する代表的な先行研究を、江戸明治初期の考証学者によるものと現代の学者によるものに分けて紹介する。

第3章では、日本と台湾の蔵書施設での書誌調査に基づき、『本草和名』諸本の現蔵機関における所蔵状況を報告する。その上で、諸本間の関係を考察するとともに、版本に見られる書入れについて分析する。

第4章では、『本草和名』の編纂資料を『新修本草』とそれ以外の漢籍に分けて検討する。『新修本草』については、諸本と伝鈔経緯に関する先行研究を整理した上で、『本草和名』との関係を考察する。それ以外の漢籍出典については、日中書目への掲載状況と現存状況を調査する。

第5章では、筆者が構築する『本草和名』データベースに基づき、本書に記載される薬物の漢名と和名がどのような体裁と構造で取り入れられているかについて考察する。

第6章では、『倭名類聚抄』における『本草和名』の出典注記について検討する。両書の体裁と引用方法を分析するとともに、先行研究でほとんど検討されていない『新修本草』以外の共通出典に注目して調査を進める。

第7章では、『倭名類聚抄』における『本草和名』の誤引について考察する。誤引が生じた背景を分析した上で、狩谷掖斎の箋注を手掛かりに、最近の研究について再検討を行う。

2 本草和名の研究史

2.1 江戸明治初期の考証学者による研究

医史学を専攻とする小曾戸氏は江戸明治初期の考証学者による研究を次のように評している。「考証学は中国清代に隆盛をみた学問方法で、文献資料を博搜吟味し、客観的事実に基づいて過去の史実・事物の真相真理を究明しようとするものであった。研究対象は広範な分野に及んだが、清朝における考証学は医学に関しては十分な成果を挙げるには至らなかった。これに対し、清朝考証学を受容した日本ではとりわけ医学の分野で考証学派の研究が大きく花開き、いくつもの著述として結実した」（小曾戸 1998：437）。

考証学が盛んになった江戸時代では、幕府の紅葉山文庫で『本草和名』の古写本が発見されたのを機に、多くの考証家が本書の研究に取り組んでいた。代表的な人物として、多紀元簡、狩谷棧齋、小島父子、森父子が挙げられる。次に、これらの人物の略歴を紹介した上で、『本草和名』に対する考証をまとめる。

2.1.1 多紀元簡の考証（附：本草和名書名の由来）

多紀元簡（1755「宝暦五年」～1810「文化七年」）、号は桂山又は櫟窓、字は廉夫、通称は安長。寛政二年（1790）に奥医師に昇進した。幕府の医学館「躋寿館」でも活躍し、医学における考証学的研究の基盤を固めた。

多紀氏の履歴、交友、活動に詳しい研究には森（1933）がある。それによると、多紀氏は名医丹波康頼の後裔で、徳川時代の中頃より末葉に至るまで江戸医学の権威であった。寛延二年（1749）に、元孝（元簡の祖父にあたる）によって、姓を多紀に改められた。元孝は1791年に、江戸時代唯一の私立医学校として躋寿館を創立した。その子元恵の時に、躋寿館は官立の医学館となった。清朝考証学の影響を受け、医学館では医学教育とともに、考証学の研究も進められた。元簡の時になると、医学館は江戸考証学の一大拠点として名実ともに不動の地位を確立した。多紀氏および医学館のもとで行われた善本医籍の蒐集・校刻事業は、現代人に膨大かつ貴重な研究資料を残してくれた。

現在、よく利用されている『本草和名』の版本は、多紀元簡によって作られたものである。元簡は、紅葉山文庫で本書の古写本を発見し、それを校訂した上で世に広めた。古写本の発見・同定に関する経緯は、元簡が版本に附した序文と提要に示されている。次に示すのは、提要にある内容の一部である。

謹案、本草和名、原本不題作者名氏、開卷首頁、唯記新撰二字、
考源能州¹和名類聚鈔序曰、大醫博士深江輔仁、奉勅撰集新抄和名本草、
仁和寺書目曰²、倭名本草、太醫博士源輔仁、奉勅撰、
藤少納言書目³曰、本草和名、下一帖、
而類聚抄引用書中有新抄本草、新撰本草、和名本草、又有單稱本草者其所載和名皆與是書合、
則雖有數名、其實一書、俱指是書而言、其間有小小異同者、乃流傳之轉訛、不足苛論也

これによると、本書が発見された当時、著者名さえ示されておらず、「新撰」の二文字だけがあったという。『倭名類聚抄』序文に「新抄和名本草」、『本朝書籍目録』に「倭名本草」、『通憲入道蔵書目録』に「本草和名」とある。書名に幾つかのバリエーションがあるものの、『倭名類聚抄』にある引用部分の和名と一致するので、同じ書であることに間違いないだろうという。

元簡は「和名本草」ではなく「本草和名」を版本の書名に選んだが、その理由は序文と提要に示されていない。ここでは、多紀元簡同時代の中川壺山（1773～1850）の『本朝医家古籍考』にある記述（28丁裏）を見よう。

和名本草、此書二本アリ、一本ハ深江輔仁ノ所撰ニシテ、近年江戸ニテ上木セリ、
又一本ハ丹波康頼ノ所撰ニシテ、寫本ニテ世ニ行ハル、
康頼ト稱スルモノ偽撰成ヘシト或人云ヘリ

この記述によると、当時「和名本草」と称するものに、深江輔仁の撰によるものと、丹波康頼に仮託したもの（すなわち、『康頼本草』）がある。元簡は、後者と区別するために、「本草和名」を書名に選んだ可能性があると考えられる。

ともあれ、現在よく使われる「本草和名」という書名は元簡の翻刻本によって、世に定着してきたのである。元簡が本書に加えた校訂については、第3章で詳しく取り上げる。

2.1.2 狩谷椽斎の考証（附：本草和名著者の来歴）

狩谷椽斎（1775「安永四年」～1835「天保六年」）、名は望之、字は卿雲、号は椽斎、通称は三右衛門。江戸の本屋青裳堂に生まれ、豪商として知られる米問屋津軽屋の養子となる。吉田篁墩が提唱した校勘学を継承し、清朝考証学の方法を取り入れ、『箋注倭名類聚抄』（『和名

¹ 源能州は『倭名類聚抄』撰者の源順（911～983）を指している。源順は能州守に叙任されたことがある。

² 『本朝書籍目録』のことである。その詳細については和田（1990）を参照。

³ 藤原通憲（1106～1159）の個人蔵書目録である『通憲入道蔵書目録』のことである。藤原通憲は少納言の職に就いたことがあるので、「藤少納言」と呼んだのか。

類聚抄箋注』とも)、『日本国現報善悪靈異記考証』、『本朝度量権衡攷』など、考証学の分野で優れた業績を残した。狩谷栲斎の経歴と業績に詳しい研究には梅谷(1994)がある。

栲斎は、『倭名類聚抄』への引用に着目して『本草和名』を研究し、版本へ朱・墨・藍の三筆を以て書入れを加えており、『倭名類聚抄』『伊呂波字類抄』『千金翼方』『證類本草』等との校異を全巻に注記している。その自筆本を川瀬一馬が持っていたというが、現在の所在は不明である。ただし、栲斎の書入れが小島宝素によって移写されており(「国会本」、詳細は第3章で後述する)、小島宝素の移写書入れがさらに森父子によって移写されている(「松本書屋本」、詳細は第3章で後述する)。また、岡本況齋⁴も小島宝素の移写本を借りて、それに基づき、栲斎の校語を『本草和名考異』⁵としてまとめている。これらの資料により、栲斎の書入れの内容を知ることができる。

栲斎はまた、『倭名類聚抄』版本(早稲田大学所蔵、請求記号:ホ02 06263)に、膨大な書き入れを残している。その書入れからは『本草和名』を参照した形跡が窺える。

これら、『本草和名』版本と『倭名類聚抄』版本への書入れが、最終的に『倭名類聚抄』に対する箋注としてまとめられる。栲斎畢生の大作とも言える『箋注倭名類聚抄』は今日でも第一に参照されるべき価値のある研究であり、以後の『倭名類聚抄』の出典研究が栲斎の研究を超えることは至難であるとされる。『箋注倭名類聚抄』は文政十年(1827)に擱筆されると、五十年余の時を経た明治十六年(1883)に、栲斎の最後の弟子森立之とその支援者の努力によって内閣印刷局から刊行された。

『倭名類聚抄』の源順序に「大医博士深根輔仁奉勅撰集和名本草」とあることから、栲斎は『箋注倭名類聚抄』で、『本草和名』の著者深根輔仁について、次のように記している(括弧にある西暦年及び下線は筆者による)。

- ① 日本紀略云、延喜十八年(918)九月十七日、右衛門医師深根輔仁、撰掌中要方、
- ② 類聚符宣抄、延長三年(925)時原興宗等、請課試醫生状中有権医博士深根輔仁、
- ③ 法曹類林、有承平六年(936)侍医滋根輔仁問醫師之坐次、即其人也
- ④ 按續日本後記、承和元年(834)六月辛丑、和泉國人正六位上蜂田薬師文主、従八位下同姓安遊等、賜姓深根宿禰、輔仁應是文主安遊等裔孫、家世業醫者
- ⑤ 今本法曹類林作滋根輔仁、本朝書籍目録作源輔仁、皆誤

⁴ 岡本況齋(1797「寛政九年」～1878「明治十一年」)、幕末・明治初期の考証学者、狩谷栲斎を師とする。

⁵ 『本草和名考異』は現在、国立国会国会(況齋叢書四)、静嘉堂文庫(岡本況齋雜著一二三)、杏雨書屋(杏-1605)などに所蔵されている。その巻末に「右校語、並係栲斎狩谷先生手澤本所載、嘗小嶋春庵氏借得手澤本、手自寫焉、余又借小嶋氏、採録其緊要者若干條、天保九年春正月、況齋岡本考識」とある。

この記述について、吉田（1938）は「箋注にいふ通りであるが、輔仁についてこれ以上詳しく見ることは出来ない」（p.33）と評価している。①から右衛門医師の地位にあった918年9月に輔仁が『掌中要方』を撰述したことが分かる。『本草和名』もほぼ同時の撰であると考えられる。④から輔仁の先祖が代々医業をもって朝廷に仕え、834年に深根宿禰の姓を賜ったと分かる。⑤において、掖斎は、深根輔仁の苗字を「滋根」（『法曹類林』）、「源」（『本朝書籍目録』）とするのが間違いであると指摘している。

掖斎は『本草和名』の主要出典である『新修本草』古写本の伝鈔にも携わっており、彼が書写した第十五巻の巻末には、『新修本草』の伝来を証明する最古の記録が遺されている。この『新修本草』の伝鈔については第4章で詳述する。

上記のことから、『本草和名』を研究するためには、掖斎の『箋注倭名類聚抄』を参照しなければならないと言っていいたいだろう。箋注の研究成果については第7章で詳述する。

2.1.3 小島父子の考証

小島宝素（1797「寛政九年」～1849「嘉永元年」）、名は尚質、字は学古、号は宝素、通称は春庵。校勘の学は精密で、書誌学に長けた。京都仁和寺蔵の『新修本草』の復原も手がけたが、56歳の時、途中で死去。森鷗外の歴史小説に『小嶋寶素』（森 1917）がある。

小島尚真（1829「文政十二年」～1857「安政四年」）、小島宝素の三男。字は抱沖、通称春沂。父の学風を継ぎ、多紀家の門人でもあった。森立之とともに『本草経集注』の復元と校訂に携わったが、20代で早逝した。

小島父子は、江戸考証学の一翼を担った人物である。名だたる著述がないので正当な評価がなされないきらいがあるが、医籍の校勘にかけては綿密かつ多量の業績を残している。その遺書を多数入手した清末考証学者の楊守敬⁶が絶賛を惜しかなかった。

宝素は『新修本草』の復元という観点から『本草和名』を考証した。静嘉堂文庫所蔵の宝素自筆書入本『本草和名』には、『伊呂波字類抄』『香要抄』『長生療養方』『香字抄』との校合書入れがなされている。国会図書館所蔵の小島父子自筆書入本『本草和名』には、移写された狩谷掖斎の書入れとともに、自らが『香薬抄』等で校合書入れを加えたものも見られる。詳しくは第3章と第4章で述べる。

尚真は、『本草和名』版本にある誤脱文字を訂正する目的で、森立之と前後して、原鈔本による校讐を行った。その書入れは、国会図書館所蔵の小島父子自筆書入本『本草和名』に見られる。詳しくは第3章で述べる。

⁶ 真柳（2008a）、真柳（2008b）を参照。

2.1.4 森父子の考証

森立之（1807「文化四年」～1885「明治十八年」）、字は立夫、号は枳園、通称は養竹。狩谷椽斎・伊沢蘭軒・多紀元堅⁷に考証学を学んだ。『経籍訪古志』の編纂や、『神農本草経』の復元に取り組んだ。著書が非常に多く、中国医学古典（『神農本草経』『黄帝内経』『張仲景方』）に関する『攷注』が特に有名である。江戸考証学の業績を集大成した人物として知られる。清末の蔵書家である楊守敬と親交があり、蔵書の一部は楊によって買われた。

森約之（1835「天保六年」～1871「明治四年」）、森立之の長男。号は養真又は稷庭、字は春雄。医学と考証学は父に学び、多紀家の門人でもあった。妻は大槻文彦の姉であり、歿後蔵書の一部は大槻文彦の所蔵に帰した。

森立之について、小曾戸（2013）は、「最後にして最大の業績を遺した考証医家である。幕末に先輩同僚が次々に没していくなか、その蓄積・成果を受け継ぎ、天与の才能と長寿のもとに集約し、開花させたのである」（p.55）と高く評価している。

立之は『神農本草経』など中国医学古典の復元や注解のために、『本草和名』を考証したと考えられる。彼は、多紀元簡の曾孫より『本草和名』の紅葉山古写本を借り、弟子の今尾道醇にその影写本を作らせた（「万延元年影写本」、詳細は第3章で後述する）。本影写本を用いて、版本との校合を行い、版本に書入れを残した。この版本には、約子とともに移写された小島父子の書入れもあり、『本草和名』の研究には絶好な資料と言えよう（「松本書屋本」、詳細は第3章で後述する）。

立之は、また『本草和名』の五十音別和名索引『本草和名訓纂』を作成している。日本古典全集所収の複製版には、山田孝雄による同名の索引が付されているが、それは本書によって改編されたものである。

2.2 現代の学者による研究

本節では、明治以降の『本草和名』に関連する研究を、書誌学、国語学、医史学に分けて、各研究分野における代表的なものを紹介する。

2.2.1 書誌学分野の研究

書誌学は考証学の伝統を受け継ぐもので、書籍の形態・内容・成立に関する事柄を実証的に研究する学問のことである。文献を研究対象とする人文科学の諸分野において基礎的な知識を提供する役割を担っている。

⁷ 多紀元簡の五男である。父元簡が医学館で確立した考証学をさらに進化させた。

『本草和名』の書誌に詳しい研究として、日本古典全集刊行会（1926）の「本草和名解題」、川瀬（1955）、真柳（1987a）・真柳（1987b）、杉本（2011）が挙げられる。

「本草和名解題」は『日本古典全集』所収の複製本に付されており、本書の成立背景や書誌情報を紹介している。同複製本の普及に伴い、この解題も広く用いられるようになったが、識語の解読など、厳密さに欠ける部分がある。

川瀬（1955）は、その前半部分において、本書の伝本を網羅的に調査、報告している。その書誌調査は、詳細かつ綿密で、現在においても意義深いものである。ただし、調査が行われたのは戦前や戦中であるため、現存の状況とそぐわない場合が多く、再確認する必要がある。

真柳（1987a）・真柳（1987b）は、本書の紅葉山文庫本を影写した森立之の旧蔵本が台北故宫博物院に保存されていることを報告している。

杉本（2011）は、川瀬（1955）を援引しながら、日本古典全集刊行会（1926）の「本草和名解題」の問題点を指摘している。

2.2.2 国語学分野の研究

国語学（厳密に言えば、日本国語学）は、古代から近世までの古い日本語を文献学的・通時的に研究する学問のことである。それに近い分野として、日本語科学が挙げられるが、これは主に現代日本語を共時的言語学の観点から研究するものである。

『本草和名』が国語学の分野で取り上げられるのは、平安時代の語彙が記載されていることや、平安時代中期以降に編纂された漢和辞書や国語辞書などに引用されていることためである。次に、テーマごとに先行研究をまとめる。

2.2.2.1 倭名類聚抄への引用

『倭名類聚抄』（以下『和名抄』）は、『本草和名』の成立後まもなく編纂された漢和辞書であるが、『本草和名』を基礎資料として引用していることが、その序文によって明らかである。両書の関係に注目した研究としては、吉田（1938）・吉田（1939）、築島（1965）、河野（1983）、河野（1988）、宮澤（1998a）、呉（2004）が挙げられる。

吉田（1938）と吉田（1939）は、狩谷掖斎の箋注を援引しながら、『和名抄』が引用する国書と漢籍の存佚と、それら典籍を引用する際に生じた誤引について論じている。『本草和名』については、次のように言及している。

- 一、二巻は伝わっておらず、三巻より二十巻までが現存する。
- 『和名抄』にある「和名本草」「新抄本草」「本草音義」といった書名は『本草和名』を指している。

- 『和名抄』において、「本草云」「本草注云」「本草疏云」「蘇敬曰」「陶隱居曰」などとして引用するものには、原典に不載であって、『本草和名』から採ったものがある（すなわち、『本草和名』からの誤引がある）。
- 『和名抄』に引く「雜要決」「崔禹食經」「大清經」「刪繁論」「養性要集」「釋藥性」などの諸書は、殆ど『本草和名』からの孫引きである。

この研究は、後述する築島（1965）に修正される部分があるものの、狩谷掖斎の箋注に基づき、『和名抄』における『本草和名』の「誤引」や「孫引き」に注目した点においては評価されるべきである。

築島（1965）は、『本草和名』の和訓に関する問題点を指摘した上で、『和名抄』との関係について考察している。『本草和名』に古写本の存在が知られていないとして、底本に日本古典全集所収の版本を用いているが、図書寮本『類聚名義抄』に引用された三条がこの版本とよく一致しているので、恐らく版本は古写本の面影を相当忠実に伝えていると推測している。『和名抄』との関係については、和訓の採用という側面に注目し、次のように論じている。

- 三卷～二十卷は『本草和名』自体の巻数ではなく、『新修本草』の巻数である。
- 『和名抄』所引の「新抄本草」「本草音義」は『本草和名』とは別のものである。
- 『本草和名』の和訓は、「本草云」として引用された項目の中に、「和名云々」として取り入れられたものが多い。
- 『本草和名』の和訓は、『和名抄』に引かれている『楊氏漢語抄』又は『漢語抄』の和訓と一致するものがある。

この研究は、『本草和名』の国語資料としての全貌を簡略に描いたものとして、後の研究の端緒となったと言えよう。ただし、川瀬（1955）の書誌調査や、狩谷掖斎の考証の成果を取り入れていないところが微瑕のように思われる。

河野（1983）は、漢文注記を中心に両書の間を考察し、次の推論を出している。

- 『和名抄』の漢文本文にある出典名の「本草」は『新修本草』の正文であり、「陶隱居注」「蘇敬注」はその注である。
- 源順は少なくともこれらの部分を、孫引きの形で『本草和名』から引用した。

この研究は、『和名抄』『本草和名』『新修本草』三書の引用関係について分かりやすく論じた点においては有意義である。ただし、後述する呉（2004）に批判されるように、「孫引き」説だけでは説明できない部分があるなど、問題を単純化しすぎる傾向がある。

河野（1988）は、河野（1983）の結論（すなわち『和名抄』に『本草和名』からの直接引用がある）を前提にして、『本草和名』の音注と比較することによって、『和名抄』の音注の出典及びその特徴を分析している。

宮澤（1998a）は、『和名抄』と『本草和名』の関連項目 801 項を出典と引用方法に着目し、次の五種に分類している。

- 『本草和名』をそのまま引用するもの（漢籍本文の孫引きを含む）：370 例
- 『本草和名』の注にある「出～」の出典を漢籍本文として引くもの：157 例
- 『本草和名』の施注にない本草系の漢籍出典を漢籍本文として引くもの：70 例
- 『本草和名』の施注にない本草系以外の漢籍出典を漢籍本文として引くもの：202 例
- 『漢語抄』『弁色立成』を引くもの：2 例

上記の中、「『本草和名』をそのまま引用するもの」は河野（1983）の結論に対応しているので、両書の関連項目を広く捉えていることが窺える。

呉（2004）は、『和名抄』における「本草」「陶隱居」「蘇敬」を出典とする 363 例の漢文本文について、『本草和名』『新修本草』と逐一比較し、次の結果を得ている。

- 『本草和名』にはなく、『新修本草』にだけあるもの：57 例
- 『新修本草』にはなく、『本草和名』にだけあるもの：35 例
- 『新修本草』『本草和名』の両方に存するもの：257 例
- 『新修本草』にも『本草和名』にもないもの：11 例
- その他：3 例

この結果に基づき、『新修本草』を直接参照したものや、他の本草書の介在を想定させるものが存在するため、河野（1983）の「孫引き」説は成り立たないと指摘している。

2.2.2.2 医心方・類聚名義抄への引用

『本草和名』は『和名抄』以降に編纂された医学全書の『医心方』（984 年頃）、漢字字書の『類聚名義抄』（11 世紀初～12 世紀後半）、香薬事典の『香字抄』（11 世紀後半）などにも引用されているとされる。このことは、前述の築島（1965）にも言及されている。それ以降に、本書と『医心方』の関係に注目した研究としては、松本（1980）、築島（1987）、加藤（2005）が挙げられ、本書と『類聚名義抄』の関係に注目した研究としては、河野（1992）や呉（2000）が挙げられる。次に、これらの研究について簡単に紹介する。

松本（1980）は、医書の訓読という観点から、『医心方』に付されている二系統の訓点（丹波重基の朱筆仮名点と藤原行盛の墨筆仮名点）を『和名抄』『本草和名』と比較し、漢字と和訓の対応関係を分析している。

築島（1987）は、『本草和名』と『医心方』の和訓を比較・検討した結果、『本草和名』の江戸時代の版本は、一部に校正の改変が存するとは言え、全体として古い形が相当程度忠実に残されているのに対して、『医心方』の十二世紀の古写本は、転写の折に後世の改変を経たと推測している。

加藤（2005）は、『医心方』の字音注記のうち、反切と類音注を対象に、『本草和名』『和名類聚抄』との比較を通じて、その出典推定を行ったうえで、加点方針について考察している。

河野（1992）は『本草和名』と観智院本『類聚名義抄』の引用関係について考察したものである。観智院本『類聚名義抄』の場合、出典注記によって原典を同定することが難しいと指摘した上で、収録語彙の配列順序の一致によって原典を同定するという方法を導入している。調査の結果は次に示す通りである。

- 観智院本においては、図書寮本との比較検討が不可能である部分においても、『本草和名』からの引用であると推定できる語が収録されている。
- 図書寮本、観智院本のいずれにおいても、『本草和名』からの引用が、『和名類聚抄』からの引用を補足する形式で行われている場合がある。

呉（2000）は図書寮本『類聚名義抄』に収録されている植物について、出典別に分類・調査したものである。図書寮本『類聚名義抄』と『和名抄』の関連、『和名抄』と『本草和名』の関連を通して、図書寮本『類聚名義抄』と本草書の関連について調べている。調査の結果は次に示す通りである。

- 図書寮本所収の植物は、75箇所57種であり、その半数以上が『和名抄』を出典としている。本草書を出典とするものは4箇所（『本草和名』2・『本草補遺』2）のみである。このように、図書寮本は、見出しが植物であるにもかかわらず、本草書より『和名抄』を優先している。
- 図書寮本所収の植物を通して、『和名抄』と『本草和名』の関連を見ると、『和名抄』には『本草和名』以外の本草書の介在が認められ、また、出典名が「本草云」であるものに『本草和名』からの孫引きとは認められない用例がある。
- 『和名抄』を出典とする図書寮本所収の植物は、本文と和名がともに正確に引用されている。さらに、その和名は観智院本に受け継がれている。

2.2.2.3 和名の表記・語源語誌

『本草和名』の和名表記に関する研究には、川瀬（1955）、築島（1965）、築島（1981）がある。

川瀬（1955）は、その後半部分において、『本草和名』の和名の万葉仮名表記について考察している。万葉仮名用字の一覧表をも掲載するとともに、次のような見解を述べている。

- 万葉仮名に異体字を併用することが極めて少ない。清濁の区別もせず同字を用いる傾向がある。上代特殊仮名遣いの甲乙両類の書き分けが見られない。
- 万葉仮名に本来声点は加えられていたと思われる。

築島（1965）は、『本草和名』の和訓の記載方式について、①「和名〇〇」のように「和名」という冠称を有することや、②和訓が本文と同じ大きさの文字で一行に記されていることが注意すべき点であると指摘している。和訓に声点が付されていたか否かについては、川瀬（1955）と異なる見解、すなわち、恐らく本来は存在しないと述べている。

築島（1981）は、『和名抄』や『医心方』との対照のために、『本草和名』の万葉仮名用字の一覧表を挙げている。築島（1987）は、『本草和名』と『医心方』との間で、万葉仮名の字母を取り上げ、その国語史的変遷について考察している。

本書の和名を語源や語誌の観点から研究したものには、龍野（1978）、堀（1988）、木下（2010）が挙げられる。

龍野（1978）は、『本草和名』の和名を語源によって、①性状から付けられたもの、②産地・生育地を冠したもの、③種類を示すもの、④作用効能によって名付けたもの、⑤和訳によって名付けられたもの、の五種に分類している。

堀（1988）は、『本草和名』の和名「ヲチ」「ミクリ」「ホホヅキ」「タナ」「クキ」について、関連文献を引用しながら、その語源を考察している。

木下（2010）は『万葉集』に詠われる植物名の語誌を個々に考察したものである。「『本草和名』が成立した時代すなわち宋代の漢籍の引用はないから、万葉植物の考証においてこれほど好都合の文献はない」（p.11）と指摘し、『本草和名』を援引しながら、漢名・和名の対応の歴史の変遷を調査している。

2.2.3 医史学分野の研究

医史学は医療にかかわる事柄を経時的にとらえる学問のことである。東洋医学の歴史背景や文献資料を把握し、その本質を明らかにすることが目的の一つである。『本草和名』の成立背景、編纂材料、現存状況などを正確に把握するためには、当分野の研究蓄積を参照しなければ

ならない。

本書を総論的に紹介した研究には、岡西（1977）、真柳（1993）、小曾戸（1996）などがある。内容まで詳しく調査したものとしては、岡西（1964）、真柳（1987a）、真柳（1987b）が挙げられる。

岡西（1964）は、『新修本草』の復元資料として、『本草和名』を取り上げており、両書項目の見出しを比較している。

真柳（1987a）と真柳（1987b）は、本書の紅葉山文庫本を影写した森立之の旧蔵本が台北故宫博物院に保存されていることを報告している。これを底本にして、真柳（1987a）は本書所引の文献を分類・紹介しており、真柳（1987b）は本書の引用書名索引を作成している。真柳氏は、『本草和名』以外の医薬書についても詳しく、漢字文化圏諸国の蔵書を網羅的に調査しており、その研究成果を個人の Web サイト「ここは医史学の真柳研究室です」に積極的に掲載していることも付言しておきたい。

国語学分野においては、本草書が一般の辞典に引用されるという観点から『本草和名』を研究している。医史学分野においてはというと、それに類似した観点、すなわち、本草書と一般の類書の引用関係に注目した研究がある。例えば、森（1960）・森（1961）・森（1964）は兼意が撰述した一連の香薬事典に見られる『修文殿御覧』（中国北齊時代の類書）の引用について考察しており、渡邊（1955b）は『太平御覧』（中国宋代の類書）に引用される本草書について調査している。しかし、『本草和名』に限っていえば、研究があまり進んでいないのが現状である。

3 本草和名の諸本

3.1 はじめに

本書が現代に伝わるまで、その道のりは順調ではなかった。江戸幕府の医師多紀元簡によって紅葉山文庫で発見されるまで、長く所在が不明となっていた。元簡は紅葉山文庫古写本を校訂し、頭注を加え、序文と提要を付し、版行することによって世に広めた。しかし、元となる紅葉山文庫の古写本は明治以降再び所在不明となった。

現存する諸本には、写本、版本、活字本がある。『日本古典全集』所収の複製本（以下「全集本」）は、大槻文彦旧蔵の、森立之父子が書き入れをした版本を写真複製したものである。この複製本は入手しやすいため、研究資料として多用されてきた。しかし、他の伝本についての報告は極めて少なく、諸本間の関係も明らかにされていない。

筆者は先行研究を手掛かりに、日本と台湾の蔵書施設を訪ね、書誌調査を行った。本章では、その調査結果を報告した上で、諸本間の関係を考察する。

「3.3 本草和名の写本」では、台北故宮博物院と無窮会専門図書館神習文庫所蔵の万延元年影写本および、台北故宮博物院所蔵の博愛堂抄本を紹介する。「3.4 本草和名の版本」では、版本の成り立ちについて説明した上で、小島父子書入れ本と森父子ら書入れ本について紹介し、お互いの伝写関係を検討する。「3.5 版本・写本間の異文を示す校讐」では松本書屋本に見られる識語・書入れ・校正符号を手掛かりに、原鈔本による校訂を考察する。

3.2 先行研究の整理

『本草和名』の書誌に詳しい研究として、古くから日本古典全集刊行会（1926）の「本草和名解題」、川瀬（1955）があり、近年においては真柳（1987a）、真柳（1987b）、杉本（2011）などが挙げられる。

「本草和名解題」は全集本に付されており、本書の成立背景や書誌情報を紹介している。全集本の普及に伴い、この解題も広く用いられるようになったが、後に杉本（2011）に批判されるように、識語の解読などが厳密になされておらず、誤りも見られる。

川瀬（1955）は、『本草和名』の複数の伝本を体系的に調査、報告した研究であり、現在においても意義深い研究である。しかし、川瀬氏の書誌調査は殆ど戦前や戦中に行われたもので、現存の状況とそぐわない場合がある。また、杉本（2011）に指摘されるように難解な文章となっており、その記述だけでは氏の真意を測りかねる。ここで、筆者のこれまでの調査結果を生かし、氏が言及した七つの伝本と当時の所在を次にまとめる。

- (1) 幕府の秘庫に埋もれていた古写の一本（今国立博物館に保存するか）⁸
- (2) 森立之の影写本（無窮会文庫蔵、二冊）
- (3) (2) を更に木村正辭が文久二年に転写した本（久原文庫蔵）
- (4) 狩谷掖斎の校正書入本（川瀬家蔵）
- (5) 小島宝素が(4)を以て自ら校正書入を加えておいた本（上野図書館蔵）
- (6) 上記(5)と別種の宝素書入本（松井簡治博士旧蔵、静嘉堂文庫蔵）
- (7) 森立之が幕府医館躋寿館の原鈔本を以て校正し、また(5)と(6)をその子の約子と移写書入を行った本（川瀬家蔵。もと大槻文庫にあった時に、古典全集に影印された。）⁹

この中で、筆者が調査出来たものは(2)(5)(6)(7)であり、それらの現存状況は次の通りである。

(2) は現在も無窮会神習文庫に所蔵されている。

その詳細は「3.3.2 無窮会蔵万延元年影写本」で後述する。

(5) は現在国立国会図書館に収められ、デジタル化資料（請求記号 830 - 17）として公開されている。

その詳細は「3.4.2 小島父子書入れ本：国会本と静嘉堂文庫本」で後述する。

(6) は現在も静嘉堂文庫に所蔵されている。

その詳細は「3.4.2 小島父子書入れ本：国会本と静嘉堂文庫本」で後述する。

(7) は現在松本一男氏の所蔵に帰している。

その詳細は「3.4.3 森父子書入れ本：全集本底本と松本書屋本」で後述する。

一方、川瀬氏のいう(1)および(4)の現在の所在は未確認である。(3)は『大東急記念文庫書目』（1955）に掲載されている「本草和名 二巻 深江輔仁 文久三寫（摹寫） 木村正辭舊蔵」（54 函 12 架 2892 番）に当たると考えられる¹⁰。

真柳（1987a）と真柳（1987b）は、本書の紅葉山文庫本を影写した森立之の旧蔵本が台北故宫博物院に保存されていると報告している。筆者はその研究を手掛かりに、台北故宫博物院を訪ね、当院所蔵の「万延元年影写本」と「博愛堂鈔本」を調査した。その詳細は「3.3.1 台北故宫博物院蔵万延元年影写本」と「3.3.3 台北故宫博物院蔵博愛堂鈔本」で後述する。

⁸ 多紀元簡によって発見された古写本を指している。「今国立博物館に保存するか」は単なる川瀬氏の推測であるか。

⁹ 全集本底本を指す。川瀬氏の手に入ったのは、日本古典全集によって影印された後のことであるという。

¹⁰ ただし、川瀬氏の記述「文久二年」は『大東急記念文庫書目』の掲載「文久三年」と異なり、原本で確認する必要がある。

杉本（2011）は川瀬（1955）を援引しながら、「本草和名解題」の問題点を指摘している。その論点を次にまとめる。

- 識語の解説が粗略なため、版行年を間違えてしまった。
「本草和名解題」は版本の後刷本の上巻の扉にある「寛政丙辰春開鐫」や序文の末にある「寛政紀元八年」だけを根拠に本書が寛政八年（1796）に版行されたと断定している。しかし、下巻巻末に「享和二年壬戌秋八月廿七日初刷装釘」という識語があるので、実際の版行年は享和二年（1802）である。
- 書入れに関わった人物について、森父子を高く評価している一方、小島父子の功績を十分に評価できていない。
全集本に見られる書入れには、小島父子書入れ本からの移写が大量存在しているが、「本草和名解題」ではそれについての検討が不十分である¹¹。
- 「本草和名訓纂」（すなわち、『本草和名』の索引）を山田孝雄の作としているのは誤りである。
川瀬（1955）に記録されているように、この「訓纂」を最初に作成したのは森立之である。山田孝雄がそれを改編しただけである。

上記論点の一部に対して、国立国会図書館デジタル化資料として公開中の資料（請求記号830 - 17）に付されている磯野直秀氏の「書誌の解題/抄録」（掲載時期は不明）でも同様な見解を述べている。杉本（2011）は、磯野氏の研究について言及していないため、それを参照しているかどうかは判らない。ただし、磯野氏の研究は参照されるべき所が多いので、その詳細は「3.4.1 版本の成り立ち」で後述する。

3.3 本草和名の写本

紅葉山文庫古写本について、川瀬（1955）は「今国立博物館に保存するか」と疑問符を打っているが、これ以外にはほとんど言及されておらず、現在に至っても所在不明のままである。一方、その影写本については、川瀬（1955）では、「森立之の影寫本（無窮會文庫蔵、二冊。）」（p.70）と述べられており、また、真柳（1987a）・真柳（1987b）では紅葉山文庫本を影写した森立之旧蔵本が台北故宮博物院に保存されていることが報告されている。

これらの情報を手掛かりに、筆者は台北故宮博物院（2011年12月、2012年10月）と無窮会（2012年9月）を訪ね、書誌調査を行ったところ、台北故宮博物院蔵影写本と無窮会蔵影写本が酷似していることを確認した。さらに、台北故宮博物院にもう一つ、書写年代がより

¹¹ 本章の「3.4.4 松本書屋本と国会本の関係」では、それについて詳しく考察する。

古い写本（博愛堂鈔本）が所蔵されていることを検知したので、それについての調査結果も合わせて報告する¹²。

3.3.1 台北故宮博物院蔵万延元年影写本

真柳（1987a）・真柳（1987b）に言及される森立之旧蔵の影写本は、『國立故宮博物院善本舊籍總目』にある「本草和名二卷 日本深江輔仁撰 日本萬延元年今尾道醇影寫古鈔本 二冊 日本森立之手校並題記」（下冊 734 頁）に該当するもので、その書誌は次の通りである。

〔整理番号他〕故観 6532 - 6533。二卷二冊。

四つ目綴線装。下小口に「本草和名 乾（坤）」との墨書。

〔表紙〕朽葉色（縦 35.5、横 25.5 糎）、題簽に「本草和名上（下）」との外題。見返しに楊守敬像の貼紙がある。

〔本文部分〕無界線（字高 23.5、幅 18.3 糎）、每半葉九行（小字双行）。上巻 55 丁、下巻 50 丁。書き入れ（森約之による）計六箇所。

〔印記〕「星吾七十歳小像」（貼紙）、「楊印守敬」（貼紙、上巻初葉）、「宜都楊氏藏書記」（上巻初葉）、「星吾海外訪得秘笈」（上巻初葉、下巻初葉）、「問津館」（上巻初葉）、「森氏」（上巻末、下巻末）、「五口¹³」「溫故知新術慕都樸實事求是學比青裳」「後進好事鑿者」「森立之印」「字大木」（下巻末）

〔識語〕「右本草和名二篇楓山祕府所蔵二百年前舊鈔／真天壤間無二之寶典寛政年間劉桂山先生／鏤槩行之綴學之士咸被其澤然已非景刻時有／譌繆未無遺感矣近日躋壽醫庠刻醫心方而／今桂山先生之曾孫棠邊先生復以祕府原本校／之其醫心方於是余亦得景寫一本永爲我家之寶／用謄寫者弟子足利人今尾道醇也萬延紀元庚申／六月下旬比讐一過併爲之記華佗術人森立之」（下巻末）

下巻末の識語によると、本影写本の底本は紅葉山文庫所蔵の江戸前期の旧鈔本である。寛政年間に、多紀元簡（劉桂山先生）がそれをもとに版本を作った。考証学者たちはその恩恵を受けていたが、残念ながら、版本には誤りが存在している。この間、医学館の躋寿館で『医心方』の復刻事業が行われた際¹⁴に、元簡の曾孫（棠邊先生）が『医心方』を校訂するために、その原本を用いた。そこで、森立之はそれを借り写すことができた。立之はそれを弟子の今尾

¹² 本稿執筆後、この写本の書誌情報は既に真柳（2006）によって紹介されていることに気付いた。ただし、後述する「3.3.3 台北故宮博物院蔵博愛堂鈔本」では書誌情報に加えて抄録者に関する考察も試みているので、合わせて参照されたい。

¹³ 「五」の次の文字が読み取れないため、「口」で代用した。

¹⁴ 安政元年（1854）から万延元年（1860）にかけて行われた。

道醇に謄写させ、後に自らも校讐を行ったという。「萬延紀元庚申六月下旬」はこの識語が書かれた時期であり、今尾道醇が「旧鈔本」を影写したのはそれより前であると考えられる。

本影写本は、その後、森立之と親交がある楊守敬¹⁵によって中国に持ち込まれ、最終的に台北故宮博物院に所蔵されるようになった。

3.3.2 無窮会蔵万延元年影写本

無窮会蔵本は『神習文庫圖書目録』288頁にある「本草和名 楓山本 深江輔仁 大寫 二冊 番號九二三四 井」に相当するもので、井上頼罔¹⁶の旧蔵である。その書誌は次の通りである。

〔整理番号他〕9234。二卷二冊。

四つ目綴線装。下小口に「本艸和名 上(下)」との墨書。

〔表紙〕枯茶色(縦32.5、横23.5糎)、題箋に「本草和名上(下)」との外題。

〔本文部分〕無界線(字高24、幅18糎)、每半葉九行(小字双行)。上巻54丁、下巻50丁。書き入れ(森約之による)計六箇所。

〔印記〕「無窮会神習文庫」「井上頼罔蔵」「井上氏」(上下巻初葉)

〔識語〕台北故宮博物院蔵万延元年影写本に同じ。

台北故宮博物院蔵本と比べると、筆跡に僅かな違いが見られる(同一人物による書写かどうか判断しかねる)ほか、内容、書き入れなどに相違は見つからない。両本はともに保存状況が良好で、虫食い自体はないものの、虫食いの形をなぞっているような墨書があり、しかもその位置と形が両本の間で一致している。従って、両本は同じ時期に書写され、親縁関係にあるものと言えよう。

無窮会蔵本の旧所蔵者である井上頼罔が、如何にして本影写本を入手したかはまだ判明していないが、井上蔵書を『神習文庫圖書目録』で見ると、本影写本のほかには、『本草経薬和名攷』や『本草古義』など、森立之が関与した書物は少なくない。医学と考証学に熱心だった井上が積極的に蒐集したものと考えられる。

この二本の他に、西尾市岩瀬文庫にも類似する影写本が所蔵されているという。本研究ではこの影写本の調査は出来なかったが、真柳(1987b)によると、「同本には小島の蔵書印があ

¹⁵ 楊守敬(1839「道光十九年」～1915「民国四年」)、字は惺吾、号は鄰蘇老人、中国清末の学者。光緒六年(1880)に、外交官として来日し、滞在中森立之らの協力で多数の善本を入手した。編著に『日本訪書志』がある。歿後、蔵書は中華民国政府に買収され、現在台北故宮博物院や北京の中国国家図書館にその多くが収められている。なお、楊の蔵書目録としては『鄰蘇園蔵書目録』『故宮所蔵觀海堂書目』が知られている。

¹⁶ 井上頼罔(1839「天保十年」～1914「大正三年」)、博識な国学者。平田鍊胤に国学を、権田直助に皇朝医学を学んだ。考証学にも熱心であり、その蔵書は現在、無窮会専門図書館神習文庫として残っている。

のみで識語等はなく、底本・写本などは不明であった。しかし森立之旧蔵本とは体式・内容が完全に同一であり、字体もごく僅かに相違するのみなので、同本は同じく紅葉山文庫蔵本の影写本である」(p.395)。

本稿では、これら類似する三つの蔵本(台北故宮博物院蔵本・無窮会蔵本・岩瀬文庫蔵本)を合わせて「万延元年影写本」¹⁷と称する。

3.3.3 台北故宮博物院蔵博愛堂鈔本

『国立故宮博物院善本舊籍總目』には「萬延元年今尾道醇影寫古鈔本」のほかにもう一つの写本「慶長五年博愛堂鈔本」がある。その書誌は次の通りである。

〔整理番号他〕故観 13129。二巻一冊。

三つ目綴の横本。

〔表紙〕後表紙：香染色(縦 15.2×横 22.8cm)。外題は直書の「博愛堂鈔本艸和名」、その他「…叢書」の題箋も僅かに残存。

原表紙：本文共紙で、「文庫抜書 上／如見君」(第一巻 1 才)、「文庫抜書 中」(第二巻 1 才)との内題が見られる。

〔本文部分〕本文部分は、楮紙を使用。無界線(字高 13.3×幅 19.8cm)、每半葉約十三行(小字双行)。上巻 26 丁、下巻 27 丁。

〔構成〕上巻：1 才「文庫抜書 上／如見君(別筆)」、2 才「慶長五年十二月四日／江戸御文庫醫書抜書／意安／○葉氏錦驗方 三巻／○衛生家寶方 六巻」、2 ウ「○續易簡方 六巻／○太平聖恵方 百巻」、3 才「○十便良法 四十巻」、8 才「○外臺秘要」、15 才「楊氏家蔵方二十巻」、15 ウ「延喜式 五十巻」、16 才「本草和名 上下巻」、38 ウ(白紙)、39(遊紙)、40 裏表紙(共紙)。

下巻：1 才「文庫抜書 中」、2 才「本草和名下巻 新撰」、27 ウ(白紙)、28(遊紙)、30 裏表紙

〔印記〕「小嶋氏図書記」(上巻 2 才)、「星吾海外訪得秘笈」「博愛堂記」(上巻 2 才、下巻 2 才)

表紙とそこに書かれてある外題は後で付けられたと考えられる。もとの書名は「文庫抜書」で、紅葉山文庫にある医書の抜粹という意味である。書写年代は慶長五年(1600)で、筆者の調査範囲では一番古い。

抄録者については、上巻冒頭に記されている「如見君」(1 才)と「意安」(2 才)を手掛かりにして調べてみると、医家名門の吉田家に生まれた「吉田宗恂」とその子「吉田宗達」の存在

¹⁷ ただし、前述のように、影写の時期は万延元年より前である可能性もあるので、注意すべきである。

が視野に入った。次に、『日本人名大辞典』（2001）と『京都の医学史』（1980）を参考にして、吉田家の来歴をまとめる。

- 吉田家の四代目は京都の名医吉田宗桂（1512「永正九年」～1572「元龜三年」）であり、二度の渡明で医術を究め、「意安」と称されるようになった。その後、「意安」の称は後代に受け継がれる。
- 第五代目に当たるのは吉田宗桂の次男吉田宗恂（1558「永禄元年」～1610「慶長一五年」）であり、別称は光政、意安、玄子など。医師として豊臣秀次に仕え、後陽成天皇の治療にも貢献した。のちに徳川家康に召されて、本草研究の顧問をつとめた。著作に『医方大成論抄』『歴代名医伝略』『本草序例抄』など。
- 第六代目は吉田宗達（1584「天正十二年」～1622「元和八年」）であり、別称は吉皓、意安、如見。祖父と父に本草学を学び、徳川家康・秀忠に仕えた。著作に『吉氏方』『医学類聚』『本草和名集』など。

上記の情報によると、「意安」と称される人物は一人に止まらず、これだけでは抄録者が特定できない。成立年代も考慮に入れると、「慶長五年」に吉田宗恂は42歳で、吉田宗達は16歳であり、この二人は抄録に携わった可能性がある。

また、上巻初葉に別筆で書かれている「如見君」についても考えてみたい。「如見」は吉田宗達の号であるが、敬称の「君」が付されているので、宗達自身で書いたものとは考えにくい。

そのため、本文部分の抄録作業に当たったのが宗達であり、その後、別の人によって、「文庫抜書 上／如見君」という内題を付けられたと推測できる。

次に、本鈔本の内容について調査した結果を報告する。前掲の書誌情報にあるように、本鈔本には『本草和名』のほか、『十便良法』『外臺秘要』などの抜粋も見られる。『本草和名』の部分に注目して、万延元年影写本と比較すると、次の相違点が見られた。

I. 項目数が万延元年影写本より少ない（抜粋であるためか）。

掲出項目は、上巻230余り、下巻380余りである。両方とも万延元年影写本の六割近くを占める。「第二十卷有名無用」に相当する部分で、全193種の中、「別羈」「藁草」などの5種しか抄出されていない。

II. 文字の脱落により、見出しと下の内容が合わない場合がある

例えば、「鋼鐵」項（上巻19ウ）の下に「一名鐵漿【出兼名苑】和名加奈久曾一名加祢乃佐比」という内容が書かれている。しかし、万延元年影写本で確認すると、その内容が次の項目「鐵精」の下にあるべきであることが分かる。

- III. 掲出順位は万延元年影写本にほぼ一致する¹⁸が、各巻の冒頭に、「第三巻 玉石上二十一種」のような品目数を示す記述が見られない。
- IV. 日本においても産出される場合は、万延元年影写本で見られない「和」を冠することがある。例えば、「緑青 和出長門国」（上巻 16 ウ）。
- V. 和名に合点が施されている項目や、書き入れがなされている項目がある。
例えば、「丹砂」項（上巻 16 ウ）では、「一名針砂」の右側に「一些名不審」という書入れ、「朱贏」項（上巻 22 ウ）では、右下空白に「和見別本」という書入れがなされている。

一方、版本との比較も加えると、万延元年影写本との間で一致する部分が多く見受けられた。その共通点を次に示す。

- i. 「蒼石」「蓋〈草）」などの項目は、万延元年影写本では前項目に続いて書かれているが、版本ではそれを前項目と分離させ、独自項目として立てている¹⁹。博愛堂鈔本でも同様な特徴が見られる。
- ii. 万延元年影写本の空字と脱字は博愛堂本でも確認できる²⁰。例えば、
「朴消」項において、版本では「朴消...出若狭備中国」となっているのに対して、万延元年本と博愛堂本では「狭」字のところが空白となっている。
「蓋〈草）」項において、版本では「蓋草」となっている一方、万延元年本と博愛堂本では「草」の字が欠けている。

次節で詳しく取り上げるが、版本を作る際に、意図的な校訂が加わり、意図的でない誤刻もあったため、そこから写本との間の異文が生まれた。その異文を確認するためには、二種の写本を相互的に見ていくことが望ましい。以下の考察は、写本の底本に万延元年影写本を用いるが、博愛堂鈔本の存在も念頭に置くように心がける。

3.4 本草和名の版本

これまでの研究（特に国語学の分野）においては、『本草和名』のテキストに、『日本古典全集』所収の複製本「全集本」を利用するのが一般的であった。全集本の底本となったのは、大槻文彦旧蔵の、森立之父子が書き入れをした版本である。この版本には、多紀元簡が版行当時

¹⁸ 例外もあり、例えば、「白薬」と「蘿麻子」（上巻 30 オ）の順番は逆となっている。

¹⁹ 後述する「5.3.1 版本・写本間の異文」を参照。

²⁰ 後述する「3.5.2 原鈔本の空字・欠字を示す校正符号」を参照。

に加えた要素（序文・提要・頭注）と、その後森父子が版本に書き残したもの（識語・書き入れ・校正符号）があるため、それらの要素を理解した上での利用が望ましい。

本節では、まず版本の版行年と種類、および多紀元簡によって行われた校訂を考察する。次に、森父子書入れ本と密接な関係にある二種の小島父子書入れ本を紹介する。続いて、蔵書印を手掛かりに、森父子書入れ本が全集本の底本となってから松本書屋へ所蔵されるようになるまでの経緯を整理する。最後に、識語・書入れ・校正符号を手掛かりに、松本書屋本と国会本との関係を検討する。

3.4.1 版本の成り立ち

3.4.1.1 版行年と種類

『本草和名』の版行年については、これまで「本草和名解題」の論述から、寛政八年が通説になっていたが、それが誤認であることが杉本（2011）によって指摘されている。請求記号 830 - 17 の国立国会図書館デジタル化資料（以下「国会本」）に付されている磯野直秀氏の「書誌の解題/抄録」でも同様の見解が述べられている。

磯野氏は『本草和名』版本の版行年と種類について詳しく解説しており、参照されるべき所が多い。その全文を次に示す。

本書は『新修本草』所収品の漢名一和名辞書で、深江輔仁（すけひと、生没年未詳）が勅を奉じて延喜 18 年（918）頃に作成した。すでに散逸した古書からの引用が多いことでも知られる。『本草和名』は長いあいだ存否不明の書だったが、寛政 6 年（1794）に幕医多紀元簡（もとやす、のち幕府医学館主）が幕府の紅葉山文庫で古写本を発見、それを校訂して刊行した。本資料は、考証学者小島尚質（なおかた）・尚真（なおざね）父子の旧蔵書で、諸書を用いて父子がさらに校注を進めたものである。一方、刊行に関連する多紀家の記録も写しており、それによって元簡が幕府の出版許可を得るために提出した文書が判明するし、「享和二年 [1802] 壬戌秋八月廿七日初刷装釘」とあって、出版年が通説の寛政 8 年（1796）ではないことも明らかになる（『江戸出版書目』によると、出版・販売の許可を得たのは寛政 12 年 12 月）。なお、『日本古典全集』に所収されている森立之・約之父子旧蔵『本草和名』刊本への書き込みは、上記多紀家記録を含め、本資料の小島父子書き入れの転写が少なくない。本書刊本には、初版と後刷の 2 種類がある。初版—表紙は朱色／上巻見返しに出版事項は無し／下巻末尾、「江戸浅草新寺町・和泉屋庄次郎発行」：小島氏本（本書）、121 - 37 本など。後刷—表紙は藍色／上巻見返しに出版事項（書名・著者名など）／下巻末尾、「三都発行書林」として 9 軒の書肆名：特 1 - 218 本、『日本古典全集』森氏旧蔵本。（磯野直秀）

上記の解説において、まず指摘されたのは版行年の誤認である。根拠となるのは次の二点である。

- I. 国会本には、多紀元簡が幕府の出版許可を得るために提出した文書が記録されている²¹。「享和二年（1802）壬戌秋八月廿七日初刷装釘」とあって、通説の寛政8年（1796）出版ではない。
- II. 『江戸出版書目』によると、出版・販売の許可を得たのは寛政12年12月のことである²²。

次に指摘されたのは、本書の版本に朱色表紙の初版と紺色表紙の後刷の二種類があることである。磯野氏の解説を参考にして、初版と後刷の二種の構成を示した上で、筆者が調査した範囲で判明した、それぞれの種類に属する蔵本を列挙する。

朱色表紙の初版は、上巻²³の見返しに記載事項がなく、一枚の遊紙を挿み、続けて順に序文・提要・本文がある。下巻末に「江戸浅草新寺町 和泉屋庄次郎發行」という刊記がある。その構造を図3-1に示す。

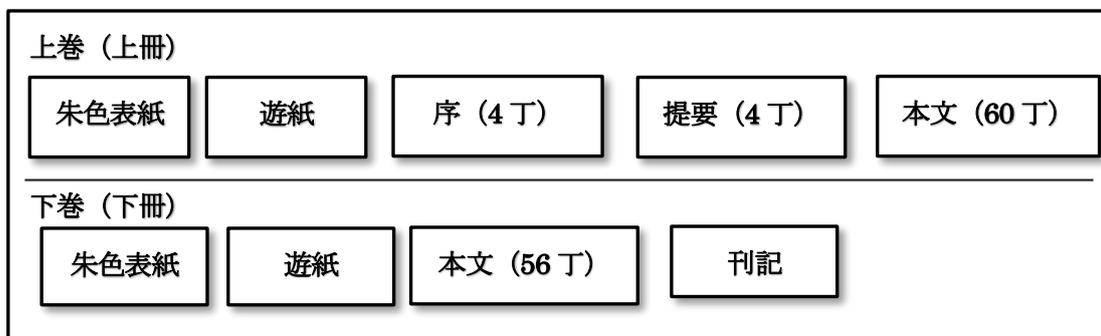


図3-1 初版の構造

この種に属するものに後掲のものがある。

²¹ この記録は小島尚真によって写されたものである。その詳細は「3.4.2 小島父子書入れ本：国会本と静嘉堂文庫本」と「3.4.4 松本書屋本と国会本の関係」を参照。

²² 『享保以後江戸出版書目』で確認すると、「寛政十二年極月廿三日割印」の項に、「寛政十二申年十二月 新刻本艸和名（同百二十六丁） 全式冊 源江輔仁著丹波元簡校 板元売出し 和泉屋庄次郎」とある。

²³ 版本では写本の形態に合わせて「上巻」「下巻」と記しているが、実際の形態から見ると「上冊」「下冊」に相当する。

- 国会（国立国会図書館）830 - 17、国会 121 - 37、国会 499・9 - H641 - H
- 内閣（国立公文書館）196 - 61、内閣 196 - 62、内閣 196 - 63、内閣 264 - 14、内閣 264 - 25
- 早稲田（早稲田大学図書館）21 - 798、
- 静嘉堂（静嘉堂文庫専門図書館）504 函 8 架 20324 号、静嘉堂文庫 46 函 1 架
- 故観（台北故宫博物院觀海堂蔵書）13125 - 13126

紺色表紙の後刷は、上巻の見返しに「大醫博士深江輔仁撰 本草和名 寛政丙辰春開鐫」と記し、続けて順に序文・本文・提要がある。下巻の末尾に奥付があり、そこに「三都発行書林」として、京都・大阪・江戸の九軒の書店の名を挙げている。その構造を図 3-2 に示す。

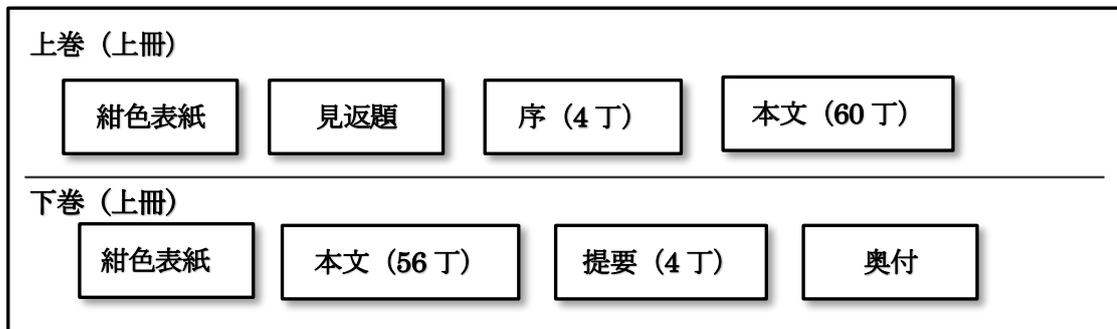


図 3-2 後刷の構造

この種に属するものに下掲二本がある。

- 全集本底本
- 国会（国立国会図書館）特 1 - 218

今までの研究によく使われてきた複製本「全集本」は、全集本底本に「解題」と「訓纂」を付したものである（図 3-3）。

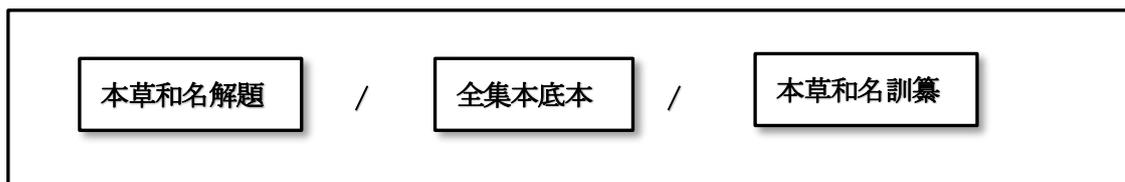


図 3-3 複製本の構造

3.4.1.2 多紀元簡による校訂

元簡は序文で「……偶於秘府書目中、見鈔本々草和名二卷、因請謄録以蔵……獨奈載曆年祀殆踰八百、傳寫訛異、漫不可攷、於是據本草、爾雅、説文、玉篇、并源能州和名類聚、簡遠祖所撰醫心方等書、校訂同異、改補誤脱、粗得可觀……」と述べており、『証類本草』²⁴『爾雅』『説文解字』『玉篇』『和名類聚抄』および『医心方』等を以て本書を校訂したことを明かしている。

元簡が具体的にどこをどのように校訂したかについて、図3-4に示す「雲母」項の部分为例にして見よう。三行目にある「一名地涿」の「涿」に対して、上欄の頭注では「按涿原本缺今据証類校補」と記している。これは、校訂箇所（「涿」）を明示した上で、原本ではどのようなになっているか（「原本缺」）、どの本を根拠にしているか（「今据証類校補」）を記録したものである。

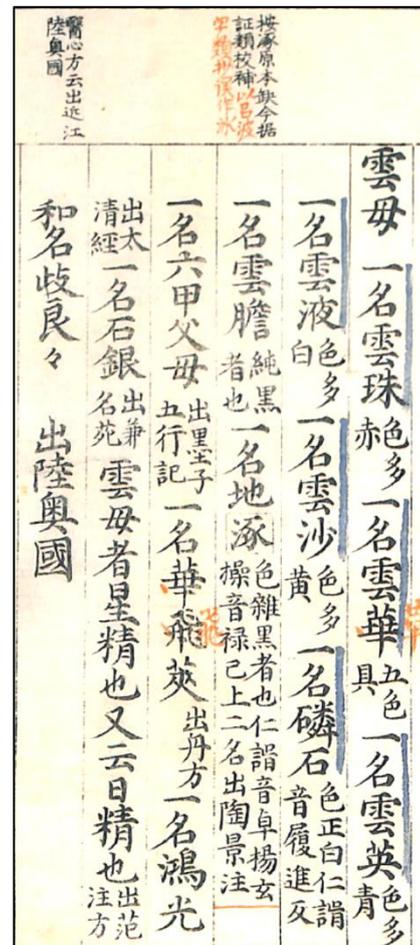


図3-4 松本書屋本 上3才

3.4.2 小島父子書入れ本：国会本と静嘉堂文庫本

小島尚質（1797～1849）、号宝素、江戸時代後期の医師、医学書の伝写と校訂に努めた。小島尚真（1829～1857）はその息子である。小島父子は、諸書を用いて本書に多くの校注を施した。

「3.2 先行研究の整理」で述べたように、川瀬（1955）によると、小島宝素が狩谷椽斎の校正書入本を以て自ら校正書入を加えておいた本が上野図書館に所蔵されており、また、別種の宝素書入本が静嘉堂文庫に所蔵されているという。

3.4.2.1 国会本

川瀬（1955）がいう上野図書館所蔵本は、「3.4.1.1 版行年と種類」で紹介した国会本であ

²⁴ 序文にある「本草」は広義的な本草書を指していると考えられるが、本文部分に付された頭注で確認すると、実際には『証類本草』が考証に用いられたことが分かったので、ここでは具体的な書名を示した。

る。その電子画像は「国立国会図書館デジタル化資料」のホームページで公開されている。川瀬氏によると、この本は、小島宝素が狩谷栞齋の校正書入本を借覧して、栞齋の書入れを移写し、さらに自らもまた『香薬抄』等で校正書入れを加えたものである。狩谷栞齋の校正書入本について、川瀬氏は次のように述べている。

狩谷栞齋は、和名抄に本書が引用せられてゐる點から特に注目して研究したらしく、版本へ朱・墨・藍の三筆を以て書入れを加へてをり、和名抄・伊呂波字類抄・千金翼方・證類本草等その校異を全巻に注記してゐる。(享和版、初印、丹表紙本。二冊。各冊首に目次を加筆し、各冊首に「伊澤文庫」「洒竹文庫」朱印を捺す。家蔵。)

筆者が調査した範囲では、狩谷栞齋の校正書入本は見つからなかったが、この記述から、狩谷栞齋が諸書を用いて、『本草和名』に対して綿密な校訂を行ったことが窺える。

国会本にある校正書入れ(移写された栞齋の書入れを含む)は、さらに後述する森父子三色書入れ本へ転写されており、両本の関係については「3.4.4 松本書屋本と国会本の関係」で詳しく述べる。ここでは、まず、小島父子の識語を見よう。

A 上巻本文末(小島宝素、朱筆)

天保四年八月、据狩谷栞齋伊呂波字類抄參校本審訂、併及栞老校語、質記
(本草和名上)²⁵卷二月廿九日、西城直舎校

B 下巻本文末(56才)(小島宝素、朱筆)

(その一)

天保四年九月三日据伊呂波字類抄參校本 西城直舎灯下朱校。往年、余從屋代弘賢借字類抄、与亡友山本恭庭同校未就、恭庭已為泉下人。今再照狩谷望之手校本率功、併記狩谷氏校語、以示子孫之嗣是学者。江戸小島質誌

(その二)

天保十五年七月廿八日、据香薬抄引一校、併及香薬抄裏書、時雨窓畫静、質又誌

C 下巻本文末(56才)(小島尚真、朱筆)

此書寛政校刻之際、間有誤脱文字、曾欲依醫學原鈔訂正、以事務倥傯不果。頃之友人

²⁵ 版本の文字「本草和名上」の下に、「卷二月廿九日西城直舎校」と手書きの文字がある。

森立之就原鈔校訂尤詳、乃假立之校本校勘一過。更以原鈔本再審、卒業聊記其由。安政乙卯夏五初二日、尚真識

D 下巻末 (56 ウ) ～奥付 (小島尚真、墨筆)

本文 田安殿近習番 岡田多門

序 奥御右筆手傳 屋代太郎

提要 浪人 武田源次郎

享和二年壬戌秋八月廿七日初刷装釘

本草和名與申候、當世上ニ寫本流布仕候、處何共疑敷書ニ而御座候、依之此文庫ニ有之本草和名二冊、拝借仕寫候、校考相加板刻仕蔵板仕世上弘行れ候様、仕度奉存候、此段奉願候、以上 四月 多紀安長

類例 奥御医師武田叔安 右叔安儀御文庫有之候、痘科鍵與申候書、拝借仕写取、享保十五戌年開板仕、今以世上弘相傳申候以上 四月 多紀安長

右書面寛政六年寅年四月十五日、亀井駿河守御小納戸頭取を以、御側御用掛平岡美濃守殿候差出申処、即日相濟候旨、駿河申聞候

右安長法眼手記に据てしるす 尚真 (花押)

川瀬 (1955) と杉本 (2011) を参考にして、上記の識語について解説を加える。

- 上巻本文末の A によると、宝素は天保四年 (1833) 八月に、狩谷掖齋の「伊呂波字類抄参校本」をもって審訂し、掖齋の校語を移写併記した。
- 下巻本文末の B (その一) によると、宝素は天保四年 (1833) 九月三日に、「伊呂波字類抄参校本」をもって、朱校を加えた。
以前に屋代弘賢より「字類抄」を借り、山本恭庭とともに校訂を試みたが、途中で山本恭庭が亡くなった。この度、再び掖齋の「手校本」に照らして校訂を終え、掖齋の校語も併記した。
- 下巻本文末の B (その二) によると、宝素は天保十五年 (1844) 七月二十八日に、「香葉抄引」による校訂を行い、「香葉抄裏書」の記すところも併記した。
- 下巻本文末の C は、安政二年 (1855) 五月二日に、小島尚真によって記されたものである。それによると、本書は寛政校刻の際にたまたま誤脱文字が生じ、尚真は医学館の原鈔本による訂正を行いたかったが、仕事が忙しいため、出来なかった。この頃、友人の森立之が原鈔本をもって詳しく校訂したのを知り、立之の校本を借りて校勘を行った。さらに、原鈔本による再審も行った。

- 下巻末の D は、小島尚真によって書き写された、刊行に関連する多紀家の記録である。「享和二年壬戌秋八月廿七日初刷装釘」とあるので、版行年を寛政八年とするのが間違いであると判る²⁶。

なお、国会本には小島父子の蔵書印（「小島氏図書記」「尚真校読」）のほかに、小杉楹邨（1835～1910）の蔵書印（「温故堂文庫」「杉園藏」）も押されており、彼による赭筆の書入れが次の箇所に見られる。

上 8 ウ、上 16 オ、上 23 オ、上 25 ウ、上 42 オ、上 46 ウ、
上 47 ウ、上 49 オ、上 52 ウ、上 54 オ、上 58 オ、下 17 ウ、
下 22 ウ、下 30 オ、下 34 オ、下 36 ウ、下 41 ウ

医学者の森父子や小島父子とは関心が異なるためか、国学者である小杉楹邨の書入れは、万葉仮名和訓のところに集中している。

3.4.2.2 静嘉堂文庫本

川瀬（1955）がいう静嘉堂文庫に所蔵される別種の宝素自筆書入本は、現在も静嘉堂文庫に所蔵されている。筆者は 2013 年 2 月に静嘉堂文庫でこの本について調査を行った。その書誌は次の通りである。

〔整理番号他〕 504 函 8 架 20324 号。二冊。

〔表紙〕 朱色。題箋に「本草和名 攷古書庫 上（下）冊」との外題。

〔印記〕 「静嘉堂珍藏」「松井蔵書」「多奈加乃勝比呂」「水川氏収蔵印」「與住草屋」（上巻序初葉、下巻本文初葉）、「静嘉堂珍藏」（上巻本文初葉）

〔識語〕 「文化十三年歳次丙子潤八月十六日従伊呂波字類抄校訖 源尚質識」（上巻本文末、朱筆）

「據香要抄交合畢」「乙亥十月二十四日夜以長生療養方一交了／文化丙子後八月朔従香字抄一交畢／源尚質識」（下巻本文末、朱筆）

〔書入〕 匡郭の上や上欄に朱と墨の書き入れが多数ある。

この本は松井簡治の旧蔵にかかるものである。上巻本文末と下巻本文末に小島宝素による識語が書かれている。そこから、文化十二年（1815）十月から文化十三年（1816）八月までの間

²⁶ その詳細は「3.4.1 版本の成り立ち」で既に述べた。

に、宝素が『伊呂波字類抄』『香要抄』『長生療養方』『香字抄』によって校正書入れを行ったことが判る。

識語の書写時期は国会本より古く、川瀬（1955）では、「その後椽齋の校正本を借りて、比照したものと思はれる」と述べられている。また、川瀬（1955）によると、森父子はこの本をも借覧し、書入れを写したという²⁷。

多数ある書入れのうち、次に挙げるものが特徴的である。

- 「案凡二十六種」（上 1 ウ、朱筆）
- 「今攷凡二十九種、案證類玉石中品一種唐本餘銀膏」（上 5 オ、朱筆）
- 「案凡三十一種」（上 8 オ、朱筆）
- 「案凡四十種」（上 11 ウ、朱筆）
- 「尚質案凡四十三種、丹波廉夫先生案医心方有蕪方木、接骨木、證類据唐本、収此二種、字類抄亦載接骨木【注云ミヤツコキ】二書和名、並原此書、而此云四十五種、則知古本无在、今本誤漏者、丙子九月五日書」（下 1 オ、朱筆）

『本草和名』各巻の初頭には、項目数に関する記述がある（「5.3.2 見出しの漢名」を参照）。これらの書入れは、それに対する校訂である。『新修本草』の復元を手掛けた小島宝素にとっては、このような情報が非常に重要なのであろう。

3.4.3 森父子書入れ本：全集本底本と松本書屋本

日本古典全集所収の複製本はモノクロ写真版となっているが、それに付されている「本草和名解題」によると、もとの底本には墨、朱、群青の三色の書き入れがあるという。古典全集刊行会は、もとの体裁を示すために、上巻本文初葉を原色複製して巻頭に挿んでいるが、全体的に書入れの色合いが認識できず、筆跡もかなり読みにくくなっている。

武（2013）は全集本と万延元年影写本との関係について考察を行ったが、全集本底本の所在を突き止めることは出来ず、現在所在不明であると述べている。その後、小曾戸洋氏の指摘により、森立之父子三色書入れ本が、1980年代に東京古典会のオークションに出され、松本一男氏によって入札されたことと、そして現在、『松本書屋貴書叢刊』にオールカラーで影印出版されている（以下「松本書屋本」）ことが判明した。武（2016）は、この情報に基づき、全集本底本が松本書屋に所蔵されるようになった経緯について考察を行った。次に、この武

²⁷ 松本書屋本で確認すると、上欄頭注の後ろに記されている「長生療養方同」（上 3 ウ、上 6 ウ）、「長生同」（上 7 オ、上 35 オ）や、匡廓の上にあるスペースに記されている「長生 生鐵【和名久呂加祢】」（上 7 ウ）、「菖〇〇補【長生療養方】」（上 13 ウ）、「長生療養方名度利之久佐」（上 16 ウ）は、静嘉堂文庫本からの移写であると考えられる。

(2016) の成果を紹介する。

松本書屋本と全集本とを比較してみると、識語や書入れが一致しており、全集本が松本書屋本の前身であることに間違いない。ただ、所蔵者が増えていった結果として、冒頭と巻末に押されている蔵書印の数は、全集本より松本書屋本のほうが多い。松本書屋本に見られる蔵書印は次に示す通りである。

上巻序の初葉と下巻1オ：「大槻文庫」「文彦」「森氏」「松本蔵書」「宝玲文庫」

上巻末(60ウ)と下巻「提要」の末：「月明荘」「一馬」

「森氏」は、森立之(1807～1885)と森約之(1837～1871)父子の蔵書印で、「大槻文庫」「文彦」は、大槻文彦(1847～1928)の蔵書印である。これらの蔵書印は全集本にも見られる。

一方、「一馬」「宝玲文庫」「月明荘」「松本蔵書」は、全集本では見られないもので、それぞれ川瀬一馬(1906～1999)、フランク・ホーレー(1906～1961)、反町茂雄氏(1901～1991)、松本一男(1946～)の蔵書印である。

すでに武(2013)で紹介したように、森父子三色書入れ本『本草和名』は、森約之の妻が大槻文彦の姉であるという繋がりで大槻文庫の蔵に帰した。大槻文庫に所蔵されている間、日本古典全集刊行会によって影印出版(1926年)され、そこから生まれたのが全集本である。

ここまでの経緯は川瀬(1955)で確認できるので、本書は大槻文庫を出た後に川瀬氏の手に入ったものと考えられる。この川瀬一馬と同時代の人物に、反町茂雄とフランク・ホーレーがいる。

反町茂雄は、昭和時代の書誌学者、古書籍商。1932年に店舗を持たない稀覯本専門の古書店「弘文荘」を設立した。「月明荘」は、反町茂雄が稀書善本であることを認めた書物にのみ押印されたという。

フランク・ホーレーについては、横山(2003)が詳しい。それによると、フランク・ホーレーは、イギリス人言語学者、古書蒐集家、コレクションの「宝玲文庫」が質量ともに優れている。1931年にホーレーは語学教師として来日し、日本語に堪能で、書誌学にも通じ古書を収集した。1941年、第二次世界大戦の開戦により英国に送還され、蔵書は日本政府に接収された。戦後、ホーレーはザ・タイムズ紙の特派員として、再度来日を果たし、接収された書物の奪還に取り組んだ。辞職後、(1952年に)東京から京都山科に移り、歿するまでそこに住んでいた。

「外国人の日本書蒐集家としては、空前の大家である」と反町茂雄はホーレーを称賛しており、古典籍の蒐集という共通点から生まれた二人の付き合いは、戦前から始まった。ホーレーは京都に移住した後、経済的な理由で、蔵書を手放すようになった時期に、反町茂雄が頻繁に

山科のホーレー邸を訪ねるようになったという²⁸。森父子三色書入れ本『本草和名』もこの時期に、反町茂雄に売却された可能性が高い。

『弘文荘待賈古書目総索引』を調べると、「本草和名 丹波元簡校寛政八年刊 森立之書入写 二冊」が、昭和三十五年（1960年）の『弘文荘待賈古書目』（第35号）に載せられていることが分かった。

上記のことから、本書が蔵書家のもとを渡り歩いたその経緯を下図のように簡略にまとめておきたい。



図 3-5

松本書屋本『本草和名』は全集本に比べて、広く知られていないのが現状であるため、本稿が今後の研究の手掛かりとなることを願っている。

3.4.4 松本書屋本と国会本の関係

前項で、蔵書印を手掛かりに松本書屋本の所蔵経緯をみてきた。森父子、大槻文彦、川瀬一馬に加えて、反町茂雄、フランク・ホーレーも本書を所蔵していたことが分かった。本項では、識語・書入れ・校正符号を手掛かりに、松本書屋本と国会本との関係を検討する。

3.4.4.1 識語からみた両本の関係

松本書屋本と小島本の関係や校注転写の経緯を把握するために、巻末にある識語を参照したい。論述の便宜のために、松本書屋本の識語をここに提示する。下線が引かれている部分は、国会本からの移写である。

① 上巻本文末（60 才）

a（朱筆、小島宝素識語の移写）

天保四年八月、据狩谷掖齋伊呂波字類抄參校本審訂、併及掖老校、語質記。上卷癸巳²⁹
二月廿九日、西城直舎校

²⁸ 反町（1993a）、反町（1993b）を参照。

²⁹ 「癸巳」二字は「上巻」の横に書かれている。

b (森立之、朱筆)

安政乙卯三月廿四日、以躋寿館原抄本比較竟、華佗巷人源立之

② 下卷本文末 (55 ウ・56 オ)

a (森立之、朱筆)

安政二年四月初八日、以躋寿館所蔵原鈔本比較竟、此本影抄楓山御庫舊抄本者、福山森立之記

b (その一) (森約之、墨筆)

安政元年十二月初七日、以多紀本醫心方諸薬和名篇壹校過、於薬名大字而已夾注細字、及和名未邊校之 約之

(その二) (森約之、群青筆)

安政三丙辰二月廿六日、以青藍標抹本經白字一名之旁、以便檢閱耳 稷庭約之

c (その一) (朱筆、小島宝素識語の移写)

天保四年九月三日据伊呂波字類抄參校本 西城直舎灯下朱校。往年、余從屋代弘賢借字類抄、与亡友山本恭庭同校未就、恭庭已為泉下人。今再照狩谷望之手校本率功、併記狩谷氏校語、以示子孫之嗣是学者。江戸小島質誌

(その二) (朱筆、小島宝素識語の移写)

天保十五年七月廿八日、据香薬抄引一校、併及香薬抄裏書、時雨窓畫静、質又誌

d (墨筆、小島尚真識語の移写)

本文 田安殿近習番 岡田多門

序 奥御右筆手傳 屋代太郎

提要 浪人 武田源次郎

享和二年壬戌秋八月廿七日初刷装釘

本草和名與申候、當世上ニ寫本流布仕候、處何共疑敷書ニ而御座候、依之此文庫ニ有之本草和名二冊、拝借仕寫候、校考相加板刻仕蔵板仕世上弘行れ候様、仕度奉存候、此段奉願候、以上 四月 多紀安長

類例 奥御医師武田叔安 右叔安儀御文庫有之候、痘科鍵與申候書、拝借仕写取、享保十五戌年開板仕、今以世上弘相傳申候以上 四月 多紀安長

右書面寛政六年寅年四月十五日、亀井駿河守御小納戸頭取を以、御側御用掛平岡美濃守殿候差出申処、即日相濟候旨、駿河申聞候右安長法眼手記に据てしるす 尚眞（花押）

③ 下巻提要末（4ウ）（森約之、墨筆）

嘉永癸丑大呂廿三日晩、書畢於馬米之品知薬室南軒下、其下巻初葉到廿三葉家嚴所記即是源約之棧庭居士借寫寶素堂本也

これらの識語の実際の執筆者が森父子であることに疑いはないが、その中の①a、②c、②dは、小島父子の書き入れを移写したものである。それ以外の①b、②a、②b、③は森父子によってはじめて示されたものである。立之の識語は朱色で書かれており、約之の識語は、墨色や群青色で書かれている。

- 上巻本文末の①bと下巻本文末の②aによると、立之は躋寿館所蔵の原鈔本をもって、安政二年（1855）三月二十四日に上巻を、安政二年（1855）四月初八日に下巻を校訂し終えた。
- 下巻本文末の②b（その一）によると、約之は安政元年（1854）十二月初七日に、多紀本医心方の諸薬和名篇をもって、薬名大字及び夾注細字のところを校訂し終えたが、和名のところはまだ校訂していない。
- 下巻本文末の②b（その二）によると、約之は安政三年（1856）二月二十六日に、検閲の便宜を図るために、青藍の筆で本草経の白字一名に相当する部分に線を引いた。
- 下巻本文末の③は、約之が嘉永六年（1853）十二月（陰曆）二十三日に書いたもので、それによると、下巻初葉から23葉までの、家嚴（立之）の記すところは、約之が宝素堂から借りた本によるものである。

国会本には、上記の下線部以外に、次の一条もみられる。

C 下巻本文末（56才）（小島尚真、朱筆）³⁰

此書寛政校刻之際、間有誤脱文字、曾欲依醫學原鈔訂正、以事務倥偬不果。頃之友人森立之就原鈔校訂尤詳、乃假立之校本校勘一過。更以原鈔本再審、卒業聊記其由。安政乙卯夏五初二日、尚真識

³⁰ 掲出番号「C」は「3.4.2 小島父子書入れ本：国会本と静嘉堂文庫本」による。

③とCを合わせてみると、校訂本の貸し出しは一方的ではない。嘉永年間に森約之は小島の校訂本を借り、父の立之と移写を進めた。その後、安政年間に小島尚真は原鈔本による校訂に当たり、森立之から校訂本を借りていた。

3.4.4.2 書入れからみた両本の関係

「3.4.4.1 識語からみた両本の関係」では、識語の解説によって、森父子が書入れをした松本書屋本と小島父子が書入れをした国会本との貸し出しや移写の経緯を整理してきた。前者には後者からの移写が多く存在することや、後者にある原鈔本による校訂は前者を参考に行っていることが明らかになった。次に、両本にある書入れと校正符号を比較することによって、移写がどのような形式で進められたかを見てみよう。

I. 森父子によって移写された校注ともとの校注

国会本にある校注の多くは、森父子によって忠実に再現されているが、中には形を変えて取り入れられたものもある。例えば、上5オ6「禹餘糧」条

禹餘糧【陶景注云禹昔行山乏食採此充糧而弃其餘故以名之】一名白餘……³¹

のところで、国会本では匡郭の上に「證類禹昔倒」、上欄に「證類白餘下有糧字千金翼方同此脱」という書入れがなされている。それは本文にある「禹昔」と「白餘」に対する校注である。意味するところは、『證類本草』において、「禹」と「昔」の順序が逆となっていることと、『證類本草』と『千金翼方』においては、「白餘」の下に「糧」という文字があるが、ここでは脱落していることである。

一方、松本書屋本では、匡郭の上や上欄に書入れがなされていないが、本文の「禹昔」のところに順序入れ替え記号「乙」を書き、横に「証倒」と記しており、「白餘」の下に補入記号「o」を書き、横に「糧【証翼 此書誤脱】」と注記している。

このように、国会本においては、校注を当該個所の上部余白に書くのに対して、松本書屋本では、それを本文中に盛り込む傾向が見られた。

II. 森立之が行った校訂とそれを参考にした小島尚真の校訂

前述のように、原鈔本による校訂に当たっては、先に行われた森立之の校訂と、それを参考にして行われた小島尚真の校訂がある。両者を比較すると、校正符号の使用や用字の校訂に相

³¹ 所在の「上5オ6」は「上巻5丁表6行目」を示す。「【】」は小字双行を示す。以下同じ。

違が見つかった。

校正符号に関しては、森立之は原鈔本で「空缺事例」となっている部分に「(」を付けているのに対して、小島本では見せ消ち符号の「o」³²を用いている。例えば、上8ウ9「方解石」条（下掲）にある「石」と「唐」。

方解石【仁譚音佳買反】一名黄石【本條】一名黄味石【出雜要訣】一名夕石【出積薬】唐

III. 用字の校訂の相違

- 小島本に校訂あり、松本書屋本に校訂なし。

例えば、上5オ6「禹餘糧」条（下掲）において、小島本では「採」の右側に「操」と書き、校訂がなされているのに対して、松本書屋本ではなされていない。

禹餘糧【陶景注云禹昔行山乏食採此充糧而弃其餘故以名之】……

- 松本書屋本に校訂あり、小島本に校訂なし。

例えば、上9オ4「代赭」条（下掲）において、松本書屋本では「志」の右側に「土心」と書き、校訂がなされているが、小島本ではなされていない。

代赭【陶景注云出代郡故以名之】……一名志一名土黄一名赤土……

3.5 版本・写本間の異文を示す校讐

「3.4.1 版本の成り立ち」で紹介したように、多紀元簡は紅葉山古写本から版本を作る際に、関連諸書を参考にして、意図的に校正を加えた。また、後に森立之や小島尚真に指摘される³³ように、校刻の際に意図的ではない誤脱文字も生じた。

版本が出来た後に、江戸の考証学者たちは、前述のような版本と写本間の異文に関心を示し、校正書入れを行った。その中でも、とりわけ異文の校訂に力を入れたのが森立之である。

「3.3 本草和名の写本」で紹介したように、立之は、弟子に紅葉山古写本を影写させてお

³² 小島本で用いられる校正符号の「o」には、見せ消ちを表すものもあれば、そうでないものもある（例えば、上14オ8「一名澤足」の「足」）。

³³ 「3.3.1 台北故宫博物院蔵万延元年影写本」で紹介した、万延元年影写本下巻末にある森立之の識語および、「3.4.2.1 国会本」で紹介した、国会本下巻本文末にある小島尚真の識語 C を参照。

り、その影写本を用いて、考証に臨んだと考えられる。

本節では、従来注目されることの少なかった、森父子書入れ本に見られる、版本・写本間の異文を示す校讐を整理して分析を加える。

3.5.1 原鈔本とは

「3.4.4 松本書屋本と国会本の関係」では、両本の関係に注目し、松本書屋本にある識語について解説を加えたが、ここではその中の、「原鈔本（舊抄本）」に関わる二条に注目する。

①b 安政乙卯三月廿四日以躋寿館原抄本比校竟華佗巷人源立之

②a 安政二年四月初八日以躋寿館所蔵原鈔本比校竟此本影抄楓山御庫舊抄本者福山森立之記

この二条は森立之によるものである。立之は躋寿館（幕府の医学塾）所蔵の原鈔本をもって、版本の上下巻を校訂したようで、その原鈔本は紅葉山文庫古写本を影写したものであるという。

実は、巻末の識語だけでなく、森立之は本文部分においても「原本」に関する書き入れをしている。それは上巻本文初葉の余白にある次の一文（以下「初葉書き入れ」と仮称）である。

原本 每半葉九行無界欄長八寸弱幅六寸每行字数不定 □ 空缺字例 （ 不載字例

この部分は、朱色で書かれている。前掲の識語と補完的な関係にあり、校訂に用いられた「原本」の体裁を記録した上で、校正符号の「□」と「(」の意味を明示している³⁴。

武（2013）は、「この「原鈔本」（或いは「原本）」とは一体何のことで、版本とどのような関係にあるのだろうか」と問題を提起し、考察を行っている。次に、その成果を紹介する。

台北故宫博物院及び無窮会所蔵の万延元年影写本にある識語から分かるように、当影写本は、紅葉山文庫の古写本を森立之の弟子が影写したもの（或いはそれをさらに影写したもの）である。これは、松本書屋本に見られる森立之の識語（前掲の①b、②a）に言及される「原鈔本」の情報（「躋寿館所蔵」「此本影抄楓山御庫舊抄本者」）に符合している。このことから、立之は万延元年影写本をもって松本書屋本を校讐したのではないかと推察される。それを確かめるために、「初葉書き入れ」の記述との関連を見てみよう。

³⁴ その下に群青色の筆で書かれている「一名旁青標抹／者白字一名也」という書き入れも見られるが、それは森約子によるもので、識語の「②b（その二）」（3.4.4.1 識語からみた両本の関係）を参照）と補完的な関係にある。約子が青藍の筆で本草経の「白字一名」（白字は陰刻された文字の意味）に相当する部分の傍らに棒線を引いたという。

まず、万延元年影写本の体裁を見ると、台北故宮博物院蔵本と無窮会蔵本は、寸法に僅かな違いがあるものの、いずれも無界線で、一面行数は九行であり、「初葉書き入れ」の「原本 每半葉九行無界欄長八寸弱幅六寸每行字数不定」とほぼ一致している。

次に、図 3-6 と図 3-7 を比較すると分かるように、松本書屋本において「□」で囲んでいる「蘇敬」の部分には、万延元年影写本では空白（字数分のスペースが空いている）となっており、左側に「(」が付いている「女」の部分には、万延元年影写本では脱落している。

これは、まさに森立之のいう通り、「□」は「空缺字例」を、「(」は「不載字例」を表しているのである。

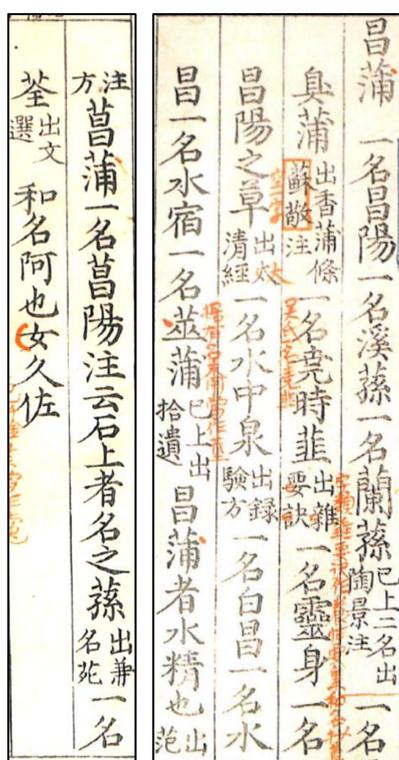


図 3-6 松本書屋本 上 13 ウ・
14 オ

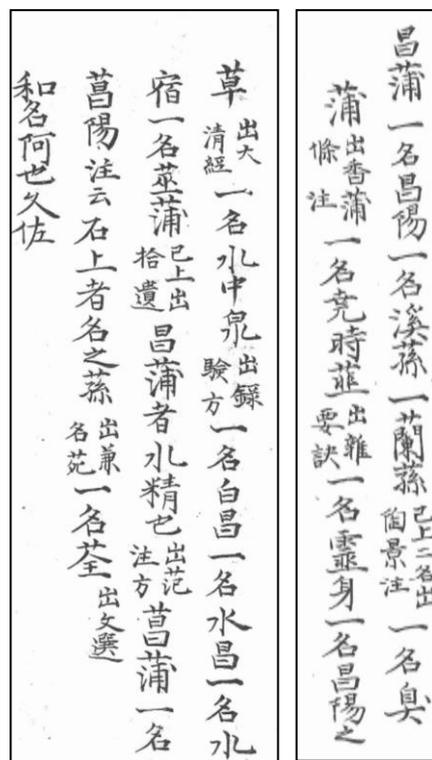


図 3-7 無窮会蔵万延元年影写本
上 13 オ・13 ウ

上記のことから、森立之の識語と書き入れに見られる「原鈔本」(又は「原本」)は万延元年影写本を指しており、立之はそれを基にして、二種類の校正符号をもって松本書屋本を校讐したと推測できる。

このように、武 (2013) は、森立之の識語および書入れにある「原鈔本」(又は「原本」)は万延元年影写本を指していると判断した。

ただし、松本書屋本にある立之の識語①b と②a が書かれたのは安政二年 (1855) であるのに対して、万延元年影写本にある立之の識語が書かれたのは万延元年 (1860) である。ここ

では万延元年影写本の書写年代について検討する。

「3.3.1 台北故宫博物院蔵万延元年影写本」で解説したように、医学館の躋寿館で医心方の復刻事業が行われた際（1854年～1860年）に、森立之は元簡の曾孫から本書の紅葉山古写本を借り、それを弟子の今尾道醇に影写させた。万延元年に、自らその影写本を校讐した上で識語を書き添えた。

森立之が今尾道醇によって影写されたものを松本書屋本の校讐に用いたとすれば、今尾道醇の影写作業は安政一年（1854）から安政二年（1855）までの間に行われたと推測できる。

3.5.2 原鈔本の空字・欠字を示す校正符号

武（2013）は、森立之の用いた校正符号の「□」「(」について論証を行い、

「□」は「空缺字例」を表し、つまり「□」で囲んでいる文字が原鈔本では空白となっている。「(」は「不載字例」を表し、つまり文字の左側に「(」が付いていれば、原鈔本ではその文字が欠けている。

という結論を得ている。武（2016）は、カラー版の松本書屋本を用いて、万延元年影写本（無窮会蔵本を使用）と照らし合わせてみると、校正符号の「□」には墨と朱の二種類があることが分かったと述べている。次にその詳細を紹介する。

3.5.2.1 墨の「□」

多紀元簡が紅葉山古写本をもとに版本を作る際に設けたものと考えられる。墨の「□」で囲んでいる部分を万延元年影写本で確認すると、空白或いは脱字になっている³⁵。例えば、

上 5 オ 3 「一名石[□]腦」、上 12 オ 1 「或作[□]子」、上 16 ウ 2 「一名[□]花使者」、
上 16 ウ 7 「仁譚音[□]」、上 21 ウ 8 「此蒲^{□□}花上黄也」、上 22 オ 4 「音^{□□}者」、
上 22 ウ 8 「一名[□]断」、上 23 ウ 3 「仁譚音渠[□]反」、上 37 ウ 7 「和名[□]礼乃於毛」³⁶

などがある。「□」の中に文字が書かれているものもあれば、書かれていないものもある。前者の場合は、下掲のように、上欄に多紀元簡の頭注がみられる。

³⁵ 後掲する例の中で、上 37 ウ 7 「和名久礼乃於毛」は脱字であり、それ以外は空白である。

³⁶ 上 5 オ 3 「一名石腦」、上 21 ウ 8 「此蒲□□花上黄也」、上 22 オ 4 「音□□者」の「□」には墨色、朱色両方の筆跡がみられる。

上 5 オ 3 「一名石^腦」 上欄：「按腦字原本缺今据証類校補」

上 37 ウ 7 「和名^久礼乃於毛」 上欄：「按原本脱久字今据醫心方及順抄校補」

3.5.2.2 朱の「□」

森立之が原鈔本をもって版本を校訂する際に付けたものと考えられる。武（2013）で紹介したように、「空缺字例」を表している。朱の「□」で囲んでいる部分は、万延元年影写本では空白となっている。例えば、

上 6 ウ 8 「一名羊起石^{一名}五色扶渠」、上 11 オ 6 「銅石【仁譚音古^猛反】」、

上 13 ウ 7 「臭蒲【出香蒲條^{蘇敬}注】」、上 15 ウ 7 「^麥斛【^{状似}大麦出稽疑】」

などがある。これらの例には、元簡によって設けられた墨の「□」が見当たらないが、（下掲のように）一部においては、上欄に元簡の頭注が記されている。

上 11 オ 6 「銅石【仁譚音古^猛反】」 上欄：「按猛字舊缺今據醫心方校補」

上 15 ウ 7 「^麥斛【^{状似}大麦出稽疑】」 上欄：「按^麥斛^{状似}四字原本缺今据証類校補」

3.5.3 版本の欠字を示す書入れ

原本に脱字と空字が多く存在することは前述の通りである。今回の精査で、逆の場合、つまり原本にあった文字が版本になると脱落してしまったこともあると分かった。

脱落した文字は、森立之によって朱筆で補入されている。例えば、松本書屋本の上 14 オ 3 「遠志」条

遠志 葉名小草……一名菝菹【已上四名出釋藥性】○一名晞苑【出雜要訣】唐

においては、割注の「已上四名出釋藥性」とその後ろの「一名晞苑」の間に、補入記号「○」（朱筆）がみられ、その横に「唐」（朱筆）が書かれている。万延元年影写本で確認すると、本来「唐」の文字があったことが分かる。また、松本書屋本の上 19 ウ 2 「菝菹子」条

菝菹子 ……一名地行一名地莓【已上出藥對】和名波末比之

においては、割注にある「已上」と「出藥對」の間に「二名」（朱筆）が補入されている。万延元年影写本で確認すると、該当する部分は「已上二名出藥對」となっている。

版本で脱字が生じた原因について考えると、「遠志」条の場合は、産地を示す「唐」の文字が重複したため、前出の方が削除された可能性がある。それに対して、「蒺藜子」条の場合は、単なる誤りである可能性が高い。

3.5.4 松本書屋本による原鈔本の再建

従来の『本草和名』を利用した研究は、専ら全集本を底本にしている。研究分野にもよるが、それは必ずしも適切ではない。例えば、『倭名類聚抄』の典拠を考える際に、本書からの引用と思われる箇所を全集本だけで確認するのは不十分である。なぜなら、本研究で紹介してきたように、版本には多紀元簡の手が加わっており、『倭名類聚抄』が校訂の基準として用いられたためである。このような場合は、「原本」を参照する必要性が生まれてくる。

しかし、『本草和名』の写本はまだ公開されておらず、アクセスしにくいのが現状である。そこで、本研究は版本だけを研究材料とする場合の便宜を図り、松本書屋本（あるいは全集本）にある注記や符号を利用した「原本」の再建を考案している。具体的には、多紀元簡の頭注による復元と森立之の校正符号による復元の二つの方法をとる。

版本を底本に利用する際に、まず、上欄に記されている元簡の頭注³⁷を確認し、「原本」が言及される場合は、その記述に従って原本の様子を推測する。

多紀元簡の頭注（「原本」関係の 34 条）³⁸は、「原本」への所改を網羅しているわけではないので、もう一つの方法をとる。すなわち、松本書屋本に見られる校正符号の「□」「(」に注意を払い、「□」で囲んでいる文字は原本では空白となっており、「(」の付いている文字は原本では欠けていると判断する。

この二つの方法によって、手元に万延元年影写本がなくても、前述のような底本の問題をある程度解消出来ると考えられる。

3.6 おわりに

本章は日本国内外での書誌調査の結果に基づき、『本草和名』の諸本について論じてきた。

「3.3 本草和名の写本」では、戦前に行われた川瀬一馬氏の書誌研究及び、近年の医史学の分野における報告を手掛かりに、紅葉山文庫古写本を影写した万延元年影写本が現在では無窮会専門図書館と台北故宫博物院に所蔵されていることを突き止めた。更に、今まで報告が少なかった台北故宫博物院所蔵の博愛堂鈔本についても考察を行った。

³⁷ 松本書屋本の上欄には、元簡による頭注のみならず、別の書き入れもあり、それが弁別しにくい場合は、書き入れのない早稲田大学図書館 21 - 798（早稲田大学図書館の「古典籍総合データベース」で公開されている）などを参照するとよい。

³⁸ 版本の上欄に記されている。その頭注の中で、「原本」を含むものは 33 条、「舊本」を含むものは 1 条、合計 34 条ある。

「3.4 本草和名の版本」の「3.4.1 版本の成り立ち」では、版本の版行年、種類、および版元に反映される多紀元簡による校訂について考察を行い、版本の成り立ちを明らかにした。

これらの成果によって、『本草和名』の諸本の関係性が整理できた。それを図に示すと、次の通りである。

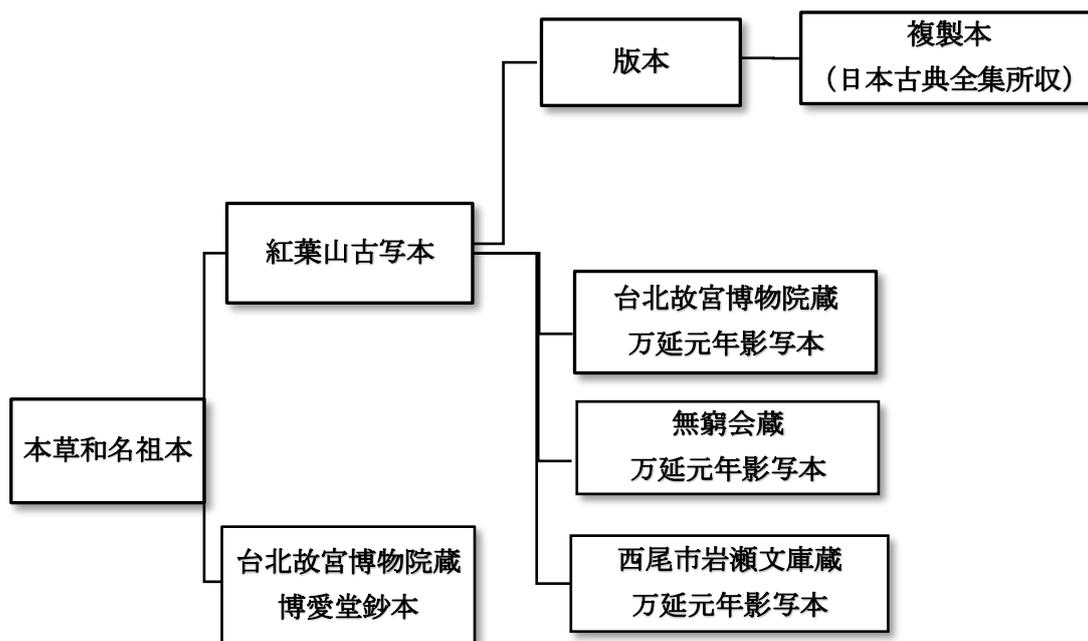


図 3-8 本草和名諸本の関係

「3.4.2 小島父子書入れ本：国会本と静嘉堂文庫本」では、森父子書入れ本と密接な関係にある二種の小島父子書入れ本を紹介した。小島父子書入れ本には狩谷棧斎書入れ本からの移写書入れがあることや、小島父子の書入れが森父子書入れ本に吸収されていることを指摘した。「3.4.3 森父子書入れ本：全集本底本と松本書屋本」では、蔵書印を手掛かりに、森父子書入れ本が全集本の底本となってから松本書屋へ所蔵されるようになるまでの経緯を整理した。「3.4.4 松本書屋本と国会本の関係」では、識語・書入れ・校正符号を手掛かりに、森父子書入れ本と小島父子書入れ本との関係について詳しく考察した。

版本にある書入れの移写関係を図に示すと、次の通りである。

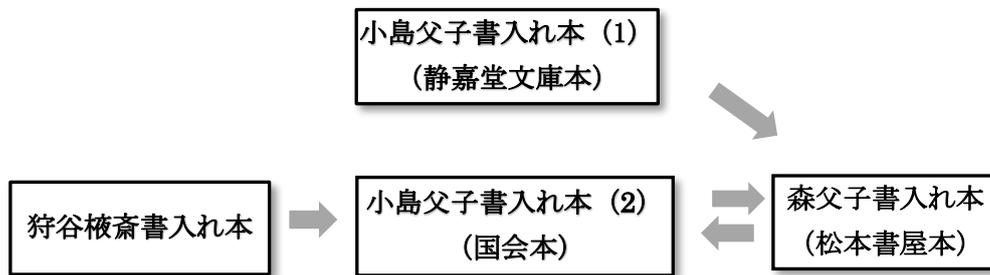


図 3-9 本草和名版本にある書入れの移写関係

「3.5 版本・写本間の異文を示す校讐」では、森父子書入れ本に見られる、版本・写本間の異文を示す校訂を整理・分析した。森立之の識語や書き入れにある「原鈔本」が万延元年影写本と近い親縁関係にあり、立之はそれを基にして、版本を校訂していることを指摘した。最後に、松本書屋本と万延元年影写本との関係から出発し、前者にある頭注（多紀元簡による）と校正符号（森立之による）を利用した「原本」の再建を提案した。

なお、今後の課題について、紅葉山文庫の古写本と狩谷掖斎の校正書入本の現在の所在や、写本と刊本の間字体の問題など、多々挙げられるため、これからも引き続き調査していく必要がある。

4 本草和名の出典

4.1 はじめに

飛鳥時代から奈良時代、日本は唐の先進文化を求め、630年から894年の約250年間に19回にわたり、遣唐使を派遣した。それによって大量の書物が日本にもたらされた。その中に、『本草経集注』『新修本草』をはじめとする多くの医薬書が含まれている。『本草経集注』は飛鳥では間違いなく用いられており、『新修本草』は少なくとも天平三年(731)以前に日本に伝来したと推測される³⁹。また、『日本国見在書目録』(893頃)の医方家の部には165部・1309巻に及ぶ医薬書が載せられており、他の医薬書も同じ時期に、遣唐使によって将来されていたと考えられる。

これら伝来の本草書等を駆使し編纂されたのが深根輔仁の『本草和名』である。本書では、『新修本草』に所収される薬のことを「本草内薬」と呼び、その全種類(850種)を取り入れている。それに「諸家食経」と「本草外薬」から105種の薬を追加し、合計1025種の薬を収録している⁴⁰。さらに、これらの薬物に対して、70余の漢籍(医薬書の範疇を超えるものも含まれる)から別名を集めている。

『本草和名』に所引される漢籍出典の多くは、時代が下るにつれて失われてきたため、古佚書の復元に際して本書を研究することには、大いに意義が認められよう。

本章では、まず『本草和名』の凡例に注目し、そこに記されている漢籍の引用方法を確認する。次に、『新修本草』の諸本と伝鈔経緯に関する先行研究を整理した上で、『本草和名』版本に見られる、『新修本草』を用いた校讐を分析する。最後に、『新修本草』以外の漢籍出典について、『日本国見在書目録』と中国の正史における芸文志・経籍志(漢書から宋史まで)への掲載状況、ならびに現存状況を調査する。

4.2 漢籍出典に関する凡例

『本草和名』の上巻冒頭には、出典に関する凡例が記されている。この凡例は二つの部分に分かれており、前半部分は下掲のように、項目の見出しについて、その内訳を示している。

(凡例前半)

合一千廿五種

本草内薬八百五十種

³⁹ 真柳(1996)、真柳(2000)を参照。

⁴⁰ ここに挙げた項目数は『本草和名』の凡例に従った。本文にある実際の項目数はこれと異なる。詳しくは第5章で述べる。

諸家食経一百五種

本草外薬七十種【世用四種 稽疑三十三種 拾遺廿五種 新撰食経八種】⁴¹

これによると、見出しは、合計 1025 種で、その中「本草内薬」から 850 種、「諸家食経」から 105 種、「本草外薬」から 70 種（世用 4 種、稽疑 33 種、拾遺 25 種、新撰食経 8 種）を採録しているという。

「本草内薬」というのは『新修本草』に収録されている薬のことである。『本草和名』の編次は『新修本草』に倣っているので、両書の編次を比較することによって、その意味がより明瞭になる。次に、巻首に示された収録薬の内訳に従い、両書の編次を表 4-1 に対照させる。

表 4-1 本草和名と新修本草の編次

巻別	『本草和名』	『新修本草』
第一巻	×	序例上
第二巻	×	序列下
第三巻	玉石上二十一種	玉石等部上品合二十二種
第四巻	玉石中三十種	玉石等部中品合三十種
第五巻	玉石下三十種	玉石等部下品合三十一種
第六巻	草上四十一種	草部上品之上合四十種
第七巻	草上三十八種	草部上品之下合三十八種
第八巻	草中三十七種	草部中品之上合三十七種
第九巻	草中三十九種	草部中品之下合三十九種
第十巻	草下三十五種	草部下品之上合三十五種
第十一巻	草下六十七種	草部下品之下合六十七種
第十二巻	木上三十七 ⁴² 種	木部上品合二十七種
第十三巻	木中二十八種	木部中品合二十八種
第十四巻	木下四十五種	木部下品合四十五種

⁴¹ 「【】」は小字双行を示す。

⁴² 「二十七」の誤記である。

巻別	『本草和名』	『新修本草』
第十五巻	獸禽六十九種：本草五十六食経十三	獸禽部合五十六種
第十六巻	虫魚類百十三種：本草七十二食経四十二	虫魚部合七十二種
第十七巻	菓四十五種：本草二十五食経二十	菓部合二十五種
第十八巻	菜六十二種：本草三十八食経二十四	菜部合三十七種
第十九巻	米穀卅五種：本草二十八食経七	米等部合二十八種
第二十巻	有名無用 百九十三種	有名無用合一百九十三種
本草外 薬	七十種：稽疑三十三・新撰食経八・拾遺二十五・世用四	×

表 4-1 と凡例の前半部分を合わせて見ると、『本草和名』の第十五～第十九巻にある項目の見出しには、『新修本草』と『食経』の両方からとったものが混在していること、『本草和名』の末巻にある項目の見出しは、『新修本草』以外の出典からとっていることが分かる。

後半部分は下掲のように、見出しの漢名に対する別名の出典を説明している。

(凡例後半)

諸家食経 諸家音義 本草雑要訣 本草拾遺
 大清経 神仙服餌方 養性要集 抱朴子内篇
 本草稽疑 墨子枕中五行記 小品方 釋薬性
 丹草口訣 薬訣 五金粉薬訣 鑒真
 兼名苑 崔豹古今注 耆婆脉決経 范注方
 葛氏方 本草疏 陶弘景注 蘇敬注
 録驗方 脚氣論 新方 廣利方 刪繁論
 龍門百八方 新録単方 千金方 玄感傳屍方
 以前諸書中薬別名皆抄出列於條下

「諸家食経」「諸家音義」「本草雑要訣」「本草拾遺」など出典名を列挙した上で、「以前諸書中薬別名皆抄出列於條下」(以上の諸書に見られる薬の別名を全て各条の下に抄出した)と記している。凡例の内容を具体例(例1・例2)から見てみよう。

例1 「杜仲」項

(本草和名)

上十二 52 才 6 杜仲 一名思仙一名思仲一名木綿【陶景注云折之多白絲】一名大戊【出兼名苑】杜仲者木精也【出録驗方】又云山精【出神仙服餌方】和名波比末由美⁴³

(新修本草)

杜仲 味辛、甘、平、温、無毒。主腰脊痛、補中益精氣、堅筋骨、強志、除陰下瘍湿、小便餘瀝、脚中酸疼痛不欲踐地。久服輕身耐老。一名思仙、一名思仲、一名木綿。生上虞山谷、又上黨、及漢中。二月、五月、六月、九月採皮陰乾。畏蛇脫皮、玄參。

上虞在豫州、虞、虢之虞、非會稽上虞縣也。今用出建平、宜都者。状如厚朴、折之多白絲為佳。用之、薄削去上甲皮、橫理切令絲斷也。⁴⁴

「杜仲」は『新修本草』から採録された項目である。両書の内容を対照させると、『本草和名』にある「一名思仙一名思仲一名木綿」は『新修本草』の本文に由来し(一重下線部分を参照)、「陶景注云折之多白絲」はその注(「陶景注」)に由来する(二重下線部分を参照)。その後の「一名大戊」、「杜仲者木精也」、「又云山精」部分はその他の諸書(『兼名苑』『録驗方』『神仙服餌方』)に由来することが分かる。

例2 「鯨」項

下十六 25 才 9 鯨 【其京反出崔禹】一名鯢一名鯢【音昆】一名魚伯一名海鱸一名麻竭【已上五名出兼名苑】和名久知良

「鯨」は『崔禹食経』から採録された項目である。『崔禹食経』は現存しないため、両書を比較することは出来ないが、割注から「一名鯢一名鯢」及び「一名魚伯一名海鱸一名麻竭」部分が『兼名苑』によって付け加えられたと推測できる。

⁴³ 『本草和名』の所在は松本書屋本による。「上十二 52 才 6」は「上冊第十二卷 52 丁表 6 行目」を示す。

【】は小字双行を示す。以下同じ。

⁴⁴ 『新修本草』は本草図書刊行会所収の仁和寺本複製と岡西為人重輯のものを参看した。大字は『新修本草』の本文部分(太字は『本草経集注』由来)を、小字はその注を示す。句読点は筆者による。

このように、『本草和名』は『新修本草』の本文と『食経』等をベースにして項目を立てた上で、『新修本草』の注及びその他の諸書にある別名を付け加える形で形成されたものである。本草書にある薬の性味・効能・採取時節などに関する記述については省略するものの、薬の名称についてはなるべく多く蒐集するという特性を持っている。

4.3 新修本草

『新修本草』は、659年に、唐高宗の勅で、蘇敬らが『本草経集注』（『集注本草』『本草集注』とも）を増補・加注して編纂したものである。杏雨書屋所蔵の仁和寺本『新修本草』巻十五に、「天平三年（731）歳次辛未七月十七日書生田辺史」の奥書があることから、同書はそれまでに伝来したと考えられる。

『続日本紀』の延暦六年（787）5月15日条に「典薬寮言、蘇敬注新修本草、与陶隱居集注本草相検、増一百餘條、亦今採用草薬、既合敬説、請行用之、許焉」とあるように、当時典薬寮では『新修本草』が『本草経集注』にかわって、本草書の教科書として正式に採用された。また、『延喜式』（927）の巻三十七に「凡應讀醫經者、大素經限四百六十日、新修本草三百十日、小品三百十日、明堂二百日、八十一難經六十日」とあるように、当時『新修本草』の修学日数までも規定されていたことがわかる。

このように、本書は奈良時代に伝来して、平安時代にかけて広く利用されていた。『本草和名』は『新修本草』を範にとり、編纂されている。薬物の分類や配列などは『新修本草』に基づいており、漢文部分の大半もそこからの抜粋である。そのため、本書を『新修本草』の縮約版とする見方もある。こうした要因から、『本草和名』の出典研究においては、『新修本草』に関する基本的な知識を把握しておかなければならない。

4.3.1 新修本草の諸本

『新修本草』は中国においては早くに散逸したが、日本においては江戸末期に京都の仁和寺でその残巻が発見され、1900年に発見された敦煌文献の中にもその断片が見つかった。また、現存しない部分については、復元作業がなされてきた。

4.3.1.1 仁和寺古鈔本残巻

仁和寺で発見された『新修本草』の古写本について紹介した研究には、中尾（1936）、森（1940）、岡西（1964）、真柳（1996）、磯野（2001）、宮下（2001）、真柳（2014a）などの蓄積がある。

古写本の伝承経緯が複雑で、それをめぐっては、中尾（1936）、森（1940）、磯野（2001）の間で、議論がなされてきており、近年、真柳（2014a）による詳考が加わった。その詳細につい

ては、「4.3.2 新修本草仁和寺古写本の伝鈔経緯」で詳しく取り上げる。ここでは、真柳(2014a)説に従い、発見された順によって、仁和寺古写本残巻の概要を提示する。

▪ 卷十五、卷十三・十四・十八・二十

文化十二年(1815)以前、京都の典医福井家が仁和寺から流出した『太素経』『新修本草』を入手し、仁和寺本の存在が世に知られることとなった。福井家は旧仁和寺本の『新修本草』巻十五(原本)と、巻十三・十四・十八・二十(原本と影写本、或は影写本のみ)を所蔵していたと推測される。

巻十五の巻末には本書の伝来を証明する最古の記録(「天平三年歳次辛未七月十七日書生田邊史」という奥書)がある。天保三年(1832)に、狩谷掖斎が京都の福井家に流出していた巻十五を模写し、その複本は浅井紫山や小島宝素に贈られた。

原本は、現在武田科学振興財団の杏雨書屋に所蔵されている。浅井紫山に贈られた複本は掖斎の手紙とともに尾張徳川家の蓬左文庫に所蔵されており、1937年に本草図書刊行会から影印刊行された。

巻十三・十四・十八・二十に関しては、広く知られているのは小島宝素による模写本である。天保十三年(1842)に、小島宝素が京都への訪書を機に、福井家崇蘭館を訪ね、この四巻を模写した。

現在では、原本も福井家による影写本も所在不明のままである。小島宝素による模写本は台北故宫博物院に現蔵されているという。小島宝素以降も転写が繰り返されてきた結果、数部の伝鈔本が出来上がった。清末に小島宝素旧蔵本と思われるものは、傳雲龍らに購入され、日本で影印刊行された。森立之旧蔵本と思われるものは羅振玉によって購入され、のち上海で影印出版された。

▪ 卷四、五、十二、十七、十九

文政十年(1827)に尾張藩医の浅井貞庵は、京都で開業していた友人の東道策から『太素経』と『新修本草』が仁和寺にあることを聞きおよんで、門下の塚原修節を京都に派遣し、仁和寺から『太素経』『新修本草』を一時借り出し、『太素経』を模写させた。

天保五年(1834)年には貞庵の子浅井紫山が塚原修節に『新修本草』の巻四・五・十二・十七・十九を模写させた。

原本は現在も仁和寺に所蔵されており、1936年に本草図書刊行会から中尾万三の解説を付して影印刊行された。

4.3.1.2 敦煌の古鈔断片

『新修本草』の敦煌本断片に詳しい研究として、岡西（1964）、小曾戸（1996）、真柳（2001）、岩本（2015）などが挙げられる。特に、岩本（2015）の考察が綿密で参照されたい。

ここでは上記先行研究に従って、各断片の概要を提示する。

- **羽 40R (李 0229)**

『新修本草』序例の一部（63行）。李盛鐸将来本とも呼ばれる。現在武田科学振興財団の杏雨書屋に所蔵されている。詳しくは岩本（2015）を参照。

- **P. 3714**

『新修本草』卷十残卷（200余行）。開元十一年から天宝年間（723～756）の書写と推測される。詳しくは岩本（2015）を参照。

- **S.4534**

『新修本草』卷十七～卷十九残卷、卷十七の栗条末尾～梅実条途中、および卷十八末尾～卷十九頭部の二残卷からなる（約40行）。詳しくは真柳（2001）を参照。

- **S.9434v**

S.4534の第一残卷と完全に綴合し、『新修本草』卷十七の梅実条後半～枇杷葉条である。詳しくは真柳（2001）を参照。

- **P.3822**

『新修本草』卷十八の抜抄（13行）。葱・苦瓠・水蘇・紫蘇・蓼・荏・苜蓿・芥の項目からなる。書写者は吐蕃占領後期以降の僧侶である可能性が高いという。詳しくは岩本（2015）を参照。

4.3.1.3 影印本

現在よく利用される『新修本草』の影印本として、次の四種が挙げられる。

- 『新修本草』卷第四、五、十二、十五、十七、十九（本草図書刊行会、1936-1937年刊）
- 『纂喜廬叢書之二』「唐卷子本新修本草」卷三～五、十二～十五、十七～二十（傅雲龍、

1889 年刊)⁴⁵

- 『新修本草』 卷四、五、十二～十五、十七～二十（上海古籍出版社、1981 年・1985 年刊）
- 『零本新修本草卷第十五』 卷十五（武田科学振興財団杏雨書屋、2000 年）

本草図書刊行会は、1936 年に仁和寺所蔵本について、第四・五・十二・十七・十九の五巻を影印し、中尾万三の解説を付して出版した。翌年の 1937 年に、蓬左文庫所蔵の第十五巻を狩谷椽斎の手紙とともに影印・出版した。第四・五・十二・十七・十九巻においては、この本が優先的に参照されるべきである。

明治二十二年（1889）に、当時来日中だった清朝官員の傅雲龍は、小島宝素旧蔵本を入手し、『纂喜廬叢書之二』に「唐卷子本新修本草」と題して日本で影印刊行した。本草図書刊行会刊本にみられない部分を収録しているので、それを補う資料として参照されるべきである。

明治三十四年（1901）に来日した羅振玉が森立之旧蔵本を入手したが、同本はのちに上海古籍出版社より 1981 年（線装本）と 1985 年（平装本）として二度、影印出版された。この本は小島宝素旧蔵本の転写本であるが、影写の水準が高く、前記『纂喜廬叢書之二』所収本と合わせて参照されたい。

武田科学振興財団杏雨書屋は、2000 年に同財団所蔵の仁和寺本第十五巻を、宮下三郎の解説と翻字を付して出版した。これは、仁和寺古写本原本を底本にしているため、第十五巻においては、優先的に参照されるべきである。

4.3.1.4 復原本

『新修本草』散逸部分の復元作業は、江戸後期に遡れる。小島宝素は『証類本草』などから『新修本草』巻三、六～十一を復元していた。これらの中、巻三は傅雲龍が刊行した『纂喜廬叢書之二』（1889 年）に所収されているが、巻六～十一は、行方不明である。

現在、岡西氏による復元本は完成度が高いとされ、研究者に広く利用されている。他に、中国の学者による復元本も参考になる。

- 岡西為人『重輯新修本草』（国立中国醫藥研究所、1964 年）
- 尚志鈞『新修本草（輯復本第二版）』（安徽科学出版社、2004 年）

⁴⁵ 上海群聯出版社（1955 年）、上海衛生出版社（1957 年）、上海科学技术出版社（1959 年）による複製本が出版されている。

4.3.2 新修本草仁和寺古写本の伝鈔経緯

『新修本草』20巻は、中国でも日本でも中世に失われたものと考えられていた。その古写本が仁和寺で発見されたことは、間違いなく学界の注目を浴びたことだろう。狩谷掖斎・浅井紫山・小島宝素らが中心となって、その伝鈔に取り組んでいたとされる。しかし、詳しい伝鈔経緯についてはまとまった記録が見つかっておらず、この点に関しては日記・書簡・識語などの資料にある断片的な記録から推測することしかできない。

資料に沿って、伝鈔経緯をまとめた研究としては、中尾(1936)、森(1940)、磯野(2001)、真柳(2014a)が挙げられる。次に、これらの先行研究の要点を書きだして整理する。

4.3.2.1 先行研究の整理

中尾(1936)は、狩谷掖斎の手紙(参考資料四)、塚原修節の『甲午筆乗』(参考資料五)、小島宝素の跋文(参考資料六)⁴⁶、澁江抽齋・森立之の『経籍訪古志』(参考資料七)などの資料に基づいて、考察している。その要点を次にまとめる。

- I. 狩谷掖斎は、仁和寺古写本の第一発見者である。
天保三年(1832)頃に、狩谷掖斎が京都で秘かに巻十五を入手して写した。
京都から江戸への帰途において、名古屋に寄り、浅井貞庵⁴⁷にこの事を伝えた。
天保4年(1833)10月13日に、浅井貞庵に、手紙とともに巻十五の再写本を贈った。
詳しい時期は不明であるが、小島宝素にも、巻十五の再写本を贈った。
- II. 浅井貞庵は、狩谷掖斎から情報を得た後に、仁和寺古写本の伝写に着手した。
天保五年(1834)に、門下の塚原修節を京都に派遣し、東道策と小森典薬頭の協力で、巻四・五・十二・十七・十九の五巻を仁和寺から借りて写した。
- III. 小島宝素は、狩谷掖斎から巻十五の再写本をもらったほか、浅井本の巻四・五・十二・十七・十九をも写した。
さらに、天保十三年(1842)に、自ら京都に至り、巻十三、巻十四、巻十八、巻二十の四巻を写した。
- IV. 小島宝素は、古写本の模写のみならず、復元にも取り組んだ。しかし、復元作業の完成は叶わず、途中で亡くなった。

⁴⁶ 参考資料六にある小島宝素の跋文は、森立之によって移写されたものである。もとの跋文は名古屋徳川家の蓬左文庫に所蔵される『新修本草』巻二十の終りに記されているという(中尾 1936: 17)。

⁴⁷ 浅井貞庵(1770「明和七年」～1829「文化十二年」)、尾張徳川家の藩医の七代目。名は正封、号は貞庵。

森（1940）は、「楳翁雜記七」（参考資料二）、『慊堂日歴』（参考資料三）や『名古屋市史』⁴⁸など、さらに多くの資料を援引しながら、論述を展開している。中尾（1936）の主張をおおむね認めているが、次のような新しい知見を付け加えている。

- i. 狩谷掖齋が模写した巻十五は福井家所蔵のものであり、模写は小島宝素の囑託によって計画されたものである。
- ii. 狩谷掖齋の手紙は浅井貞庵ではなく、その子の浅井紫山⁴⁹に宛てたものであり、塚原修節を京都に派遣したのも紫山である。
- iii. 浅井貞庵は在世中に、『新修本草』の模写を企てていたが、実行されたのは浅井紫山の時代になってからである。

磯野（2001）は、『浅井氏家譜大成』（参考資料一）を導入して、前掲の二つの研究に対して次の異論を呈している。

『新修本草』巻四、五、十二、十七、十九の五巻が模写されたのは天保五年（1834）ではなく、文政十年（1827）である。

磯野（2001）と森（1940）の議論の中心となるのは、『浅井氏家譜大成』（参考資料一）と『甲午筆乗』（参考資料五）の記述に見られる齟齬である。

『浅井氏家譜大成』には、「太素残本二十二巻、新修本草五巻アルヲ聞ク……文政十年十一月十三日、十二巻ヲ受ケ帰ル……十二月朔日、復タ十巻並ニ新修本草五巻ヲ受テ還ル。模写竣功シテ、同月十日使ヲ發シ、之ヲ還ス」という記述がある。これに従えば、浅井家は、文政十年（1827）11月13日に、『太素経』十二巻を、12月1日に『太素経』の残りの十巻と『新修本草』五巻を借り出した。そしてこれらの模写を終えて、同月10日に返却したこととなる。

一方で、『甲午筆乗』には、「平安東氏尾浅井高島氏書来、謂仁和寺有太素新修医心方出現速發上京」（天保五年（1834）1月7日）、「新修本草五巻自仁和寺来、夜来援筆影贍」（4月11日）、「新修第四終」（同年4月18日）、「神（新の誤）修第十二了、第十七初」（4月27日）、「本草十七軸了」（4月29日）、「新修本草第十九了」（5月5日）という記述がある。これに従えば、浅井家は、天保五年（1834）4月11日に『新修本草』を借り出し、5月5日まで巻四・十二・十七・十九の模写作業を続けていたこととなる。

⁴⁸ 『浅井氏家譜大成』（参考資料一）をもとにして記されたものである。

⁴⁹ 浅井紫山（1797「寛政九年」～1860「万延元年」）、浅井貞庵に継ぐ八代目。名は正翼、字は紫山。

磯野（2001）の主張は、『新修本草』が最初に模写されたのは文政十年（浅井貞庵の代）であるとする。それに対して、森（1940）の解釈は、文政十年に『太素経』のみが模写され、天保五年（浅井紫山の代）になってから、『新修本草』の模写が実現されたとする。

真柳（2014）は、精緻な調査によって、森（1940）説を支持する有力な資料を提示しながら、資料の間で記述の相違が生じた原因を分析している。論述に際して取り上げられた資料が非常に豊富なため、詳細については直接その論考を参照されたい。ここでは、その結論を提示することにとどめる。

- 文政十年に鈔写されたのは『太素経』の巻二、無巻号、五、十一、十三首・無巻号・十三尾、十四の計六巻に相当する部分で、天保五年に鈔写されたのは『新修本草』の巻四・五・十二・十七・十九と『太素経』の巻三・九である。
- 『浅井氏家譜大成』では浅井紫山の時代に行われた作業を前代の浅井貞庵に仮託したのである。その背景には、浅井紫山が安政元年（1854）に所業を問われて奥医師を免じられ、同三年に致仕されて浅井家の家政が窮乏の極みに達したことがある。

4.3.2.2 参考資料：新修本草古写本の伝鈔に関する記録

一. 『浅井氏家譜大成』（浅井国幹著）にある浅井正封（すなわち、浅井貞庵）の項：

（前略）太素経新修本草、世ニ出ザル久シ。人、ソノ名ヲ知テ、ソノ書ヲ見ズ。時ニ正封ノ友、東道策ナル者アリ、素ト和丹ノ方ヲ習ヒ、京都ニ住シ、医ヲ業トナシ、名声頗ル著ル。嘗テ仁和寺【一ニ御室宮ト云フ】宮曹【増田内蔵人】ノ病ヲ療シ、屢バ効アリ。因テ寶庫ノ秘書ヲ探リ【増田内蔵人、嘗テ東道策ニ告テ曰ク、経中ニ太郎ノ太字ト素麵ノ素字ヲ記セシ御経アリト。蓋シ、太素経ハ巻物トナセリ。故ニ仏経ニ混ズ】、太素残本二十二巻、新修本草五巻アルヲ聞ク。ソノ法禁、厳密ナルヲ以テ、縉紳名家ト雖ドモ之ヲ觀ヲ得ズ。道策竊ニ内執事ニ就キ、屢バ請フ。乃チ密旨ヲ降シ、貸借ヲ聴サル。之ヲ觀ルニ仁平仁安【保元平治ノ前後】ノ間、丹波憲基頼基等傳写スル所ノ本ニシテ、紙爛レ軸朽チ文多ク闕亡ス。委曲之ヲ尋テ、然後略ボ見ルベシ。道策敢テ自ラ私セズ。余家世々経ヲ講ズルヲ業トナスヲ以テ、急ニ謄録シ、余家ニ蔵セ使ント欲シ、先ヅ傭書数人ヲ召ビ、功ヲ計ルモ、蠹余ノ文、寫看甚ダ難ク、皆ナ辞シ去ル。因テ、堪事者ヲ正封ニ求ム。正封、門下ヲ擇ビ、塚原修節ヲ得テ、大毛村榮泉寺ノ僧英山師ト同ク、遽カニ發シテ京ニ入ラシム。修節ソノ書ヲ視テ謂ク、速カニ功ヲ終ルハ、須ラク十人以上ヲ用ユベシ。家郷ニ在ルニ非レバ、得ベカラザルトナリト。遂ニ道策ニ勸メ、執事ニ乞ヒ、密ニ本書ヲ受ケ、分テ兩次ニ借ヲ得テ、文政十年十一月十三日、十二巻ヲ受ケ帰ル

（中略）

同廿二日、再ビ京ニ發シ、十二月朔日、復タ十卷並ニ新修本草五卷ヲ受テ還ル。模写竣功シテ、同月十日使ヲ發シ、之ヲ還ス……

其謄寫ヲ為ス者、蓋シ九人。曰ク塚原修節……曰ク僧英山……曰ク大河存真……曰ク柴田承慶……曰ク勝野常庵……曰ク加藤梅春……曰ク高田貞純、曰ク加藤周禎、曰ク小笠原道範トス…

正翼ノ時ニ至リテ、幕府医官小島学古ト友トシ、好シ。故ヲ以テ、太素一本ヲ謄シ送ル
(後略)

二. 森 (1935) 「掖翁雜記七」(岡本況齋『本草沿革考』からの引用で、文政四年(1821)に掖齋が福井家の蔵本を写した逸話) :

新修本草第十五卷は、往年狩谷掖齋上京の時、先師寶素先生の囑託ありしより、御醫福井家より傳寫せし由。その傳寫の次第を聞きしに、彼の福井家は、從來書籍を一切他へ貸出さざる家格故、豫め證類本草より抄出し、前後の體裁により一本を拵へ、彼方へ詣り、此方の本と校合したきよし頼入、持辨當にて彼家に至り、一日校合の體になせしかば、煩を避けん又は同本あらばさのみ祕すべきにもあらずと思ひけん、持歸り校合あるべしといひし故、直に持歸り、一夜に寫取り返せし由云々。

三. 『慊堂日歴』(狩谷掖齋の友人である松崎慊堂による日記) :

天保元年(1830)4月17日条:「御室蔵、唐本草六卷、太素經」、
天保三年閏11月30日條に「唐本草既得五本。今又得一本。俱金澤本」

四. 尾張黎明会所蔵の新修本草第十五卷に添付された掖齋の浅井紫山に宛てた手紙(天保四年10月13日) :

浅井先生侍史

狩谷掖齋

其後御無音申上背本意候、實ハ大學堂當春中歸國之様申候間其序を以可申上存居候所今以在江戸候故今般奉呈寸楮候、先以向寒之所倍御康寧被成御座欣喜之御義存候、誠ニ昨年者御地へ罷出候所段々蒙御懇命殊ニ以御周旋眞福寺蔵をも縦覽仕候其他云々不能謝述奉感佩候扱て其節奉約候本草一卷如原書爲寫候間奉獻上候、是者面上申上候之次第ニて手ニ入候事故何分御深秘被下候様奉希候年来も過候ハバ老拙罪過にも相成間敷候間當時之處右之思召奉願候齋民要術續日本紀之事小島先生より承歸候珍奇驚入候、何とぞよき模本傳播の様御工夫奉仰候、西土にも齊民要術は津逮の外別本無之様ニ被存候舊年拜眉より當歳迄殆匹歳之所何之仕義も無之一年之経過甚速空敷消日月候事奉恥入候

當地米價踊貴之事より外近来他事も無之候御地者豊穰之由奉賀候
萬事小島先生より御文通の事奉存候先は右申譯旁草々如此御座候、老拙相應之御用御座候
ハゞ無御遠慮蒙仰度候

恐惶頓首

十月十三日

狩谷掖齋 望之

浅井先生 御侍史中様

尚々献上候序鹽引鮭一隻進上仕候御叱留被下候ハゞ大慶仕候

よきほどに切雪花菜ニ両三日漬候へバ鹽ぬけ候て鮮のごとく成申候御試可被成候 不一

五. 『甲午筆乘』(塚原修節の日記、天保五年(1834)1月1日から9月4日までの出来事を収載、現在杏雨書屋に所蔵)⁵⁰ :

1月7日条:「平安東氏尾浅井高島氏書来、謂仁和寺有太素新修医心方出現速發上京」、

2月17日条:「訪横井、小笠原氏抵浅井氏謀医心方影模事」、

2月28日条:「入小森典葉殿門東氏紹介余間話、及醫心方太素之事」、

4月11日条:「新修本草五卷自仁和寺来、夜来援筆影膳」、

4月12日条:「寫本草」、

4月18日条:「新修第四終」、

4月27日条:「神(新の誤)修第十二了、第十七初」、

4月29日の条:「本草十七軸了」、

5月5日の条:「新修本草第十九了」、

5月10日の条:「兩再新修第十七卷染華為醫心館」

六. 京都大学図書館所蔵、森立之旧蔵の『新修本草』(請求記号シ/561、「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」で公開)にある跋文:

[第四卷末]:此一巻以浅井紫山三経樓蔵本影抄

[第五卷、第十七卷末]:浅井本傳抄

[第十二卷末]:此壹卷亦浅井本傳抄事詳在于十九卷末 森立之

[第十三卷末]:第十三卷以仁和寺宮寶庫中所蔵本傳抄

[第十四卷末]:仁和寺傳抄本也

[第十五卷末]:此十五卷一卷狩谷掖齋遊京之日傳寫以贈小嶋學古君者事詳見于學古君跋文中

[第十九卷末]:第四第五第十二第十五第十七第十九

右新修本草殘本。其第十五狩谷卿雲遊京師時傳録見贈某。他五卷傳鈔浅井紫山三経樓蔵本。

⁵⁰ 筆者は杏雨書屋で原本を確認した。この資料については、木場(2015)の報告がある。

天保五年歲在闕逢敦牂冬十月廿七日小島質記。

右跋就小島氏原本抄写

[第二十卷末]：第十三第十四第十八第廿

歲在壬寅陪從 一品准后法親王朝觀於京師之時。傳錄此四卷。原卷仁和寺宮寶庫所藏云。

弘化丙九月既望小島質記。

右就小島寶素原本抄錄此跋文

七. 『經籍訪古志』(澁江抽斎・森立之著、1856年成立)の卷七：

新修本草二十卷卷子本、影寫舊鈔本、存第四、第五、第十二、第十三、十四、十五、十七、十八、十九、廿凡十卷、聿修堂藏、

司空上柱國英國公臣李勣等奉勅修次。第十五卷末載顯慶四年各官銜名。次記天平三年歲次辛未七月十七日書生田邊史。每行十六七字。注文二十五六字。按此本舊鈔于天平中。天平距顯慶僅六十七年。則蓋是當時遣唐之使所齎而歸。實爲李勣等編修之舊。無復可疑矣。今以唐氏證類校之。異同錯出。可互是正。至彼土宋以後亡佚不傳。則李時珍輩無知妄作亦職是由。洵可慨也。乃在皇國亦久湮晦不顯。往歲狩谷卿雲西上。觀一緝紳家舊鈔。即五六百年前人据天平鈔本謄錄者。實爲天壤間絕無僅有之秘笈。仍亟影摹以傳同人。於是神光煥發。世始得窺古本草之眞。則卿雲之功為至鉅也。

小島學古聞尾藩淺井正翼就仁和寺書庫、鈔得廿餘卷。亟使書手杉本望雲就而謄錄以歸。

4.3.3 新修本草を用いた校讐：本草和名版本に見られる小島宝素の書入れ

松本書屋本上巻序の初葉に、次のような書入れが見られる。

加圈者見存 ○尾本、◎京本、◎崇蘭古巻本、\新輯本

\第三玉石上、○第四玉石中 五版、○第五玉石下 八版、\第六草上 十一版、
\第七草上 十九版、\第八草中 廿五版、\第九草中 卅二版、\第十草下 卅八版、

\第十一草下 四十三版、○第十二木上 五十版、◎第十三木中 五十五版、
◎第十四 木下、◎第十五獸禽 五版、第十六蟲魚 十三版、○第十七菓 廿八版、
◎第十八菜 卅三版、○第十九米穀 四十一版、◎第廿有名未用本草外薬 四十五版

新修本草現存 四、五、十二(以上尾)、十五(京)、十七(尾)、十九(尾)、
十三、十四、十八、廿、以上四卷天保壬寅冬月在京傳錄以歸

これは、森父子が移写した小島宝素の書入れである。小島父子書入れ本（国会本）においては、破線より前の部分は上巻の冒頭（遊紙）に、破線より後ろの部分は下巻の冒頭（見返しと遊紙）に書かれている。

下線部の「〇〇版」は小島本になく、森立之が付け加えたものであり、これは『本草和名』版本における各巻の開始位置を意味している。例えば、「第四玉石中 五版」の「五版」は、『新修本草』の第四玉石中に相当する部分が、『本草和名』版本の五葉から始まるという意味になる。

また、既に森（1940）によって指摘されているが、「尾本」（巻四、五、十二、十七、十九）とは、尾張藩医の浅井貞庵が門人に作らせた鈔本である。「京本」（巻十三、十四、十八、二十）とは、仁和寺蔵本である。「崇蘭古巻本」（巻十五）とは、福井榕亭（1753～1844）崇蘭館の旧蔵本である。「新輯本」（巻三、六、七、八、九、十、十一）とは、小島宝素が天平本（椽齋が鈔録した巻十五）に倣って新輯したものである。小島宝素は、これらのテキストを用いて、『本草和名』を校讐したと考えられる。

次に、小島父子書入れ本（国会本）にはどのような校讐がなされているかを見てみよう。

同本の第四巻と第五巻の巻頭に「新修本草校勘」（上 5 才 8）、「新修本草校訖」（上 8 才 9）といった書入れが見られる（他の巻では見られない）ので、この二巻に対する校讐が完了したと考えられる。そこで今回の調査は、第四巻・第五巻を中心に行う。『本草和名』には、国会図書館蔵小島父子書入れ本を、『新修本草』には、本草図書刊行会の複製本を用いる。

4.3.3.1 引用範囲

『本草和名』の漢文部分は、『新修本草』からの引用が大半を占めている。小島宝素は『本草和名』を校讐する際に、引用範囲を朱線で示している⁵¹。『新修本草』からの引用は見出しのすぐ下にくるのが一般的であるため、朱線より上の部分は『新修本草』からの引用であり、それより下の部分は他の典籍からの引用である。

朱線以外には、項目によって、次のような校讐もなされている。

『本草和名』の「金屑」項では、「一名黄金【陶景注云古舊名金爲黄金】」（上 5 ウ 1）の横に「銀屑注」という朱校がなされている。『新修本草』で確認すると、「一名黄金【陶景注云古舊名金爲黄金】」に相当する部分が「金屑」項には見られず、「銀屑」項にある陶弘景の注に見られる。

『本草和名』の「金牙」項（上 10 才 8）では、『新修本草』からの引用部分「銅牙【陶景注云又有銅牙】金牙」の上に「一名白虎脱歯【出丹口訣】」という内容が混入している。それに対して、小島宝素は位置変更符号を用いて、「一名白虎脱歯【出丹口訣】」を後ろに移動している。

⁵¹ 朱線は、第四巻と第五巻以外に、第三巻、第六～八巻にも見られる。

4.3.3.2 項目立ての相違

『本草和名』の編次は『新修本草』に基づいているとは言え、項目立てを詳しく見ると、若干の相違も見られる。小島宝素は、この相違のある部分に書入れをしているため、次に、その書入れを示す（「唐本」「新修」とは新修本草のことである）。

項目「鐵」（上 7 ウ 5）の横に「生鐵」と書き、上欄に「唐本載生鐵一條」「新修本草鐵下有生鐵一條」と記している。この記載に従って『本草和名』で比較してみると、『新修本草』では「鐵」の後に「生鐵」項を立てている。

第五巻の巻頭記述「第五巻 玉石下卅種」（上 8 オ 9）に対して、小島宝素は、「卅」の下に「一【新修】」と記し、上欄に「千金翼亦作三十一與唐本同」と注記している。『新修本草』で確かめると、その指摘の通りに「卅一種」となっている。

4.3.3.3 用字の相違

両書を比較すると、使用する漢字に少なからず相違が見られる。小島宝素は、相違ある部分に書入れをしている。次に、その書入れを示す。矢印の左は該当部分とその所在で、右は小島の朱校である。漢字の符号化が難しい場合は、漢字構成記述文字列 (IDS) を用いて表記する。

「白水」（上 7 オ 1）→「泉【新修本草】」

「陵」（上 7 オ 2）→「冫麥【新修】」

「躄」「跬」（上 7 ウ 6）→「新修本草躄作跬 跬作跳」「唐本亦作跳」

「紫鉞騏驎竭」（上 8 オ 3）→「新修本草作紫鉞鏃鏃竭」

「琅」（上 8 ウ 1）→「瑯【新】」

「太」（上 8 ウ 5）→「唐本及証類太作大」

「蒼」（上 8 ウ 7）→「倉【新】」

「化」（上 8 ウ 8）→「花【新修】」

「鑛」（上 10 オ 3）→「鑛【新修】」

「礪」（上 11 オ 1）→「石口※【新修】」

「瓦」（上 11 オ 8）→「唐本作屑」

「燕」（上 11 オ 9）→「唐本燕作鷗」

4.4 新修本草以外の漢籍出典

「4.2 漢籍出典に関する凡例」で紹介したように、『本草和名』の上巻冒頭には出典に関する凡例が記されており、『新修本草』以外の出典として「諸家食経・諸家音義・本草雜要訣……玄感傳屍方」の書名が挙げられている。

また、先行研究においては、『本草和名』引用書名索引（真柳 1987b）が作成されている。真柳（1987b）は、台北故宫博物院蔵万延元年影写本を底本に、引用書名 80 種を 50 音順に並び、所出箇所を列記した。この索引は『本草和名』の漢籍出典を把握するのに有用である。

本節では、『本草和名』の凡例にある書名を中心に、真柳（1987b）を参考にしながら、『新修本草』以外の漢籍出典を調査する。これらの漢籍は殆ど佚書であるため、まず日本への伝来・伝存状況を調査することが必要である。その方法としては、当時の日中両国の目録で確認することが有効である。

『日本国見在書目録』は、貞観十七年（875）、宮廷の文庫である冷泉院の焼失を機に、藤原佐世が勅命を受けて編纂した、当時の日本に現存する漢籍の総目録である。漢籍の伝来情報を知るうえでかけがえのない存在であり、中国側の正史芸文・経籍志を補う史料としても著名である。『本草和名』の成立年代に近いこともあるので、本調査はこの目録での確認から始める。

「芸文志」（或は「経籍志」）は、中国の紀伝体歴史書「正史」における構成要素の一つである「志」の中の篇目名であり、史書が叙述された時代の朝廷の蔵書目録である。本調査は、漢書・隋書・唐書・宋史の芸文・経籍志を視野に、『日本国見在書目録』と照合して、書名・巻数・著者情報を確認する。

次に、『本草和名』の凡例にある書名を医書と非医書に分けて、調査した結果を一覧にする。出典に関しては、出現頻度が高いものから低いものまで漢籍出典を配列し、それに対して、日中書目への掲載状況、書物の現存状況を示す。「×」は「無」、「△」は同じ書かどうか「不確か」であることを表す。

4.4.1 医書

表 4-2 は、目録において「医書」（「医方家」「医方」「医術」「医術本草」とも）の部に載せられている諸書を一覧にしたものである。

表 4-2 本草和名所引新修本草以外の医書

出典別	出現頻度	日本国見在書目録	中国正史経籍志・芸文志	現存
仁謂本草音義 ⁵²	269	新修本草音義一 仁 揖撰 (医方家)	×	×
楊玄操音義 ⁵³	181	本草注音一 楊玄撰 (医方家)	×	×
崔禹食經 ⁵⁴	139	食經四 崔禹錫撰 (医方家)	△ ⁵⁵	×
釋藥性 ⁵⁶	124	×	×	×
本草雜要訣 ⁵⁷	84	×	本草雜要決一卷 (隋書：医方)	×
大清經 ⁵⁸	52	大清經十二 玄超 撰、大清經二 上下 (医方家)	× ⁵⁹	×
七卷食經 ⁶⁰	43	新撰食經七 (医方家)	△ ⁶¹	×
本草拾遺 ⁶²	35	×	陳藏器本草拾遺十卷 (新唐書：医術、宋史：医書) ⁶³	×
范注方	33	△ ⁶⁴	范東陽方一百五卷 録一卷 范汪撰 (隋書：医方)、雜藥方一百七十卷 范汪方、尹穆	×

⁵² 「仁謂音義」「仁謂義」「仁謂」の形で引用している。

⁵³ 「楊玄操音義」「楊玄操」「楊玄」「楊」「(楊玄操)注」の形で引用している。

⁵⁴ 「崔禹錫食經」「崔禹食經」「崔禹」の形で引用している。

⁵⁵ 『隋書』経籍志に「崔氏食經四卷」(医方)、『旧唐書』経籍志に「食經九卷 崔浩撰」(医術本草)、『新唐書』芸文志に「崔浩食經九卷」(医術)が見られるが、「崔禹食經」との関係は不明である。

⁵⁶ 「釈藥」「精藥性」の形で引用している。

⁵⁷ 「雜要訣」「雜藥訣」「雜要交」「雜要」の形で引用している。

⁵⁸ 「大清經」「太清經」の形で引用している。

⁵⁹ 正史芸文・経籍志にその書名が見えない。『顔氏家訓』の養生篇に「陶隱居大清方」とあるが、本書との関係は不明である。

⁶⁰ 「七卷食經」「新撰食經」の形で引用している。

⁶¹ 正史芸文・経籍志に「食經」の名を冠する書物が多数掲載されているが、「七卷食經」が含まれるかどうかは不明である。

⁶² 「本草拾遺」「拾遺」の形で引用している。

⁶³ 『嘉祐補注神農本草』(1057)の「補注本草所引書伝」には本書について詳細な記録がある。

⁶⁴ 『日本見在書目録』に「雜藥方十八卷」(医方家)があるが、「范注方」との関係は不明である。

出典別	出現頻度	日本国見在書目録	中国正史経籍志・芸文志	現存
			撰（旧唐書：医術本草）、尹 穆纂范東陽雜藥方一百七十卷 范汪（新唐書：医術）	
神仙服餌方	29	△ ⁶⁵	服餌方三卷 陶隱居撰（隋 書：医方）	×
藥訣	26	藥辨決一（医方家）	× ⁶⁶	×
丹草口訣 ⁶⁷	24	丹決一（医方家）	△ ⁶⁸	×
本草稽疑 ⁶⁹	24	×	×	×
本草疏 ⁷⁰	22	×	×	×
小品方	11	小品十二（医方家）	小品方十二卷 陳延之撰（隋 書：医方、旧唐書：医術本 草）、陳延之小品方十二卷 （新唐書：医術）	尊經閣 残卷 ⁷¹
養性要集	10	△ ⁷²	養生要集十卷 張湛撰（隋 書：医方）、養生要集十卷 張湛撰（旧唐書：医術本 草）、張湛養生要集十卷（新 唐書：医術）	×
古今録驗方 ⁷³	7	古今録驗五十（医方 家）	古今録驗方五十卷 甄權撰 （旧唐書：医術本草）、古今 録驗方五十卷（新唐書：医 術）	×

⁶⁵ 『日本見在書目録』に「神仙服藥經一」（医方家）があるが、「神仙服餌方」との関係は不明である。

⁶⁶ 正史芸文・経籍志にその書名が見えないが、『医心方』卷二には「張仲景藥弁決」との記載が見られる。

⁶⁷ 「丹口訣」「丹秘口訣」「丹藥口訣」「丹藥訣」の形で引用している。

⁶⁸ 『新唐書』芸文志に「丹砂訣一卷 開元二十二年上」（道家）、『宋史』芸文志に「徐真君丹決一卷」（道家）などが見られるが、「丹口訣」との関係は不明である。

⁶⁹ 「本草稽疑」「稽疑」「本草」の形で引用している。

⁷⁰ 「疏文」「疏」「文」の形で引用している。

⁷¹ 本書が中国で佚亡してから千年余を経て出現した経緯については、小曾戸（1996）「第四章 第三節：『小品方』」が詳しい。本残巻は全巻にわたり、朱のヲコト点、墨の返り点・傍訓・傍注が付されている。奥書を欠くため、書写年代は限定し難いが、尊經閣文庫の目録では「鎌倉末期」とされている。

⁷² 『日本見在書目録』に「養性方一 許先生撰」（医方家）があるが、「養性要集」との関係は不明である。

⁷³ 「録驗方」の形で引用している。

出典別	出現頻度	日本国見在書目録	中国正史経籍志・芸文志	現存
孟詵食経 ⁷⁴	6	食療本草三 孟詵撰 (医方家)	孟詵食療本草三卷(新唐書：医術)、孟詵食療本草六卷(宋史：医書)	敦煌残卷 ⁷⁵
五金粉薬訣	5	×	×	×
馬琬食経 ⁷⁶	5	食経三 馬琬撰、食経一 同撰(医方家)	食経三卷 馬琬撰(隋書：医方)	×
耆婆脉決経	3	耆婆脉決十二 釋羅什撰(医方家)	耆婆所述仙人命論方二卷 目一卷 本三卷(隋書：医方)、耆婆脉経三卷(宋史：医書)	×
刪繁論 ⁷⁷	3	刪繁論十 謝士泰(医方家)	刪繁方十三卷 謝士泰撰(隋書：医方)、刪繁方十二卷 謝士泰撰(旧唐書：医術本草)、謝士泰刪繁方十二卷(新唐書：医術) ⁷⁸	×
神農食経	2	×	△ ⁷⁹	×
甄立言本草音義 ⁸⁰	2	本草音義三 甄立言撰	本草音義七卷 甄立言撰(隋書：医方)、本草音義七卷(新唐書：医術)	×
千金方	2	千金方三十一 孫思邈撰(医方家)	孫思邈千金方三十卷(新唐書：医術、宋史：医書)	完存
葛氏方	1	葛氏方九(医方家)	×	×
鑑真 ⁸¹	1	鑑上人秘方一(医方家)	×	×

⁷⁴ 「孟詵食経」「孟詵」の形で引用している。

⁷⁵ 残卷(S.76)は137行、行毎に20余字、共2774字で、26種類の薬材を掲載している。これに詳しい研究には中尾(1930)、渡邊(1955a)、馬(1984)、小曾戸(1996)「第五章 第二節：スタイン文書」がある。

⁷⁶ 「馬琬食経」「馬琬」「食経」の形で引用している。

⁷⁷ 「那繁論」「繁論」の形で引用している。

⁷⁸ また、『宋史』芸文志に「楊損之刪繁本草五卷」(医書)があるが、「刪繁方」との関係は不明である。

⁷⁹ 『漢書』芸文志に「神農黄帝食禁七卷」(経方)があり、馬(1984)と真柳(1985)は、「神農食経」との関係を示唆している。

⁸⁰ 「甄立言音義」「甄立言」の形で引用している。

⁸¹ 「鑑真方」の形で引用している。

出典別	出現頻度	日本国見在書目録	中国正史経籍志・芸文志	現存
脚氣論 ⁸²	1	脚氣論一 周禮撰集 (医方家)	脚氣論三卷、脚氣論一卷 蘇鑿、徐王等編集（新唐書：医術）、蘇敬徐玉唐侍中三家脚氣論一卷（宋史：医書）	×
玄感傳屍方	1	×	玄感傳屍方一卷 蘇游撰（旧唐書：医術本草）、蘇游玄感傳屍方一卷（新唐書：医術）、蘇游 玄感傳屍方一卷（宋史：医書）	×
廣利方	1	×	徳宗貞元集要廣利方五卷（新唐書：医術）、貞元集要廣利方五卷（宋史：医書）	×
新録単方	1	新録單要方五 魏孝澄撰（医方家）	×	×
新方	1	△ ⁸³	△ ⁸⁴	×
膳夫経	1	×	楊曄膳夫経手録四卷（新唐書：医術、宋史：医書）	×
龍門百八方 ⁸⁵	1	×	×	×

上記書名の出現頻度を見ると、「仁譚本草音義」「楊玄操音義」の引用が非常に多いことが分かる。これらの書は本草音義という種類のもので、主流本草（『新修本草』など）に対する音義書として位置づけられる。本草音義の引用が多いということは、『本草和名』が中国本草書の日本向けの注釈書であるという性格を物語っている。

表 4・2 に示すような諸書以外に、『本草和名』の本文に見られる医書の資料名としては、次のものが挙げられる（括弧内の数字は出現頻度を表す）。

「華佗方」(1)、「雑録方」(1)、「雑方」(1)、「卅隶方」(1)、「蒋孝苑注」(1)、「仙方」(1)、「洞真丹経」(1)、「波羅門方」(1)、「薬対」(2)、「雷公採薬吏」(1)、「練名方」(1)

⁸² 「徐恭論」（「徐思恭脚氣論」の略）の形で引用している。

⁸³ 『日本見在書目録』に「新撰方一」（医方家）があるが、「新方」との関係は不明である。

⁸⁴ 『隋書』経籍志に「新撰薬方五卷」（医方）があるが、「新方」との関係は不明である。

⁸⁵ 「龍門方」の形で引用している。

これらの書は出現頻度が低く、他の書からの間接引用である可能性が考えられる。

4.4.2 非医書

表 4-3 は、目録において「医書」以外の部（「雑家」「道家」など）に載せられている諸書を一覧にしたものである。

表 4-3 本草和名所引非医書

出典別	引用例数	日本国見在書目録	中国正史経籍志・芸文志	現存
兼名苑 ⁸⁶	245	兼名苑十五 今案卅卷（雑家）	兼名苑十卷 釋遠年撰（旧唐書：名家）、僧遠年兼名苑二十卷（新唐書：名家）	×
崔豹古今注	26	古今注三 崔豹撰（雑家）	古今注三卷 崔豹撰（隋書：雑家）、古今注五卷 崔豹撰（旧唐書：雑家）、崔豹古今注三卷（新唐書：雑家）、崔豹古今注一卷（新唐書：史部儀注）	完存
墨子枕中五行記 ⁸⁷	10	×	墨子枕中五行要記（隋書：五行） ⁸⁸	×
抱朴子内篇	5	抱朴子内篇廿一 葛洪撰（道家）	抱朴子内篇二十一卷 音一卷 葛洪撰（隋書：道家）、抱朴子内篇二十卷 葛洪撰（旧唐書：道家）、抱朴子内篇二十卷 葛洪（旧唐書：道家）	完存

出現頻度から見ると、「兼名苑」からの引用が圧倒的に多いことが分かる。「兼名苑」は現存しないが、唐の釋遠年によって著された字書体の語彙集であると推測される。このことから、『本草和名』が専門性の高い辞書的要素をもっていることが窺える。

⁸⁶ 「兼名苑」「兼名兼苑」「兼名」「(兼名苑)注」の形で引用している。

⁸⁷ 「墨子五行記」「墨」の形で引用している。

⁸⁸ 『隋書』経籍志の医方の部にも「墨子枕内五行紀要一卷」が掲載されているが、五行の部にあるものと同じ書を指しているかどうかは不明である。

表 4-3 に示すような諸書以外に、『本草和名』の本文に見られる医書以外の資料名としては、次のものが挙げられる（括弧内の数字は出現頻度を表す）。

「郭璞」(1)、「漢武内伝」(1)、「玉篇」(1)、「広雅」(2)、「広志」(1)、「呉録」(1)、「爾雅」(8)、「爾雅注」(2)、「(搜)神記」(1)、「荘子」(1)、「唐韻」(1)、「博物志」(2)、「仏経」(1)、「文選」(1)、「礼(記)」(1)、「類也」(1)、「鹿角経」(1)

これらの書は出現頻度が低く、かつ類書によく引かれる書であるため、間接引用の可能性が高いと考えてよいだろう。

4.5 おわりに

本章は、『本草和名』の漢籍出典について考察を行った。

『本草和名』の上巻冒頭に漢籍出典に関する凡例があるので、まずそこに記されている漢籍の引用方法を確認した。そこから、本書が『新修本草』の本文と『食経』等をベースにして項目を立てた上で、『新修本草』の注及びその他の諸書にある別名を付け加える形で形成されたものであることを指摘した。

次に、本書の主要な出典である『新修本草』について、先行研究に基づき、諸本と古写本の伝鈔経緯を紹介した。その上で、『本草和名』版本に見られる、『新修本草』を用いた校讐を分析した。それによって、『新修本草』の復元にも取り組んでいた小島宝素が、『本草和名』版本に「引用範囲」「項目立ての相違」「用字の相違」を示す書入れを残していたことが判明した。

最後に、『新修本草』以外の漢籍出典について、『日本国見在書目録』と中国の正史芸文・経籍志（漢書から宋史まで）への掲載状況、ならびに現存状況を調査した。引用頻度という視点から、本草音義書（「仁謂本草音義」「楊玄操音義」）や字書体語彙集（「兼名苑」）の引用が非常に多いことを指摘した。

5 本草和名の組織

5.1 はじめに

第4章では『本草和名』の出典にどのようなものがあるかを見てきた。『本草和名』は『新修本草』の本文と『食経』等をベースにして項目を立てた上で、『新修本草』の注及びその他の諸書にある別名を付け加える形で形成されたものであることが分かった。

本章では、漢籍から集められた名称を漢名と称し、それに対して、本書によって新しく付された和訓を和名と称する。この、漢名と和名がどのような形式と構造で取り入れられているかを明らかにすることを目的とする。

調査は、「本草和名データベース」⁸⁹に基づいて行う。本データベース基本情報も合わせて提示する。

5.2 本草和名データベースの概要

国語学の観点からみると、『本草和名』は専門用語を集めた辞書、すなわち薬名辞書、として位置づけられる。詳しくは後述するが、本書においては、見出し漢名・項目内漢名・和名の対応関係が複雑な様相を呈しており、構造を詳しく考察するためには、データベースの構築が望ましいとされる。

近年、日本古辞書の研究においては、こうしたデータベースの構築が進んでおり、池田(2014)が推進する「平安時代漢字字書総合データベース(HDIC)」がそのモデルケースとして挙げられる。本研究は、それを参考に、「本草和名データベース」を構築している。次に本データベースの入力方針とフィールド構成について簡単に紹介する。

5.2.1 入力方針

底本には松本書屋本版本と、無窮会専門図書館神習文庫所蔵の万延元年影写本を用いるが、実際のデータ入力には、版本をベースとして、影写本と相違のある箇所をマークアップし、そこに注を附する。

データを入力するソフトウェアには Excel を使用する。データベースの範囲は掲出項目、本文、および元簡による頭注のみで、序文などは含まない。本文にある割注は「【】」で、「一名」の後ろにある別名は「」で、松本書屋本の上欄にある頭注に対応する漢字は「◇」で括る。

現在の進捗状況は、版本全文の入力が終わっており、影写本との相違及び頭注部分は入力途中である。

⁸⁹ 武情・劉冠偉(2017)を参照。

本書にある文字はユニコードによる符号化を行い、符号化が難しい漢字は「/」で括って、漢字構成記述文字列 (IDS) で記入する。延べで、見出しの字数は 2,393、本文の字数は 35,685、合計字数は 38,078 であり、そのうち、踊り字 (々) は 91 字があり、符号化できなかった字は 343 字 (見出し 28 字、本文 315 字) がある。

結果として、見出しの符号化率は、次の表 5-1 に示すように、拡張漢字 B (Ext. B) まで 98.79% (延べ) で、本文の符号化率は表 5-2 に示すように、拡張漢字 D (Ext. D) まで 98.87% (延べ) である。IDS を利用すれば、ほぼ全ての文字を入力することができる。

表 5-1 見出しの符号化率

ブロック	延べ数	異なり数
CJK	2,332 (97.45%)	970(96.70%)
Ext. A	17 (0.71%)	13 (1.30%)
Ext. B	15 (0.63%)	15 (1.50%)
総計	2,364 (98.79%)	998 (99.50%)

表 5-2 本文の符号化率

ブロック	延べ数	異なり数
CJK	35,031(98.17%)	2,514(84.33%)
Ext. A	91(0.26%)	53(1.78%)
Ext. B	150 (0.42%)	103(3.46%)
Ext. C	7(0.02%)	7(0.23%)
Ext. D	1(0.00%)	1(0.03%)
総計	35,280(98.87%)	2,678(89.83%)

5.2.2 フィールド構成

本データベースは一つのテーブルからなる。テーブルは id、book、vol、page、line、entry、def、diff-type、diff-def、japanese-name、japanese-reading の 11 個のフィールドで構成した。第 3 章の図 3-4 で示した「雲母」を例にして、各フィールドの内容と例文は表 5-3 に示す。

その中、japanese-reading フィールドは後述する「5.4.3 和名の万葉仮名」に従って現代仮名遣で翻刻したものである。両本相違の diff-type と頭注の「diff-def」は本文の def にある「◇」で括られたものに対応する。「◇」で括られたものが複数ある場合、「;」で区切り、出現順に入力する。

表 5-3 本草和名データベースのフィールド構成

フィールド	内容	例
id	出現順 ID	HW0010
book	冊	上
vol	巻	三
page	掲出頁	03 表
line	掲出行	3
entry	見出し	雲母
def	本文	一名「雲珠」【色多赤】一名「雲華」【五色具】一名「雲英」【色多青】一名「雲液」【色多白】一名「雲沙」【色多黄】一名「磷石」【色正白仁譚音履進及】一名「雲膽」【純黒者也】一名「地〈涿〉」【色雜黒者也仁譚卓楊玄操音祿已上二名出陶景注】一名「六甲父母」【出墨子五行記】一名「華飛莢」【出丹方】一名「鴻光」【出太清經】一名「石銀」【出兼名苑】雲母者「星精」也又云「日精」也【出范注方】和名歧良々出陸奥国
diff-type	両本相違	空字
diff-def	頭注	按涿原本缺今据証類校補
japanese-name	和名	歧良々
japanese-reading	現代仮名遣による読み	きらら

5.3 本草和名の漢名

本節では、まず、版本と写本の間の変文を示す。次に、『本草和名』データベースに基づき、見出しの漢名及び項目内の漢名の数を統計し、形式上の特徴を分析する。

5.3.1 版本・写本間の異文

筆者らが構築する『本草和名』データベースは、松本書屋本に基づいているが、万延元年影写本との間に見られる異文をも反映させる予定である。ただし、漢名部分の異文は入力途中であるため、ここでは一部だけ例示することにとどめる。

①前項目との分離

本書では、形式上項目ごとに一行目が高く、二行目以降は一字下げて書写する形式をとっている。しかし、伝写の過程において、その法則が乱れていき、項目間の区切りが失われている箇所が見受けられる。例えば、次に示すような項目においては、万延元年影写本では前

項目に続いて書かれているが、松本書屋本ではそれを訂正し、前項目と分離させている。

蒼石（上五 9 才 2）⁹⁰、蓋（草）⁹¹（上十一 45 才 8）、牛角鯉（下十五 7 ウ 1）、
珂（下十六 24 ウ 5）、蓼實（下十八 36 ウ 8）

②脱落項目の補入

万延元年影写本では、「烏古瓦」（上五 11 才 8）という項目が脱落しており、「烏古瓦」の注文は前項目の「白瓷瓦」（上五 11 才 7）に付されている。松本書屋本では、それを正し、「烏古瓦」を補入している。

③脱字・空字の補入

松本書屋本は万延元年影写本に見られる脱字や空字を補っている⁹²。次にその中の二例を挙げる（⇔の左は万延元年影写本、右は松本書屋本）。

雲母（上三 3 才 3）：一名地 ⇔ 一名地涿
方解石（上五 8 ウ 9）：一名黄 ⇔ 一名黄石

5.3.2 見出しの漢名

『本草和名』凡例前半部分にある「本草内薬」というのは『新修本草』に収録されている薬のことである。第三～第十四巻の部分において、項目の見出しは『新修本草』とほぼ一致している。第十五～第十九巻において、見出しには『新修本草』に加えて、『食経』から採録したものもある。末巻において、見出しは『新修本草』以外の出典から採録している。

また、『本草和名』は各巻の初頭に「第三巻 玉石上二十一種」のように、巻ごとの項目数を示している。しかし、本編で確認すると、実際の数とずれている場合が多い。岡西（1964）では関連する考証がなされており、それを参考にして実際の項目数を表 5-4 に掲載する。

⁹⁰ 所在は松本書屋本による。「上五 9 才 2」は「上冊第五巻 9 丁表 2 行目」を示す。以下同じ。

⁹¹ 万延元年影写本では「草」が脱落している。

⁹² 「空字」とは、文字が脱落しているが、字数分のスペースが空いている。考証学者の森立之らは校正符号などを用いて、両本の異文を示しており、その詳細は武（2013）、武（2016）を参照。

表 5-4 本草和名の項目数

巻別	巻首記述	実際の項目数
第一巻	×	×
第二巻	×	×
第三巻	玉石上二十一種 ⁹³	26
第四巻	玉石中三十種 ⁹⁴	29
第五巻	玉石下三十種 ⁹⁵	31
第六巻	草上四十一種 ⁹⁶	40
第七巻	草上三十八種	38
第八巻	草中三十七種	37
第九巻	草中三十九種	39
第十巻	草下三十五種 ⁹⁷	36
第十一巻	草下六十七種	67
第十二巻	木上三十七種 ⁹⁸	26
第十三巻	木中二十八種 ⁹⁹	30
第十四巻	木下四十五種 ¹⁰⁰	43
第十五巻	獣禽六十九種：本草五十六食経十三 ¹⁰¹	72
第十六巻	虫魚類百十三種：本草七十二食経四十一	113
第十七巻	菓四十五種：本草二十五食経二十	45
第十八巻	菜六十二種：本草三十八食経二十四	62
第十九巻	米穀卅五種：本草二十八食経七 ¹⁰²	36
第二十巻	有名無用 百九十三種	193

⁹³ 「二十二種」の誤記である。また、「五色石脂」を「青石脂」「赤石脂」「黄石脂」「白石脂」「黒石脂」の五種に分けているので、実際の項目数は26である。

⁹⁴ 「鐵」の次に「生鐵」が脱落しており、実際の項目数は29である。

⁹⁵ 「三十一種」の誤記である。

⁹⁶ 「四十種」の誤記である。

⁹⁷ 「烏頭」の次に「烏喙」を立てており、実際の項目数は「三十六」である。

⁹⁸ 「二十七」の誤記である。「松脂」の次に「松實」を立てており、「牡桂」の次に「桂」が脱落している。また、外観上「牡荊」項が前項目の「蔓荊」に吸収され、実際の項目数は「二十六」である。

⁹⁹ 「栞根白皮」の次に「栞菌」と「赤鶏栗」を加えており、実際の項目数は「三十」である。

¹⁰⁰ 「梓白皮」の次に「蘇方木」と「接骨木」が脱落しており、実際の項目数は「四十三」である。

¹⁰¹ 「人屎」の次に「人溺」と「糞」の二項目を立て、「狸骨」の次に「家狸」の一項目を、「豚卵」の次に「脂腿」「豚又有獮」「猪」「猯猪肉」の四項目を、「鵝頭」の次に「山鷄」「鷓」「雲雀」などの十項目を立てている。その中から「食経十三」を引くと、四項目が増えている。一方、外観上「豹肉」項が前項目の「虎骨」に吸収されているので、実際は記述より三項目多い。

¹⁰² 「大豆」の次に「生大豆」を別項目として立てており、実際の項目数は「三十六」である。

巻別	巻首記述	実際の項目数
本草外薬	七十種：稽疑三十三・新撰食経八・拾遺二十五・世用四	70
総計	一千二十五種	1033

見出しの内訳を確認すると、次の七箇所重複が見られる。

女萎（上六 12 ウ 9）、女萎（上八 32 オ 4）
 菰根（上十一 46 ウ 9）、菰根（下十七 33 ウ 4）
 羊乳（下十五 6 オ 2）、羊乳（下二十 46 ウ 7）
 石蜜（下十六 13 オ 7）、石蜜（下十七 30 ウ 9）
 芥（下十八 36 ウ 2）、芥（下二十 49 ウ 1）
 薰草（下二十 50 オ 2）、薰草（下外 52 オ 6）
 練石草（下二十 50 ウ 1）、練石草（下外 52 ウ 1）

これらの中、「菰根」（下十七 33 ウ 4）は『七卷食経』からの増補である。「薰草」（下外 52 オ 6）と「練石草」（下外 52 ウ 1）は『本草稽疑』からの増補である。残りの四箇所は『新修本草』でも重複している。

5.3.3 項目内の漢名

『本草和名』凡例の後半部分では、見出しの漢名に対して、項目内にある漢名を「別名」と称している。しかし、詳細は後述するが、双方の関係は単なる「別名」とは言えないパターンが多く見受けられる。そのため、ここでは「別名」ではなく、「項目内漢名」と仮称する。

巻別項目内漢名の数は表 5-5 に示す通りである。本書には合計 1,033 項目があり、それに対して、項目内漢名は 3,591 個ある。従って、平均一項目当たり 3.5 個の項目内漢名を持っている。第二十巻（有名無用）と本草外薬においては、項目内漢名の数が少なく、平均項目内漢名数は 1 を下回っているが、それ以外の巻においては、一項目当りには 3 個以上の項目内漢名を持っている。

表 5-5 項目内漢名数の統計

巻別	項目数	項目内漢名数	平均項目内漢名数
第三～五巻 玉石	86	312	3.6
第六～十一巻 草	257	1,424	5.5

巻別	項目数	項目内漢名数	平均項目内漢名数
第十二～十四巻 木	99	410	4.1
第十五巻 獣禽	72	239	3.3
第十六巻 虫魚類	113	459	4.1
第十七巻 菓	45	199	4.4
第十八巻 菜	62	226	3.6
第十九巻 米穀	36	114	3.2
第二十巻 有名無用	193	151	0.8
本草外薬	70	57	0.8
総計	1,033	3,591	3.5

『本草和名』では、漢名を列記するに当たって、何種類かの形式をとっている。例3のように「一名」の後に漢名を並べるパターンもあれば、例4のように、直接漢名を挙げるパターン（「無標記」と仮称）もある。

例3 「石膽」項

上三 2 ウ 9 石膽 一名畢石一名墨石一名基石【楊玄操音義作纂】一名銅勅一名立制止【出薬訣】出備中国

例4 「藍實」項

上七 21 オ 6 藍實 木藍子【葉圓大】菘藍【為淀】蓼藍【不堪為淀】和名阿為乃美

表 5-6 に示すように、この二種の形式が圧倒的に多く、合わせて全体の九割を占めている。

表 5-6 漢名列記の形式による統計

形式	別名数	割合
一名～（例3）	2,860	79.6%
無標記（例4）	592	16.5%
その他（表四）	139	3.9%
総計	3,591	100.0%

また、「一名～」や「無標記」の他には、下掲する例5～例8のような形式も見られる。

例5 「棘刺花」項

上十三 59 ウ 5 棘刺花 【蘇敬注云即棘花】一名析萸【楊玄操音上斯歷反下音覓】一名馬昫
【楊玄操音其俱反】一名刺原又有棗針【蘇敬注云此冥在棗部】一名反刺【出兼名苑】

例5では、漢名「棗針」の前に「又有」という語句を冠している。これに類似するものには「又」、「又云」、「又云是」、「作」、「或作」、「即」、「一曰」などがある。後述する例6～例8のパターンと区別するために、このパターンを「並列式」と仮称する。

例6 「人參」項

上六 15 ウ 2 人參 一名人衙一名鬼蓋一名神草一名人微一名土精一名血參一名黃糸一名玉
精【已上三名出積藥性】人參者藥精也【出范注方】一名人微【出雜要訣】和名加乃尔介
久佐一名尔己太一名久末乃以

例6では、『范注方』を引用して、「人參者藥精也」と記している。「～者～也」という形式で挙げた「藥精」が「人參」に含まれる要素や性質などを表す名称であるならば、前掲の例5とは異なり、並列的なものではなく、定義的な要素を持っている。このパターンを「定義式」と仮称する。

例7 「瞿麥」項

上八 29 ウ 6 瞿麥 【仁諤音衢陶景注云子頗似麥故以名之】一名巨句麥【楊玄操音九懼反】
一名大菊一名大蘭根名紫葳華名藁【已上二名出疏文】和名奈天之古

例7では、『疏文』を引用して、「根名紫葳華名藁」と記している。「紫葳」は「瞿麥」の根の名前で、「藁」は「瞿麥」の華の名前であると分かる。このように、項目内漢名には、見出しの部位別の名称とされるものも見られる。類似するものには「皮名」、「樹名」、「葉名」、「子名」、「殻名」などが挙げられる。このパターンを「部位別式」と仮称する。

例8 「麥門冬」項

上六 12 オ 9 麥門冬 【陶景注云根似穉麥故以名之】秦名羊蕒齊名愛蕒楚名烏蕒隱居本草作

馬葑越名羊薺【楊玄操音戸】一名禹葑【仁謂音家】一名禹餘糧【已上本條】一名禹芝一名虫寧藥一名忍冬一名忍[□]麥一名不死藥一名果一名濮壘一名隨脂楚名馬葑越名羊薺【已上十名出積薬性】一名羊芥一名烏葑【出雜要訣】和名也末須介

例8では、『新修本草』や『積薬性』を引用して、「秦名羊葑齊名愛葑楚名烏葑」、「楚名馬葑越名羊薺」と記している。「羊葑」、「愛葑」、「烏葑」（「馬葑」）、「羊薺」は「秦」、「齊」、「楚」、「越」の各地域における「麦門冬」の名称であると推測できる。このパターンを「地域別式」と仮称する。

上記のように、表5-7にある「その他」をさらに「並列式」「定義式」「部位別式」「地域別式」の四種に大別することが出来る。その内訳は表5-7に示す通りである。

表5-7 「その他」の内訳

分類	形式	別名数
並列式 (例5)	又有～、又～、又云～、又云是～、作～、或作～、即～、一曰～など	45
定義式 (例6)	～者～也、～也、	40
部位別式 (例7)	「根・皮・樹・葉・華・實・子・殻など+名」～	38
地域別式 (例8)	「地域+名」～	13
総計		139

5.4 本草和名の和名

本章は万延元年影写本と松本書屋本の間に見られる異文を示した上で、『本草和名』データベースに基づき、松本書屋本の和名注記および万葉仮名用字の実態について調査を行う。

5.4.1 版本・写本間の異文

万延元年影写本と松本書屋本の間では、16項目の和名に相違が見られる。その詳細は次の通りである（⇒の左は万延元年影写本、右は松本書屋本）。

① 単字の補入

昌蒲（上六 13 ウ 6）：和名阿也久佐 ⇔ 和名阿也女久佐

□⁺懷香子（上九 37 ウ 6）：和名礼乃於毛 ⇔ 和名久礼乃於毛

蛇莓汁（上十一 46 ウ 7）：和名美以知古 ⇔ 和名倅美以知古
 敗夭公（上十一 47 ウ 1）：和名多加佐乃也礼 ⇔ 和名多介加佐乃也礼
 甑帯灰（上十一 50 ウ 2）：和名古之和良乃波比 ⇔ 和名古之支和良乃波比
 驢屎（下十五 10 オ 7）：和名字佐岐末 ⇔ 和名字佐岐宇末
 桑蠨蛸（下十六 14 オ 1）：和名於保知布久利 ⇔ 和名於保知加布久利
 鯉魚（下十六 15 オ 9）：和名比 ⇔ 和名古比
 馬刀（下十六 24 オ 2）：和名末乃加比 ⇔ 和名末天乃加比
 苦菜（下十八 35 ウ 1）：和名尔奈一名都波比良久々佐 ⇔ 和名尔加奈一名都波比良久々佐
 蠶沙（下外 53 オ 9）：和名加比古乃曾 ⇔ 和名加比古乃久曾

② 複合語一部の補入

秦芄（上八 25 ウ 9）：和名都加利久佐一名波加利 ⇔ 和名都加利久佐一名波加利久佐
 鷄頭實（下十七 29 オ 9）：和名美都布々岐 ⇔ 和名美都布々岐乃美

③ 和名の追加

安石榴（下十七 32 ウ 4）：掲載なし ⇔ 和名佐久呂
 柑子（下十七 32 ウ 8）：掲載なし ⇔ 和名加牟之

④ 衍字の削除

薺菜（上九 37 オ 3）：和名奈岐一名奈岐 ⇔ 和名奈岐

5.4.2 和名注記の統計

本書において、和名はすべての項目に付されているわけではない。和名注記のある項目数や和名注記の割合は表 5-8 の通りである。

表 5-8 和名注記の統計

巻別	項目数	和名注記項目	和名注記割合
第三～五巻 玉石	86	21	24.4%
第六～十一巻 草	257	207	80.5%
第十二～十四巻 木	99	68	68.7%

巻別	項目数	和名注記項目	和名注記割合
第十五巻 獣禽	72	47	65.3%
第十六巻 虫魚類	113	93	82.3%
第十七巻 菓	45	37	82.2%
第十八巻 菜	62	57	91.9%
第十九巻 米穀	36	27	75.0%
第二十巻 有名無用	193	0	0.0%
本草外薬	70	29	41.4%
総計	1,033	586	56.7%

巻ごとにみると、第三～五巻（玉石）、第二十巻（有名無用）、本草外薬を除くと、和名注記の割合は六割以上を占めている。合計からみると、本書は 1,033 種の薬物を収録しており、そのうち 586 種に和名が注記されている。

その内訳を見ると、

- ① 和名注記のある 586 の項目には、一項目に一つの和名、一項目に二つの和名、一項目に三つの和名、の三パターンがある。

二つの和名を持つのは計 94 項目で、三つの和名を持つのは計 11 項目である。

従って、延べ和名数（重複を含めた和名の総数）は 702 である。

- ② また、同じ和名が複数の項目に出現する場合がある。

二項目に出てくるのは、「乎止乎止之」赤箭（上六 11 ウ 9）・鬼督郵（上七 25 ウ 1）、「於毛多加」澤蔞（上六 14 オ 6）・烏芋（下十七 31 ウ 1）などの 35 語である。

三項目に出てくるのは、「阿末奈」黄精（上六 13 オ 4）・麻黄（上八 26 ウ 8）・白薇（上八 30 ウ 9）、「以奴衣」蘇（下十八 37 ウ 7）・假蘇（下十八 38 オ 3）・香薷（下十八 38 オ 6）の 2 語である。

従って、異なり和名数（重複を除いた和名の数）は 663 である。

5.4.3 和名の万葉仮名

本書にある和名は万葉仮名で記されており、当時の文字と音韻を反映している。その万葉仮名用字をまとめた一覧表が、全集本の提要に見られるほか、川瀬（1955）と築島（1981）でも掲載されている。しかし、次に示すように、それらのいずれにも不備が見られる。

- 刊本の提要では「夕」に「大」、「ハ」に「巴」、「キ」に「委」が欠けている。
- 川瀬（1955）では「キ」に「木」、「カ」に「迦」、「レ」に「禮」が欠けている。
- 築島（1981）では「キ」に「木」、「コ」に「己」、「マ」に「万」が欠けており、「キ」に該当する「委」を「ワ」に入れている。

ここでは、今回の調査結果を下記の表 5-9 にまとめる。万葉仮名字母の右にある数字は出現頻数（延べ数）を表す。

表 5-9 万葉仮名用字及び出現頻度

ア	イ	ウ	エ ₁	オ
阿：77	以：41 伊：4	宇：52	衣：18	於：47
カ	キ	ク	ケ	コ
加：193 迦：1	岐：144 支：2 木：1	久：175	介：28	古：60 己：1
サ	シ	ス	セ	ソ
佐：130	之：110	須：52	世：14	曾：23
タ	チ	ツ	テ	ト
多：68 太：7 大：1	知：60	都：106	天：11	止：40
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
奈：77	尔：38	奴：19	祢：50	乃：169
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
波：144 巴：1	比：113	布：60	倍：14	保：56
マ	ミ	ム	メ	モ
末：98 万：1	美：106 三：3	牟：29 无：4	女：34	毛：47
ヤ		ユ	エ ₂	ヨ
也：46		由：9	衣：2 江：1	与：12
ラ	リ	ル	レ	ロ
良：88	利：61	留：26	礼：12 禮：1	呂：27
ワ	キ		エ	ヲ
和：10	為：15 委：1		恵：5	乎：24

なお、川瀬（1955）によれば、上代特殊仮名遣い甲類・乙類の分別は『本草和名』ではなされておらず、清・濁表記の区別も殆どないという。この二点の検証については今後の課題とし、本論では区別せずに表に挙げた。ア行のエ1とヤ行のエ2の分類については、小倉（2001）を参考にしている。

5.5 おわりに

本章は、『本草和名』データベースに基づき、本書に記載されている漢名と和名について、考察を行った。

『本草和名』は本草書にある薬の性味・効能・採取時節などに関する記述を省略するものの、薬の名称をなるべく多く蒐集しようとする特色がある。この点について、先行研究では断片的に指摘されているものの、詳しい検討はこれまでになされていなかった。そこで本研究では、本書所載の漢名を見出しの漢名と項目内の漢名に分けて検討を行った。

まず、見出しを『新修本草』の編次に対照し、項目数を再計算した。そこから項目内の漢名を、データベースの活用によって、形式上分類・統計することが出来た。更に、漢名列記の形式として「一名～」と「無標記」が最も多く、その他の形式には「並列式」「定義式」「部位別式」「地域別式」の四種類があることを、これまでの研究には見られなかった枠組みとして提示することが出来た。

本書に記載されている和名は、平安時代の語彙と音韻を反映する重要な語学資料であり、関連する文献との比較調査によって、これからの国語学の研究に貢献することが期待される。本研究では、手始めとして、本書の和名に対しては、その注記率や万葉仮名使用状況を統計した。

今後は、本データベースの改良に励むと共に、他文献データベースとの連携を図り、調査を進展させたい。

6 倭名類聚抄における本草和名の出典注記

6.1 はじめに

『倭名類聚抄』(以下『和名抄』)は934年頃に、源順によって編纂された平安中期を代表する意味分類体の漢和辞書である。『本草和名』は『和名抄』の編纂過程で基礎資料として用いられたことが、『和名抄』の序文によって明らかである。

『和名抄』の序文では「大医博士深根輔仁¹⁰³奉勅撰集和名本草¹⁰⁴」と『本草和名』の名を掲げている。しかし、実際のところ、『和名抄』本体の内容を見ると、「和名本草」として引用している例は、下総本を除いた十巻本では見られず、二十巻本では僅か九例しか見られない。そこで、次にその九例を『本草和名』と対照して例示したい。一行目は『本草和名』(「◆」をつけて区別する)の内容で、その下は『和名抄』の内容である。例示の順番は『和名抄』での出順に従う。

例1

◆棕子木 【仁譚音力将反】一名椶【力材反出余雅】和名牟久乃歧(上十三 58 ウ 3)¹⁰⁵
棕子 余雅注云椶【音良】一名即椶【音来和名本草無久】(「伊勢広本」十七 9 ウ)¹⁰⁶

例2

◆蘭草 一名木香一名煎澤草香草【出蘇敬注】...和名布知波加末(上七 22 オ 6)
蘭 兼名苑云蘭一名蕙【蘭蕙二音蘭蕙音恵和名本草云布知波賀万新撰万葉集別用藤袴二字】
(「伊勢広本」二十 25 ウ)

例3

◆羊桃 ...一名銚戈【仁譚音羊招反】...和名以良々久佐(上十一 44 ウ 2)
羊桃 唐韵云蓀芑【遥翼二音和名本草云伊良々久佐】似桃花而白今之羊桃也(「伊勢広本」二十 29 ウ)

例4

◆芎藭 ...一名香果葉名藎蕪...和名於无奈加都良久佐(上七 22 ウ 3)

¹⁰³ 箋注本と曲直瀬本では「深根輔仁」となっているが、尾張本では「深輔仁」となっており、京本類・昌平本・伊勢広本・大東急本では「深江輔仁」となっている。

¹⁰⁴ 尾張本と伊勢広本では「新抄倭名本草」となっている。

¹⁰⁵ 『本草和名』の所在は松本書屋本による。「上十三 58 ウ 3」は「上冊第十三卷 58 丁裏 3 行目」を示す。「【】」は小字双行を示す。以下同じ。

¹⁰⁶ 『和名抄』伊勢広本の所在「十七 9 ウ」は「卷十七 9 丁裏」を示す。以下同じ。

芎藭 唐韵云芎藭【弓窮二音和名本草於无奈加豆良】香草也根曰芎藭苗曰蘼蕪【薇無二音蘼或作薇】（「伊勢広本」二十 40 才）

例 5

◆通草【陶弘景注云茎有細孔兩頭相通】一名附支...和名阿介比加都良（上八 29 才 2）

通草 和名本草云通草陶弘景注云茎有細孔兩頭相通【和名阿介比加都良】（「伊勢広本」二十 41 才）

例 6

◆木瓜實 ...查子【洪】木瓜一名楸...和名毛介（下十七 30 才 5）

木瓜 余雅注云木瓜一名楸【音茂和名本草木瓜毛介】其實如小瓜者也（「伊勢広本」二十 46 才）

例 7

◆樗鷄 一名莎鷄【音沙】一名天鷄一名菹錯【已上出兼名苑】和名奴天乃岐乃牟之（下十六 17 才 8）

樗 陸詞切云樗【勅居反和名本草云沼天】惡木也弁色立成云白膠木【和名上同】（「伊勢広本」二十 47 才）

例 8

◆莽草 ...一名旃【楊玄操音巴余反】一名春草和名之岐美乃木（下十四 1 才 4）

莽草 山海經云莽草【和名本草之木美】可以為毒草者也（「伊勢広本」二十 48 才）

例 9

◆楠材 【楊玄操音南】和名久須乃岐（下十四 2 才 6）

楠 唐韵云楠【音南字亦柁和名本草久須乃木】木名也櫟樟【豫章二音日本紀讀上同】木名生而七年始知矣（「伊勢広本」二十 50 才）

上記九例のうち、例 5（「通草」条）は二十卷本特有の項目であり、十卷本には見られな
い。下総本において、二十卷本と共通して「和名本草」の字面を持つのは、例 6・例 8・例 9
の三項目である。ほかの項目では、和訓の前に「和名」或いは「本草」が冠されている。京本
類において、例 1 では和訓の前に何も冠されておらず、ほかの項目では「本草」が冠されて
いる。このように、「和名本草」として引用されている例は少ない上に、諸本の間で異文が存
在している。

また、『和名抄』の和訓を『本草和名』に照らし合わせて見ると、一致するもの（例2・例3・例5・例6）もあれば、一致しないもの（例1・例4・例7・例8・例9）もある。和訓の関連という視点からも、『本草和名』からの引用がこの九例に限るとは考え難い。では、『和名抄』は『本草和名』を引用する際に一体どのようにして出典注記を施しているのだろうか。

6.2 先行研究の到達点と本研究の課題

6.2.1 先行研究の到達点

『和名抄』の先行研究として、まず挙げられるのは狩谷栞斎の箋注である。その精密な注解は「該博な知識と、みずから工夫した精密・鋭利な方法を駆使して、後人が容易に超えることを得ない高い完成度を達成している」（梅谷 1994 : 228）。『和名抄』を検討する際には、栞斎の研究を参照しなければならないだろう。ところが、栞斎以降の研究には、それを継承するものとそうでないものがある。

吉田（1938）と吉田（1939）は、狩谷栞斎の箋注を高く評価しており、それに基づき、『和名抄』が引用する国書と漢籍の存佚と、それら典籍を引用する際に生じた誤引について論じている。

築島（1965）は、和訓の採用という側面に注目して、『本草和名』と『和名抄』の関係の大まかの部分を指摘している。しかし、狩谷栞斎の箋注については言及していない。この影響を受けたためか、後に行われた一連の研究でも栞斎の箋注を参考にしない傾向にあった。

次に、築島（1965）以降の研究で、特に『本草和名』との関係について論じている代表的なものをテーマ別に整理する。

6.2.1.1 倭名類聚抄テキストの問題

『和名抄』を取り上げる際には、テキストの問題を検討しなければならない。20世紀後半、築島（1963a）・築島（1963b）をはじめとする二十巻本原撰説を支持する研究と、宮澤（1986）・宮澤（1997）・宮澤（1998b）をはじめとする十巻本原撰説を支持する研究の間で論議がなされてきた。この論議の要点をまとめたものとしては、宮澤（1998b）がある。

現在、栞斎の研究を継承・発展させた宮澤氏の一連の研究（2010年出版の『倭名類聚抄諸本の研究』に所収されている）が広く認められるようになり、先行研究の到達点を示してくれている。

「6.1 はじめに」で挙げた九例における諸本間の異文について、宮澤（1997）では次のように解釈されている。

- 割注和訓の前に「和名本草」が冠される例は、いずれも『本草和名』から和訓を引く時の形式であり「和名は本草に……と云ふ」という文脈である。
- 『和名抄』では『本草和名』の漢文本文は本草の一形態として扱われており、それを引く場合は、「本草云」とするのが通例である¹⁰⁷。
- 通草条のように「和名本草云」とするのは、『和名抄』の通例に反しており、後の増補を推測させる。

6.2.1.2 出典名「本草」「陶隱居注」「蘇敬注」の検討

河野（1983）は漢文注記を中心に両書の関係を考察し、次の推論を出している。

- 〈1〉『和名抄』の漢文正文¹⁰⁸にある出典名の「本草」は『新修本草』の正文であり、「陶隱居注」「蘇敬注」はその注である。
- 〈2〉源順は少なくともこれらの部分を、孫引きの形で『本草和名』から引用した。

この研究は、着眼点に優れ、『和名抄』『本草和名』『新修本草』三書の引用関係について分かりやすく論じた点において意義深く、その成果が宮澤（1997）や宮澤（1998a）などの研究に取り入れられている。しかし、後述する呉（2004）に批判されるように、「孫引き」説だけでは説明できない部分があるなど、問題を単純化しすぎる傾向がある。

呉（2004）は、『和名抄』における「本草」「陶隱居」「蘇敬」を出典とする 363 例の漢文正文について、『本草和名』『新修本草』と逐一比較し、次の結果を得ている。

- [1] 本草和名にはなく、新修本草にだけあるもの：57 例
- [2] 新修本草にはなく、本草和名にだけあるもの：35 例
- [3] 新修本草・本草和名の両方に存するもの：257 例
- [4] 新修本草にも本草和名にもないもの：11 例
- [5] その他：3 例

この結果に基づき、[1] は『新修本草』を直接参照したものであり、[4] と [5] は他の本草書の介在を想定させるものであると述べ、河野（1983）の「孫引き」説は成り立たないと反論している。

¹⁰⁷ この部分は、後述する河野（1983）に基づいている。

¹⁰⁸ もとの文章では「本文」を用いているが、典拠の意味を表す「本文」と区別するために、ここでは「正文」を用いる。

呉（2004）は、綿密な比較考察によって、河野（1983）の「孫引き」説にそぐわない例を示した点では非常に有意義であるといえるが、『和名抄』と『本草和名』の関連についての解釈が十分ではない。

6.2.1.3 倭名類聚抄と本草和名の関連項目

宮澤（1998a）は、『和名抄』は『本草和名』を含む漢語抄類の集成によって成り立ったものであると主張し、『本草和名』との関連項目 801 項を出典と引用方法に着目し、次の五種に分類している。

- (ア) 本草和名をそのまま引用するもの（漢籍本文の孫引きを含む） 370 例
- (イ) 本草和名の注にある「出～」の出典を漢籍本文として引くもの 157 例
- (ウ) 本草和名の施注にない本草系の漢籍出典を漢籍本文として引くもの 70 例
- (エ) 本草和名の施注にない本草系以外の漢籍出典を漢籍本文として引くもの 202 例
- (オ) 漢語抄・弁色立成を引くもの 2 例

上記の中、(ア) は河野（1983）の結論に基づいている。ここからは、宮澤（1998a）が両書の関連項目を広く捉えていることが窺える。

確かに、『本草和名』に所載の和語は『和名抄』の基礎資料として用いられているので、『本草和名』の施注にない漢籍を引くものであっても、そこに見られる和語に関連が認められる場合がある。しかし、漢語と和語の両方から『和名抄』と『本草和名』の関連項目を調査するには、その判定基準が設けにくい。実際、宮澤（1998a）では関連項目の判定基準と内訳については、明示されていない。

6.2.2 本研究の目的

本研究は、狩谷氏・吉田氏・宮澤氏の研究を継承する立場から、『和名抄』における『本草和名』の出典注記の構造をより一層、明らかにすることを目的とする。そこでまず、調査対象を漢文に関連のあるものに限定し、字面から分かる共通出典を手掛かりに、両書の共通部分を次の三種に整理する。

- ① 『和名抄』で直接『本草和名』を引くもの¹⁰⁹
- ② 『和名抄』で『新修本草』を引くもの（『本草和名』からの孫引きを含む）¹¹⁰
- ③ 両書の間で共通する『新修本草』以外の漢籍出典を引くもの

①と②については、既に河野（1983）と呉（2004）によって検討されているが、③については、一部の研究においては言及されている¹¹¹ものの、詳しい検討がなされてこなかった。

そこで、以下の考察では、③の部分に注目し、『和名抄』と『本草和名』のそれぞれの引用の仕方を分析した上で、共通する部分の持つ意味を明らかにする。考察に当たって、『本草和名』は松本書屋本と万延元年影写本を参看して用いる。『和名抄』は宮澤氏が提唱する十巻本原撰説に従い、十巻本系統のものを底本に用いる。

6.3 両書の体裁と引用方法

6.3.1 倭名類聚抄の序文と体裁

『和名抄』の序文にはその編纂経緯が書かれている。それによると、本書は醍醐天皇の皇女勤子内親王が源順に編纂させたものであるという。内親王は「和名」を捨てて顧みない風潮を嘆き、『文館詞林』や『白氏事類』は漢詩をつくる「風月之興」に便利だが、実際の言葉の意味に関する「世俗之疑」はそれらによっては決め難いと述べた。そしてこの「世俗之疑」を解決するものには、『辨色立成』、『楊氏漢語抄』、『和名本草』（すなわち、『本草和名』）、『日本紀私記』があると語り、源順に諸家の善説を集めて書物を作るよう命じたのである。

（前略）至于和名、弃而不屑。是故雖一百帙文館詞林、三十卷白氏事類、而徒備風月之興、難決世俗之疑。適可決其疑者、辨色立成、楊氏漢語抄、大医博士深根輔仁奉勅撰集和名本草、山州員外刺史田公望日本紀私記等也。（中略）汝集彼数家之善説、令我臨文無所疑焉¹¹²。

この内親王の教命を受けた源順がどのような編纂方針をとったかについても、序文によって窺い知ることが出来る。それによると、「漢語抄之文」や「流俗人之説」に対しては、まず

¹⁰⁹ 「新抄本草」、「新撰本草」、「本草」（割注）という字面で引用するもの。

¹¹⁰ 「本草」（本行）、「陶隱居注」、「蘇敬注」という字面で引用するもの。

¹¹¹ 吉田（1939）は「（前略）和名抄に引く雜要決、崔禹食經、大清經、刪繁論、養性要集、或は釋藥性の如き諸書は殆ど全部、その原典から引いたものではなくして、本草和名からの孫引きであるといっても過言でないのである。（中略）和名抄と本草和名との関係を完全に記さうとするには、少なくとも茲に挙げた書名の引ける各條について、両書の引用文を逐一比校考證して見なければならぬと思ふが、（箋注参照）今は簡略に従った（後略）」（p.52, p.53）と課題を提示している。

¹¹² 引用文は「箋注本」による。

「本文」と「正説」¹¹³を挙げ、それぞれに注を付す。「本文未詳」の場合は、直接『辨色立成』『楊氏漢語抄』『日本紀私記』の文を挙げるという。

(中略) 或漢語抄之文、或流俗人之説、先舉本文正説、各附出於其注。若本文未詳、則直舉辨色立成、楊氏漢語抄、日本紀私記。(後略)

宮澤(1986)では、上記の内容を「和名抄はその序文によれば、先行する四種の漢語抄類¹¹⁴の和訓を、それぞれにふさわしい「本文」を掲げる形で集成したものである」(p.281)と要約されている。しかし、なぜ「本文未詳」の場合になると、『辨色立成』『楊氏漢語抄』『日本紀私記』の文を挙げるというのに、『本草和名』については言及しなかったのか、という疑問が生ずる。考えられる原因には、次の二点が挙げられよう。

1. 『本草和名』には「本文」そのものが存在している
2. 『本草和名』を手掛かりにすれば「本文」が見つかる

ここでは、結論を急がず、まず下掲の具体例から『和名抄』の体裁を分析し、『和名抄』における「本文」の意味について考えてみよう。

(和名抄 雲母条)

三 87 オ 雲母 本草云雲母【歧良々】多赤謂之雲珠五色具謂之雲華多青謂之雲英多白謂之雲液多黄謂之雲沙¹¹⁵

『和名抄』の基本体裁として、一つの項目に、掲出漢語、漢文本文、和訓を含む割注の三要素が含まれている。この例では、「雲母」が掲出漢語で、「歧良々」が和訓注で、それ以外の部分は「本文」に相当すると考えられる。

この例の「本文」にある「本草云」という部分は、掲出漢語「雲母」の拠り所を示している。すなわち、「本草」という漢籍に「雲母」という語があることを示している。「多赤謂之雲珠五色具謂之雲華多青謂之雲英多白謂之雲液多黄謂之雲沙」という部分は、「本草」における「雲母」の解釈文である。

¹¹³ 「本文の正説」と解釈する説もあるが、ここでは、高橋ほか(2006)の解釈に従う。

¹¹⁴ 漢語抄とは、漢語と和語を対照させた簡便な語彙集である。ここでは、『辨色立成』『楊氏漢語抄』『本草和名』『日本紀私記』の四種を指している。

¹¹⁵ 所在は箋注本による。「三 87 オ」は「巻三 87 丁表」を示す。以下同じ。

このように、『和名抄』における「本文」が成り立つには、漢語とその典拠の対応関係がはっきりしていなければならない。次に、その対応関係を『本草和名』に求めることが可能かどうかを検討する。

6.3.2 本草和名の凡例と体裁

『本草和名』は、中国の本草書に記載される薬の漢名に和名を対照させた、本草学専門の語彙集である。『和名抄』とは異なり、典拠ある本文を掲載することよりも、薬の漢名をなるべく多く蒐集しようとする性格を持っている。

『本草和名』の上巻冒頭には出典に関する凡例が記されている。それについては「4.2 出典に関する凡例」で既に取り上げたが、ここでは、『本草和名』における「雲母」条を例にして、凡例の意味を再確認してみよう。

(本草和名 雲母条) ¹¹⁶

上三 03 オ 3 雲母 一名雲珠【色多赤】一名雲華【五色具】一名雲英【色多青】一名雲液【色多白】一名雲沙【色多黄】一名磷石【色正白仁謂音履進及】一名雲膽【純黒者也】一名地涿 ¹¹⁷【色雜黒者也仁謂卓楊玄操音禄已上二名出陶景注】一名六甲父母【出墨子五行記】一名華飛莢【出丹方】一名鴻光【出太清經】一名石銀【出兼名苑】雲母者星精也又云日精也【出范注方】和名歧良々出陸奥国

『本草和名』凡例の後半部分にある「以前諸書中薬別名皆抄出列於條下」という記述に沿って考えると、別名の「雲膽」「地涿」は「陶景注」から、「六甲父母」は「墨子五行記」から、「華飛莢」は「丹方」から、「鴻光」は「太清經」から、「石銀」は「兼名苑」から、「星精」「日精」は「范注方」から採っていることが推測できる。

「雲母」は『本草和名』の第三巻にある項目の見出しなので、それに対応する『新修本草』の「雲母」条も合わせて見てみよう。

(新修本草 第三巻 雲母条) ¹¹⁸

雲母、味甘、平、無毒。主治身皮死肌、中風寒熱。如在車船上、除邪氣、安五臟、益子精、明目、下氣、堅肌、續絶、補中、療五勞七傷、虚損少氣、止痢。久服輕身、延年、悅

¹¹⁶ 『本草和名』の所在は松本書屋本による。「上三 03 オ 3」は「上冊第三巻 3 丁表 3 行目」を示す。

¹¹⁷ 「涿」という字が万延元年影写本では脱落している。

¹¹⁸ 大字は『新修本草』の本文部分（太字は神農本草經由来）を、小字はその注を表す。注に陶弘景によるものと蘇敬によるものがあり、蘇敬によるものには「謹按」が冠されている。この例では、蘇敬の注が施されておらず、小字部分はすべて陶弘景の注である。

澤不老、耐寒暑、志高神仙。一名雲珠、色多赤。一名雲華、五色具。一名雲英、色多青。
一名雲液、色多白。一名雲沙、色青黃。一名磷石、色正白。生太山山谷齊、廬山、及琅琊
北定山石間、二月採。澤瀉爲之使、畏鱉甲、及流水。

按仙經雲母乃有八種：向日視之、色青白多黑者名雲母、色黃白多青名雲英、色青黃多赤名雲珠、如冰露
乍白名雲沙、黃白晶々名雲液、皎然純白明澈名磷石、此六種并好服而各有時月。其黯黯純黑有文斑斑如
鐵者名雲膽、色雜黑而強肥者名地涿、此二種并不可服。煉之有法、惟宜精細、不爾、入腹大害人。今虛
勞家丸散用之、并隻搗篩、殊爲未允。琅琊在彭城東北、青州亦有。今江東惟用廬山者爲勝、以沙土養
之、歲月生長。今煉之用礬石則柔爛、亦便是相畏之效。百草上露、乃勝東流水、亦用五月茅屋溜水。

『本草和名』の内容を『新修本草』に照らし合わせてみると、次のことが分かる。

- 「雲母」「雲珠」「雲華」「雲英」「雲液」「雲沙」「磷石」部分は『新修本草』の本文から摘録されたものである（一重下線部分を参照）。
- 「雲膽」「地涿」部分は『新修本草』の注（「陶景注」）から縮約されたものである（二重下線部分を参照）。

すなわち、割注で出典注記がなされていない「雲珠」「雲華」「雲英」「雲液」「雲沙」「磷石」の六つの漢名は、見出しの漢名「雲母」と同じく『新修本草』の本文からとっている。

このように、『本草和名』は『新修本草』の本文と『食経』等をベースにして項目を立てた上で、『新修本草』の注及びその他の諸書にある別名を付け加える形で形成されたものである。項目立ての段階で採録した漢名については出典注記を省略するものの、次の段階で諸書から採録した別名については出典注記を施すようにしているのである。

ゆえに、『本草和名』に所収されている全ての漢名には典拠があるといえよう。『和名抄』の序文で「本文未詳」の場合になった際に、『本草和名』の名が挙がらなくなったのはこれに起因しているだろう。

上記のことを傍証するためには、『和名抄』が『本草和名』にある漢名の典拠をどれほど参考に行っているかを調査する必要があるだろう。この点に関して、『和名抄』における『新修本草』（「本草」「陶隱居注」「蘇敬注」）の引用が『本草和名』を参考に行っていることが、既に河野（1983）によって証明されている¹¹⁹ので、次節ではそれ以外の漢籍出典について考察する。

¹¹⁹ ただし、河野（1983）の考察が厳密性に欠けている部分があり、それについては第7章で報告する。

6.4 両書の間で共通する新修本草以外の漢籍出典

6.4.1 出典名と引用例数の一覧

『和名抄』と『本草和名』に見られる漢籍出典については、藏中ほか(1999)と真柳(1987b)の調査がある。それらを参考にして、両書の漢籍出典を比較すると、40種ほどが共通していることが分かった。その中で、『本草和名』凡例で確認できるものが29種ある¹²⁰。ここから、『新修本草』に由来する「陶弘景注」「蘇敬注」を除いた27種を表6-1にまとめた。

表6-1は、対象となる27種の漢籍出典に対し、『和名抄』と『本草和名』のそれぞれに見られる引用例数、共通する部分の例数を一覧としたものである。例数の比較を可能にするために、下記の要領に基づいて計算している。

- I. 『和名抄』と『本草和名』のそれぞれの引用例数は、項目単位で数える。
すなわち、同じ項目に複数出現しても、一つとして数える。
- II. 共通する項目の例数は、『和名抄』にある項目を基準に数える。
すなわち、両書の関連項目が一對一ではない場合は、『和名抄』の項目数に従う。

表 6-1 和名抄と本草和名の共通出典

分類	出典別	和名抄	本草和名	共通項目
[1] 諸家食経書	崔禹食経 ¹²¹	67	133	60
	七卷食経 ¹²²	16	42	15
	孟詵食経 ¹²³	5	5	1
	馬琬食経 ¹²⁴	5	3	2
	膳夫経 ¹²⁵	2	1	1
	神農食経 ¹²⁶	1	2	0

¹²⁰ 凡例で確認できないもの(「博物志」「漢武内伝」「爾雅」などの10数種)は、医薬専門書ではなく、かつ『本草和名』での引用頻度が低いため、今回は検討の対象外とする。

¹²¹ 『和名抄』では「崔禹食経云」「崔禹経云」「崔禹曰」(本文)の形で、『本草和名』では「出崔禹」「出崔禹(錫)食経」「崔禹出」「崔禹云」「崔禹作」「崔禹音」「崔禹曰」「崔禹」の形で引用している。

¹²² 『和名抄』では「七卷食経云」(本文)の形で、『本草和名』では「出七卷食経」「七卷食経云」の形で引用している。

¹²³ 『和名抄』では「孟詵食経云」(本文)の形で、『本草和名』では「出孟詵食経」「出孟詵」「孟詵曰」の形で引用している。

¹²⁴ 『和名抄』では「馬琬食経云」(本文)の形で、『本草和名』では「出馬琬」「馬琬云」「出馬琬食経」の形で引用。

¹²⁵ 『和名抄』では「膳夫経云」(本文)の形で、『本草和名』では「出膳夫経」の形で引用している。

¹²⁶ 『和名抄』では「神農食経云」(本文)の形で、『本草和名』では「出神農食経」の形で引用している。

分類	出典別	和名抄	本草和名	共通項目
[2] 諸家本草音義書	仁譚本草音義 ¹²⁷	3	199	3
	楊玄操音義 ¹²⁸	3	153	3
[3] 傍流本草書	釋藥性 ¹²⁹	8	116	8
	本草拾遺 ¹³⁰	5	35	4
	本草疏 ¹³¹	5	22	3
	本草雜要訣 ¹³²	3	83	3
	太清經 ¹³³	1	46	1
	本草稽疑 ¹³⁴	1	23	1
[4] 服食・養生書	神仙服餌方 ¹³⁵	2	29	2
	丹口訣 ¹³⁶	2	20	2
	養性要集 ¹³⁷	2	10	1
	藥訣 ¹³⁸	1	26	1
[5] 医方書	小品方 ¹³⁹	2	11	1
	古今録驗方 ¹⁴⁰	2	7	0

¹²⁷ 『和名抄』では「仁譚本草音義云」（本文）、「仁譚音義云」「仁譚音義」（割注）の形で、『本草和名』では「仁譚音」「仁譚上音」「仁譚〇〇二音」「仁譚（音義）作」「仁譚（音義）〇〇反」「出仁譚音義」の形で引用している。

¹²⁸ 『和名抄』では「楊玄操作」「楊玄操音義作」「楊玄操曰」（割注）の形で、『本草和名』では「楊玄操（音義）音」「楊玄操（音義）作」「楊玄操（音義）〇〇二音」「楊玄操上音」「楊玄操〇〇反」「楊玄音」「楊音」の形で引用している。

¹²⁹ 『和名抄』では「釋藥性云」（本文）の形で、『本草和名』では「出釈藥性」「釈藥性又云」「釈藥性」「出釈藥」の形で引用している。

¹³⁰ 『和名抄』では「拾遺本草云」、「拾遺云」（本文）の形で、『本草和名』では、「出拾遺」「出本草拾遺」の形で引用している。

¹³¹ 『和名抄』では「本草疏云」（本文）、「見本草疏」（割注）の形で、『本草和名』では「疏文」「疏」の形で引用している。

¹³² 『和名抄』では「雜要決云」（本文）の形で、『本草和名』では「出雜要決（訣）」「出雜藥訣」「出雜要」の形で引用している。

¹³³ 『和名抄』では「太清經云」（本文）の形で、『本草和名』では「出太清經」「出太清經」の形で引用している。

¹³⁴ 『和名抄』では「本草稽疑云」（本文）の形で、『本草和名』では「出稽疑」「出本草稽疑」の形で引用している。

¹³⁵ 『和名抄』では「神仙服餌方云」（本文）の形で、『本草和名』では「出神仙服餌方」の形で引用している。

¹³⁶ 『和名抄』では「丹口訣云」（本文）の形で、『本草和名』では「出丹口訣」「出丹秘口訣」「出丹藥口訣」「出丹藥訣」の形で引用している。

¹³⁷ 『和名抄』では「養性要集云」（本文）、『本草和名』では「出養性要集」の形で引用している。

¹³⁸ 『和名抄』では「藥決云」（本文）の形で、『本草和名』では「出藥決（訣）」の形で引用している。

¹³⁹ 『和名抄』では「小品方云」（本文）の形で、『本草和名』では「出小品方」「小品方云」の形で引用している。

¹⁴⁰ 『和名抄』では「録驗方云」（本文）の形で、『本草和名』では「出録驗方」の形で引用している。

分類	出典別	和名抄	本草和名	共通項目
	刪繁論 ¹⁴¹	1	3	1
	千金方 ¹⁴²	1	2	0
	新録单方 ¹⁴³	1	1	0
[6] その他	兼名苑（注） ¹⁴⁴	180	228	68
	崔豹古今注 ¹⁴⁵	7	26	5
	抱朴子内篇 ¹⁴⁶	2	5	1
	墨子枕中五行記 ¹⁴⁷	1	10	1

6.4.2 共通する項目の分析

次に、表 6-1 にある漢籍を五種類に分けて検討する。[1] ～ [5] の書は、『日本見在書目録』と『隋書』経籍志においては「医方」の類に一括で収録されているが、ここでは内容によって細分類した¹⁴⁸。

[1] 諸家食経書：「崔禹食経」「七卷食経」「孟詵食経」「馬琬食経」「膳夫経」「神農食経」

諸家食経書は、性味、毒の有無、禁忌、効能などを記した食事療法に関する書のことである。引用例を見ると、『和名抄』と『本草和名』には、共通する例と共通しない例（前者にあって、後者がない例）がある。また、共通する例の中に内容が類似するものと異なるものが見られる。

次に、その具体例を見てみよう。例示に当たって、『本草和名』の内容に「◆」を付けて区別する。

¹⁴¹ 『和名抄』では「刪繁論云」（本文）の形で、『本草和名』では「出（那）繁論」の形で引用している。

¹⁴² 『和名抄』では「千金方云」（本文）の形で、『本草和名』では「出千金方」の形で引用している。

¹⁴³ 『和名抄』では「新録方云」（本文）の形で、『本草和名』では「出新録方」の形で引用している。

¹⁴⁴ 林（2001）は『兼名苑注』は恐らく『兼名苑』が日本に伝えられてから日本人の手によって編集されたもの」と推測しているが、確実な証拠はまだ出されていない。

『和名抄』における 180 例の中、「兼名苑」が 137 例、「兼名苑注」が 43 例。『本草和名』における 228 例の中、「兼名苑」が 227 例、「兼名苑注」が 1 例。関連項目を見ると、『本草和名』では「兼名苑」と記されているのに、『和名抄』では「兼名苑注」と記されているものが多数あるので、ここでは「兼名苑」と「兼名苑注」を区別せずに一括した。

¹⁴⁵ 『和名抄』では「崔豹古今注云」（本文）の形で、『本草和名』では「出古今注」の形で引用している。

¹⁴⁶ 『和名抄』では「抱朴子云」の形で、『本草和名』では「出抱朴子」の形で引用している。

¹⁴⁷ 『和名抄』では「墨子五行記云」（本文）の形で、『本草和名』では「出墨子五行記」「出墨」の形で引用している。

¹⁴⁸ 分類の仕方は真柳（1987a）を参考にしている。

- 『和名抄』と『本草和名』に共通し、内容も類似する例（例1・例2）

例1

◆下十六 26 才 5 海月 【貌似月在海中故以名之】凝月【煮時即凝故以名之】一名水母【水母者蛇名形如覆笠無目蝦入其頭中為目出崔禹】和名久良介

八 51 才 海月 崔禹食經云海月一名水母【久良介】貌似月在海中故以名之

例2

◆下十七 32 ウ 7 橙 【似柚而小出七卷食經】……和名阿倍多知波奈

九 69 ウ 橙 七卷食經云橙【宅耕反安倍太知波奈】似柚而小者也

- 『和名抄』と『本草和名』に共通するが内容に相違がある例（例3）

例3

◆下十八 34 ウ 1 胡瓜 【胡域多之故以名之出孟詵食經】一名再熟瓜【出崔禹】一名勒瓜【小而多汁】一名青瓜【已上二名出兼名苑】和名加良宇利

九 75 ウ 胡瓜 孟詵食經云胡瓜【曾波宇利俗云歧宇利】寒不可多食動寒熱發瘡病

「孟詵食經」は、『食療本草』（孟詵撰）のことで、敦煌残卷（S.76）が伝わっている。残卷（S.76）は137行、行毎に20余字、総計2774字で、26種類の薬物を掲載している。背紙には「長興五年（934）正月一日行首」と記された牒文が書かれているので、それに近い年代に書写されたものであるとされている¹⁴⁹。この残卷所掲の「胡瓜」の内容を見ると、『和名抄』の引用文がそれに拠っていることが分かる。

（敦煌残卷 S.76 : 『食療本草』）¹⁵⁰

胡瓜【寒】、不可多食、動風及寒熱。又發疔瘡兼積瘀血。○案、多食令人虚熱、上氣、生百病、消人陰、發瘡及發疔氣及脚氣、損血脉、天行後、不可食。○小兒食、發痢滑中、生甘（疳）虫。又不可和酪食之、必再發。又搗根傳胡刺毒腫甚良。

¹⁴⁹ 中尾（1930）、渡邊（1955）、小曾戸（1996）「第五章 第二節：スタイン文書」を参照。

¹⁵⁰ 太字は朱筆、「【】」は小字、○は朱点を表す。句読点は筆者による。

- 『和名抄』と『本草和名』に共通しない例（例4・例5）

例4

二 50 ウ 清盲 七卷食經云凡麩并梅李食之任身使子清盲【俗云阿歧之比】

例5

四 38 ウ 氷漿 ……膳夫經云立秋後不得飲氷漿

例3～例5のような例が見られることから、食經書の引用においては、『和名抄』が『本草和名』以外の資料（原典或いはその抄録）を利用したことは間違いないと言えよう。

ただし、引用例数が多い「崔禹食經」「七卷食經」については、『和名抄』の引用例の多数が、共通する例となっていることは注目に値する。この共通部分においては、『和名抄』は『本草和名』にある出典注記を手掛かりに、原典に当たった可能性があると考えられる。

[2] 諸家本草音義書：「仁謂本草音義」「楊玄操音義」

諸家本草音義書は、主流本草（『本草經集注』や『新修本草』など）に対する音義書のことである¹⁵¹。『和名抄』にみえる引用例の中、漢文本文に引かれているものは下掲する例6の一例のみで、それ以外は全て割注に引用されているものである。

例6

◆下十六 20 オ 5 鮫魚 【仁謂音交】一名鰩魚皮【仁謂音倉各反装刀靶者也】……和名佐女

五 45 オ 鮫皮 仁謂本草音義云鮫魚皮【鮫音交佐女乃加波】装刀櫛者也

割注に見られる引用例も含めて『本草和名』と比較した結果、それらがほぼ同じ内容であることから、『和名抄』は他の資料を参照せずに、『本草和名』に見える引用文を組み替えて本文を形成したと考えられる。

[3] 傍流本草書：「釋藥性」「本草拾遺」「本草疏」「本草雜要訣」「太清經」「本草稽疑」

傍流本草書は、『本草經集注』や『新修本草』など主流の本草書とされるもの以外の本草書を

¹⁵¹ 真柳（2014b）は「楊玄操音義」などについて考察しており、参照されたい。

指すものである。引用例数を見ると、『和名抄』ではこれらの引用例が少なく、しかもその殆どが『本草和名』に共通している。共通する例の内容を確認すると、下掲する例7と例8のように類似するものが殆どである。

例7

- ◆上六 16 オ 7 細辛 一名小辛一名細草【出釈薬性】和名美良乃祢久佐一名比歧乃比太比久佐
十 21 オ 細辛 釋薬性云細辛一名小辛【美良乃祢久散一云比歧乃比多比久散】

例8

- ◆下十六 24 オ 9 田中螺汁 【崔禹音浩果反】一名螭螺【有稜者也出拾遺】和名多都比八
40 オ 田中螺 拾遺本草云田中螺其有稜者謂螭螺【太都比螭音知見龍類】

共通しない例には、次のようなものがある。

例9

- ◆下十九 42 オ 8 赤小豆 ……小豆一名荅頭豆豌豆江豆野豆和名阿加阿都岐
九 14 ウ 野豆 本草疏云豌豆【上於丸反】一名野豆【乃良万女】

この例の場合は、「本草疏」の出典注記が現存本『本草和名』には見えないものの、伝写の過程で出典注記の書き落しが生じた可能性も考えられるので、『和名抄』が『本草和名』以外の資料を参照したとは断言できない。

[4] 服食・養生書：「神仙服餌方」「丹口訣」「養性要集」「薬訣」

服食・養生書は、道家の長寿法（すなわち、丹薬を服用することによって、生命を養って長生をはかる）に関連する書物のことである。[3]と同様に、『和名抄』の引用例は殆ど『本草和名』に共通しており、内容にも関係性が見いだされる（例10・例11を参照）。

例10

- ◆下十七 31 ウ 7 桃椽 ……桃膠一名桃脂一名桃膏一名桃魄一名桃靈一名桃精一名桃父母
【已上出神仙服餌方】和名毛々
九 87 ウ 桃脂 神仙服餌方云桃脂一名桃膠【毛々乃夜邇】

例 11

◆上八 26 ウ 2 乾薑 一名定姜【出養性要集】……和名久礼乃波之加美
四 67 オ 薑【乾薑附】……養性要集云乾薑一名定薑【保之波之加美】

共通しないものは次の一条のみである。

例 12

◆上六 13 ウ 6 昌蒲 一名昌陽一名溪蓀一名蘭蓀【已上二名出陶景注】一名臭蒲【出香蒲條
〈蘇敬〉¹⁵²注】一名堯時菹【出雜要訣】……和名阿也〈女〉¹⁵³久佐
十 68 ウ 昌蒲 養性要集云昌蒲一名臭蒲【阿夜米久散】

この例においては、「養性要集」の出典注記が現存本『本草和名』に見えないのは、伝写の過程で生じた誤写によるものである可能性が考えられる。

[5] 医方書：「小品方」「古今録驗方」「刪繁論」「千金方」「新録方」

医方書は、薬の処方が記されている医学書のことである¹⁵⁴。『和名抄』の例には、『本草和名』に共通するものは次の二例のみで、

例 13

◆上三 02 オ 2 丹砂 ……鎮粉【焼朱砂作水銀上黒煙名也出小品方】……唐又出伊勢国
三 83 ウ 鎮粉 小品方云鎮粉【美豆賀禰乃介布利】焼朱砂為水銀其上黒煙名也

例 14

◆下十四 4 オ 6 木天蓼 一名比鬼根【出那繁論】和名和多々比
十 113 オ 木天蓼 刪繁論云木天蓼【和太々比】

それ以外の例は、全て巻二「疾病部」にみえるものである（例 15・例 16 を参照）。

例 15

二 66 ウ 長血 小品方云婦人長血【奈賀知又有白血】

¹⁵² 「蘇敬」という二文字が万延元年影写本では空白となっている。

¹⁵³ 「女」という二文字が万延元年影写本では脱落している。

¹⁵⁴ ここの「医方」は『日本見在書目録』や『隋書』経籍志の分類「医方」より狭義的な意味で用いる。

例 16

二 58 ウ 齧齒 録驗方云齧齒【上胡戒反波賀美】睡眠而齒相切有聲也令人取其席下土内口中勿使知則止矣

また、『和名抄』の引用書目には、「醫家書」「脚気論」「黄帝内經」「集驗方」「掌中要方」「針灸經」「太素經」「中黄子」「病源論」など、『本草和名』に見えない医方書も数多く含まれているので、この部分の引用においては、『本草和名』以外の資料が利用されていたと考えられる。

[6] その他：「兼名苑（注）」「崔豹古今注」「抱朴子内篇」「墨子五行記」

これらの書は、書目では「道家」「五行」「雑家」に分類されている。「墨子五行記」については、『和名抄』に見られる引用例（例 17）と『本草和名』の引用例は共通している。

例 17

◆下十五 5 ウ 4 頭垢 【楊玄操音敬】一名雲脂【出墨子五行記】

二 3 ウ 雲脂 墨子五行記云頭垢謂之雲脂【和名加之良乃阿加一云以路古】

それ以外の書については、『和名抄』に見られる引用例と、『本草和名』に見られる引用例との間で共通しないものが多い。特に、「兼名苑（注）」においては、共通する例が『和名抄』にみえる例の半分にも及ばない。そのため、これらの書の引用においては、[5]と同様に、『本草和名』以外の資料が利用されていたと考えられる。

上記の分析をまとめると、次の通りである。

- I. [2] 諸家本草音義書、[3] 傍流本草書、[4] 服食・養生書の引用に関しては、『和名抄』は『本草和名』をそのまま引用することが多い。
- II. [1] 諸家食經書の引用に関して、『和名抄』は『本草和名』にある出典注記を手掛かりにして、原典などを参照した可能性がある。
- III. [5] 医方書と [6] その他の書の引用に関しては、『和名抄』は『本草和名』以外の資料を利用することが多い。

6.5 おわりに

本章では、まず、『和名抄』における『本草和名』の出典注記について、問題を提起した上で、先行研究の到達点と本研究の目的を示した。

次に、『和名抄』序文と『本草和名』凡例の解説を通して、『和名抄』における「本文」の成立要素（漢語とその出典）を『本草和名』に求めることが出来ると推論した。

最後に、共通する漢籍出典という側面から、従来の研究で殆ど検討されていなかった『新修本草』以外の漢籍に注目して調査を行った。調査範囲を27種の漢籍に設定し、『和名抄』と『本草和名』のそれぞれに見られる引用例数と共通する部分の例数を対照した。そこから、『本草和名』にある出典注記がどれほど参照されているかについて分析を試みた。

「胡瓜」のような確実な例をもって、諸家食経書、医方書等の引用においては、『和名抄』は『本草和名』をそのまま引用するのではなく、原典などを直接参照した可能性があることを指摘した。

ただし、『和名抄』の編纂過程においては、『本草和名』にある出典注記が間違った形で取り入れられていることもある。それについて、狩谷栲斎は箋注で「誤引」とであると指摘していることから、次章では、栲斎の箋注を参考に、『和名抄』における『本草和名』の誤引を調査する。

7 倭名類聚抄における本草和名の誤引

7.1 はじめに

『和名抄』と『本草和名』の引用関係については、近年河野(1983)の論考がある。河野(1983)は、『和名抄』にある出典名の「本草」は『新修本草』の正文であり、「陶隱居注」「蘇敬注」はその注であり、源順はこれらの部分を孫引きの形で『本草和名』から引用したと指摘している。その成果が宮澤(1998a)や山田(1995)に紹介され、広く認められるようになったが、その後、呉(2004)による反論が出た。呉(2004)は、河野(1983)の「孫引き」説にそぐわない例を提示した上で、「孫引き」説を否定した。

確かに、河野(1983)は、「孫引き」説では説明できない部分があるなど、問題を単純化しすぎる傾向がある。ただし、『和名抄』に『本草和名』からの直接引用があることに着目した点においては、評価されるべきである。

そもそも、『和名抄』の出典研究には、江戸時代の考証学者狩谷楳斎による『箋注倭名類聚抄』(或いは『和名類聚抄箋注』)がある。そこで試みに、『本草和名』に関連する項目をこの箋注で詳しく見ていくと、『和名抄』所引『本草和名』に関する問題点が既に網羅的に指摘されていることが看取されたため、本報告に至った。

楳斎の箋注では、『和名抄』における「誤引」(すなわち、出典にある材料を誤った形で引用したこと)を詳しく考察しているのであるが、河野(1983)の「孫引き」説も、実はこの「誤引」によって説明できる。楳斎の「誤引」説に注目した研究には、吉田(1939)があるが、その論考では誤引が生じた原因として、源順が『和名抄』を「急いで編述を試みた」こと、「若年未熟」であったことの二点を挙げている。

本章は、吉田(1939)と異なる観点、すなわち、『和名抄』と『本草和名』の引用方法の違い、及び『本草和名』の構造の特徴から誤引が生じた背景を分析し、誤引の体系化を試みる。その上で、楳斎の研究について考察する。

7.2 誤引とは

7.2.1 誤引の意味

「誤引」は箋注の校例提要から借りた概念である。狩谷楳斎は『箋注倭名類聚抄』の「校例提要」の中で、次のように述べている。

凡源君所引用書、現存者取而訂之、今本非是者亦復臚列示異、逸亡者據諸類書校之 [a]、
間有所引書其説誤、而源君仍襲之者、或源君誤引者、或其説謬戾者 [b]、

今之所校、專在正傳寫之誤、復源君之舊、則是等諸件、宜舍而不論 [c]、
然恐初學之輩、或受其謬、今每條箋釋疏通證明之、圈子以下所記是也 [d]、
又倭名意義可知者、著前人所解、其不甚安者、爲更改之、於不詳者丘蓋如也 [e]、
然古語多不可釋者、如其漏謬、以俟敏求君子 [f]

ここから椽齋の考証の仕方を窺い知ることが出来る。椽齋の考証は『和名抄』を正しく理解しようという意識に基づいており、『和名抄』所引書目の中、現存するものはそれによって校訂するが、現存しないものは類書によって校訂を行ったという ([a] を参照)。考証の結果、『和名抄』の引用文には誤りがまま見受けられた。中には源君 (源順) が参考資料を取り違えて引用したのもあれば、その参考資料にある説自体が誤っているものもある ([b] を参照)。箋注の目的は、伝写の誤りを正し、『和名抄』の本来の姿を再現することであり、引用文の説が正しいかどうかは副次的な問題として位置づけられる ([c] を参照)。しかし、『和名抄』を学ぶ初習者たちがその誤りの影響を受けてしまう可能性があるため、それに対する説明も箋注で示したという ([d] を参照)。また、和名に対して、その意味が分かるものは前人の解釈を示した。意味が通じないものはそれを訂正した。意味が分からないものは言及しないようにしたという ([e] を参照)。

この中で、椽齋は、源順が参考資料にある説を誤って引用したという意味で、「誤引」という言葉を用いている。

7.2.2 誤引が生じた背景

『和名抄』において「誤引」が生じた原因について、吉田 (1939) は、「一は内親王に早く撰述して上るべく、急いで編述を試みた恨みはありはしなかつたか」、「二には源順がまだかかる大著を撰するには餘に若年未熟でありはしなかつたか」と述べている。本研究は、吉田 (1939) の解釈に加えて、『本草和名』の出典注記の持つ複雑な構造によって、誤りが生じているということを提言したい。

『和名抄』は、「本文」を権威とする平安時代の学問形態を反映しており¹⁵⁵、『本草和名』を含む漢語抄類に載る和語を基礎資料とし、その和語に対応する漢語を漢籍原典から引用する形で示したものである¹⁵⁶。

それに対して、『本草和名』は、中国の本草書にある薬の漢名を抄出し、和名を対照させた動植物の語彙集である。典拠である本文を載せることには拘らないが、所収の漢名に典拠を示そうとする点においては、『和名抄』に共通している。『和名抄』は、この『本草和名』の出典

¹⁵⁵ 池田 (1969) を参照。

¹⁵⁶ 宮澤 (1997)、宮澤 (1998) を参照。

注記を手掛かりにして「本文」を掲載したと考えられる。

しかし、『本草和名』の出典注記には省略された部分があるなど、その実際に関してはやや複雑な面がある。構造から見ると、『本草和名』は『新修本草』の本文や『食経』などをベースにして項目を立てた上で、『新修本草』の両注（陶弘景による注と蘇敬による注）及びその他の諸書にある別名を付け加える形で形成されている。項目立ての段階で採録した漢名には出典注記を省略するが、次の段階で採録した別名には出典注記を施すようにしている。その構造は、次のように図示することが出来る。

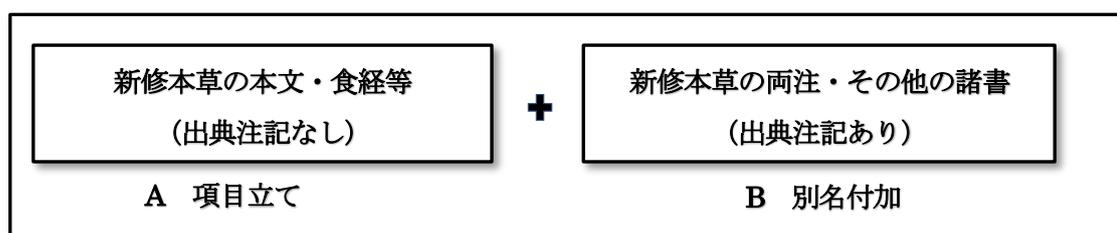


図 7-1 本草和名の構造

では次に、河野（1983）を再検討した上で、誤引の実態を考察する。

7.3 河野（1983）の諸点

7.3.1 出典名「本草」「陶弘景注」「蘇敬注」の同定

河野（1983）の主な論点として、まず出典名「本草」「陶隱居注」「蘇敬注」の同定が挙げられる。その研究では、中国本草書の編纂事情や日本における利用を分析した上で、「『和名類聚抄』漢文本文中の「本草」は『新修本草』の本文であり、「陶隱居注」「蘇敬注」はその注である」と述べている。

しかし、このことは、既に狩谷椽斎によって、「礬石」条の箋注で「源君引本草、皆依唐本草」というように指摘されていた。

一 67 才 礬石 唐韻云礬【音礬**本草**云一名澤乳】礬石藥名也蠶食之肥鼠食之死【今案又有特生礬石見吳氏本草】¹⁵⁷

箋注：……神農本草三卷見隋書唐書、所引文、唐蘇敬新修本草玉石部下品同

……魏吳晉本草六卷、載在七録、見隋書、唐書有吳氏本草因六卷、吳普撰、即是、今

¹⁵⁷ 『和名抄』の所在は『箋注倭名類聚抄』による。「一 67 才」は巻一の 67 丁の表を示す。「【】」で括る部分は小字双行を示す。以下同じ。

無傳本、按新修本草殘本、今猶有傳者、望之傳鈔六卷、其玉石部下品、兼載礬石特生礬石、源君引本草、皆依唐本草、今不引之、而引吳氏、可疑、廣本無見吳以下五字……

『新修本草』は、中国においては早くに散逸したが、日本においては江戸末期に京都の仁和寺でその残巻が発見された。椋斎は『新修本草』の古写本を率先して書写した人物の一人として知られている¹⁵⁸。彼が書写した第十五巻¹⁵⁹の巻末には、「天平三年歳次辛未七月十七日書生田邊史」という奥書があり、本書の伝来を証明する最古の記録とされている。

第十五巻の他に、椋斎は第四巻、第五巻、第十二巻、第十七巻、第十九巻の五巻¹⁶⁰をも書写しており、前掲「礬石」条に対する箋注にある「按新修本草殘本、今猶有傳者、望之傳鈔六卷」というのは、この六巻に該当すると考えられる。これらのことから、椋斎は『新修本草』の研究においても造詣が深いことが窺える。

7.3.2 孫引きの指摘

河野（1983）の主な論点のもう一つは、孫引きの指摘である。後述する「7.3.2.1 証拠一」と「7.3.2.2 証拠二」に基づき、「源順は、少なくともこれらの部分は、「孫引き」の形で、『輔仁本草』から引用したと考えられる」というように推測している。

7.3.2.1 証拠一：本草和名にあって新修本草にない項目を「本草云」として引いてしまった例⇒椋斎曰く「或源君誤引者」

河野（1983）は、「『輔仁本草』は第十四巻までは、『新修本草』と同様の編次になっているが、第十五巻から第十九巻までは、『新修本草』の標目の後に、同様の体裁で『七卷食経』『崔禹（錫）食経』等、「食経」からの標目を付加しており、一見しただけでは、それ以前の部分と見分けが付きにくい。『新修本草』と照合した結果、これらの「食経」からの標目をも「本草云」としてひいている例が十数例みつかった」と述べており、代表として「蚱蜢」条を例示している。

ここで、河野（1983）のいう「十数例」に該当する例を全て抽出し、次に示す。項目ごとに、『本草和名』の内容（「◆」を付けて区別する）、『和名抄』の内容、箋注の内容を対照する。

¹⁵⁸ 仁和寺古写本の伝鈔経緯に関しては、中尾（1936）、森（1940）、真柳（1996）、磯野（2001）、真柳（2014）の研究がある。

¹⁵⁹ 第十五巻は、現在杏雨書屋に所蔵されている。天保三年（1832）に、狩谷椋斎によって書写され、その再写本は浅井紫山に贈られた。浅井紫山への贈本は現在名古屋の尾張徳川黎明会に所蔵されており、1937年に本草図書刊行会によって出版された複製本はこれを底本にしている。

¹⁶⁰ この五巻の原本は現在も仁和寺に所蔵されており、1936年に本草図書刊行会によって出版された複製本はこれを底本にしている。

◆下十五 12 ウ 5 鳩鵠【頸短灰色音古答反】鴝【頸大足赤音古豪反】鷓【頸長脚短音路唐反】
鵠【頸短色五采可愛音東堯反】鴝【頸大尾長音伏優反如此之例不少鳩其惣名耳出崔禹】
和名波止¹⁶¹

七 13 ウ 鵠 本草云鵠【古沓反與領同伊閑波止】頸短灰色

箋注：原書不載鵠、按本草和名載鳩下載鵠頸短灰色、出崔禹、則知輔仁以本草不載鳩類、依
食經錄載、源君從彼引之、誤以為本草文也……

◆下十六 26 ウ 9 甲羸子 【貌似辛螺而口有角蓋々上甲錯似鮫魚皮】榮螺子【胡响反】板螺
【性味相似】一名鮒【呼甘反似蛤而圓出崔禹】和名都比

八 36 才 甲羸子 本草云甲羸子【今案羸即螺字也音羅楊氏漢語抄云海羸都比】貌似辛螺而
中有角蓋者也

箋注：所引文、千金翼方證類本草及注皆不載、按本草和名引崔禹食經、其文全同、只中作口、
無者也二字為異、則知此源君誤引、其作中亦誤、然龜貝體角蓋條引亦作中、蓋源君所見
本誤、非後來傳抄之誤也、今不遽改……

八 53 ウ 角蓋 本草云甲羸子中有角蓋【都比乃布多】蓋上錯似鮫魚皮【鮫魚已上見上文】

箋注：龜貝類甲羸條已引之、亦云本草、然所引是崔氏食經文、源君引為本草誤也、本草和名
引崔禹中作口為是……

◆下十六 27 才 3 石陰子 【是物生海中有陰精故以名之】一名貽【餘之反黑色貝似含珠子】
鸞貝【貌似堦而大夫者如十合器小者如橙子】妾貝子【在海中者名曰鸞貝在江河者名曰妾
貝子出崔禹】和名加世

八 37 才 石陰子 本草云石陰子【漢語抄云甲羸加世】此物生海中陰精故以名之

箋注：所引文、千金翼方證類本草及注皆不載、按本草和名引崔禹全同、只陰精上有有字為異、
則知此所載食經之文、源君引為本草誤也……

◆下十六 26 ウ 3 靈羸子 【貌似橘而圓其甲紫色生芒角出崔禹】和名宇尔

八 37 才 靈羸子 本草云靈羸子【漢語抄云棘甲羸字邇】貌似橘而圓其甲紫色生芒角者也

箋注：所引文、千金翼方證類本草及注皆不載、按本草和名引崔禹全同只無者也二字、此亦源
君誤引……

¹⁶¹ 『本草和名』の所在は「松本書屋本」による。「下十五 12 ウ 5」は「下冊第十五卷 12 丁裏 5 行目」を示す。以下同じ。

八 54 才 芒角 本草云靈羸子其甲紫色芒角【字邇乃介】

箋注：龜貝類靈羸子條已引之、亦云本草、然是崔氏食經文非本草文、源君誤引也……

◆下十六 19 ウ 5 擁劔 【似蟹色黃其一整偏長三寸餘出膳夫經】一名銅斨【出兼名苑】一名
𠄎執火¹⁶²【其磬赤故名烏出古今注】一名𠄎𠄎木步【出拾遺】和名加佐女

八 48 才 擁劔 本草云擁劔【加佐米】似蟹色黃其一整偏長三寸者也

箋注：千金翼方證類本草不載擁劔、證類本草蟹條引陶隱居有擁劔而與此所引不同、按本草和
名引膳夫經載擁劔其文與此所引全同唯者也作餘為異耳、恐源君誤引……

八 54 才 螯 野王案磬【音敖字亦作螯於保豆米】蟹大脚也本草云擁劔其一螯長者也

箋注：所引文、龜貝類擁劔條已引之亦云本草然是源君誤引膳夫經非本草文也

◆下十六 27 才 7 寄居 【貌似蜘蛛出崔禹】和名加美奈

八 39 才 寄居子 本草云寄居子【加美奈假用蟹蝷二字】貌似蜘蛛者也

箋注：千金翼方不載寄居子、證類本草中品載拾遺本草云、寄居蟲云々……本草和名引食經、
亦當寄居子之脱誤、源君引未脱此字也、然則此所引崔氏食經文非本草也……

◆下十六 26 才 7 海蛸 【所交反貌似人裸而圓頭】海肌子【長丈餘名海肌子長尺餘名海蛸子】
髑婁子【江東名之】小鮪魚【頭脚并長一尺許者出崔禹】和名多古

八 48 ウ 海蛸子 本草云海蛸子【今案蛸正作鮪所交反見唐韻太古俗用虬字所出未詳】貌似
人裸而圓頭者也長丈餘者謂之海肌子

箋注：千金翼方證類本草不載海蛸子、按本草和名云、海蛸、所交反、貌似人裸而圓頭、海肌
子、長丈餘名海肌子、長尺餘名海蛸子、云々出崔禹、此亦源君誤引……

◆下十六 27 ウ 6 蚱蟪 【上音側格反下音莫更反貌似蟻蚱而色小蒼在田野間】蟻蚱【貌似蟪
虫而長細色黃蒼飛時作声在荒田野也上音胡鷄反下蚩赤反】𠄎虫縦【音寸公反与蟻蚱相似
而色灰小短飛時𠄎翅作色在人家遲間】𠄎虫盖蜨【色蒼小夾長大腹延脚居地以尻罕出飛時
𠄎翅作声是物不可食凶出崔禹】……和名以奈古末呂

八 65 才 蚱蟪 本草云蚱蟪【作猛二音伊奈古万侶】貌似蟻蚱而色小蒼在田野間者也

箋注：所引文、千金翼方證類本草無載、按本草和名云、蚱蟪貌似蟻蚱而色小蒼、在田野間、
出崔禹、蓋源君誤引為本草也……

八 65 ウ 蟻蚱 本草云蟻蚱【奚赤二音波太波太】貌似蚱蟪而長細色黃飛時作聲在荒田野者
也

¹⁶² 漢字の符号化が難しい場合は、漢字構成記述文字列 (IDS) を用いて表記する。以下同じ。

箋注：所引文、千金翼方證類本草無載、按本草和名云蜈蚣貌似蝮虫而長細、色黃蒼、飛時作聲、在荒田野也、出崔禹、蓋源君又誤引亦非也……

◆下十七 33 才 9 椎子 有□木歷子【相似而大於椎出崔禹】和名之比
九 61 才 椎子 本草云椎子【上直追反之比】

箋注：原書不載椎子、本草和名載椎子、云出崔禹、蓋源君誤引……

◆下外 52 才 9 三稜草 【本草所謂莎草是也】和名美久利
十 71 才 三稜草 本草云三稜草【稜音魯登反美久利】

箋注：千金翼方不載三稜草、證類本草中品引宋開寶本草載之、則知唐本草無三稜草也、按本草和名莎草條云、一名三稜草、出稽疑、本草外藥條亦云、三稜草、本草所謂莎草是也、出本草稽疑、蓋源君引之、則單云本草、非是、下総本有和名二字……

このように、河野（1983）が「みつかった」とする十数例に対して、掖斎は既に箋注で「源君引為本草誤也」や「源君誤引」などと指摘していた。これらの例は、掖斎が「校例提要」で言及した「或源君誤引者」の部分に該当する。

7.3.2.2 証拠二：本草和名にある誤りをそのまま引いた例⇒掖斎曰く「或其説謬戾者」

また、河野（1983）は、「獨活」条を例に挙げ、「『新修本草』では本文であり「自動」となっている部分¹⁶³を『輔仁本草』で誤って「陶景注云」「自揺」としたものを、そのままひいた例などもみられる」と述べている。

◆上六 16 才 9 獨活 【陶景注云不為風揺故名獨活】一名羌活一名羌青一名護羌使者一名胡王使者一名獨揺草【陶景注云此草得風不揺無風自動】一名薇蘅【出兼名苑】一名□花使者【出雜要訣】和名字止一名都知多良

十 21 才 獨活 本草云獨活一名獨揺草【字止一云豆知太良】陶隱居曰無風自動故以名之

箋注：千金翼方證類本草並云、此草得風不揺、無風自動、陶注云、其一莖直上、不為風揺、故文、誤為陶注、源君襲其誤也

箋注を見ると、「誤為陶注、源君襲其誤也」とあるように、掖斎は既に、源順が『本草和名』の誤りをそのまま踏襲していると指摘していた。この部分は、掖斎が「校例提要」で言及した「或其説謬戾者」に該当する。

¹⁶³ 『重輯新修本草』卷第六：独活……一名独揺草此草得風不揺無風自動……

なお、「獨活」は『新修本草』第六巻にある項目である。『新修本草』の第六巻は残存しておらず、河野（1983）が参照したのは岡西氏による復元版『重輯新修本草』である。それに対して、椽斎は岡西氏の復元にも用いられた資料である『千金翼方』と『証類本草』を参照している¹⁶⁴。底本の使用においては、椽斎の方が適切であるといえよう。

7.3.2.3 例外：本草和名にない新修本草の注文を載せている例⇒例外と言えるのか

『和名抄』には「孫引き」の説に相応しくない例もあり、河野（1983）はその一部について言及している。「『輔仁本草』にはなく、『新修本草』には存在する注文をひいている例もある」と述べ、「免葵」を例に挙げつつ、「これと同様の確実な例が「本草云」「陶隱居本草注云」「蘇敬本草注云」としてひかれたものに二十例ある」と指摘している。その二十例に該当するものは次の[1]から[20]までの例である（波線部は『本草和名』にない内容を示す）。

- [1] 三 81 才 鐵精 陶隱居曰鐵精一名鐵漿【加禰乃佐比】鍛竈中如塵也
- [2] 四 64 ウ 酢 本草云酢酒味酸温無毒【酢音倉故反字亦作醋須酸音素官反】陶隱居曰俗呼爲苦酒【今案鄙語謂酢爲加良佐介此類也】
- [3] 八 18 才 鱧魚 本草云鱧魚【上音禮和名波无】味甘寒毒者也陶隱居注云鱧今作鱧字也
- [4] 九 23 才 大蒜 本草云葫【音胡於保比流】味辛温除風者也兼名苑云葫一名播【大蒜也下音煩】
- [5] 九 23 ウ 小蒜 陶隱居曰小蒜【古比流一名米比流】生葉時可煮和食之至五月葉枯取根噉之甚薰臭性辛熱
- [6] 九 25 才 葱 本草云葱【音聰岐】莖冷葉熱者也蘇敬曰葱有數種山葱曰茗【古百反】
- [7] 九 26 才 薤 本草云薤【胡介反與械同於保美良】味辛苦無毒者也蘇敬曰是薤類也
- [8] 九 26 ウ 菲 本草云菲【音玖古美良】味辛酸温無毒者也
- [9] 九 28 才 昆布 本草云昆布【比呂米一云衣比須女】味鹹寒無毒生東海陶隱居曰黃黑色柔細可食之
- [10] 九 28 才 海藻 本草云海藻【邇岐米俗用和布字】味苦鹹寒無毒者也本朝令云滑海藻【阿良米俗用荒布】末滑海藻【加知女俗用搗布搗者搗末之義也】
- [11] 九 33 ウ 芹 本草云水芹【音勤勢利】味甘平無毒一名水英
- [12] 九 35 ウ 蓴 蘇敬曰蓴【視倫反奴奈波別有根々不充食】自三四月至七八月通名絲蓴味甘腴澁者也
- [13] 九 45 才 薺 本草云薺【音計阿佐美】味甘温令人肥健陶隱居曰大小薺葉並多刺
- [14] 九 45 ウ 葵 本草云葵【音達阿布比】味甘寒無毒者也

¹⁶⁴ 岡西（1964）を参照。

- [15] 九 47 才 兔葵 本草云兔葵【以倍邇禮】味甘寒無毒者也
 [16] 九 47 才 龍葵 本草云龍葵【古奈須比】味苦寒無毒者也
 [17] 九 47 ウ 菟 本草云菟【音寬去聲比由】味甘寒無毒者也
 [18] 九 49 才 芸薹 本草云芸薹【雲臺二音乎知】味辛温無毒蘇敬曰此人間所噉菜也
 [19] 九 51 ウ 苜蓿 蘇敬曰苜蓿【目宿二音於保比】莖葉根並寒者也
 [20] 九 54 才 藜藿 本草云藜藿【繁婁二音波久倍良】味酸平無毒陶隱居曰即鷄腸草也

河野（1983）は、「例外的な「鉄精」「酢」「鱧魚」の三例¹⁶⁵を除く十七例¹⁶⁶の注は「味」「毒の有無」の二点を記した短い注文であり、すべて『和名抄』の卷十七 13 ウから卷十七 21 ウ¹⁶⁷に集中している。（中略）順はこれらの十七例はすべて食用植物なので特に『新修本草』をみて注を加えたと推察される」と解釈している。

しかし、実際のところ、『本草和名』にない『新修本草』の注文を載せている例は、上記 20 例のほかにも存在している。呉（2004）は、その用例の数や分布について、詳しく考察しているので、参照されたい。ここでは一部の例を提示するにとどめる。

- [21] 一 68 ウ 滑石 本草云滑石一名脆石【蘇敬曰極軟滑故以名之】
 [22] 三 81 才 鐵落 本草云鐵落一名鐵液【鐵乃波太一訓加奈久曾】蘇敬曰是鍛家燒鐵赤沸
砧上鍛之皮甲落也
 [23] 四 54 才 千歲纍汁 本草云千歲纍汁味甘平無毒續筋骨長肌肉一名藟蕪【纍無二音】蘇
敬曰即今之蓼蓂藤汁是也【蓼蓂二音嬰育和名阿末都良本朝式云甘葛煎】
 [24] 四 49 ウ 藟 説文云藟【魚列反與禰乃毛夜之】牙米也本草云藟米味苦無毒又有麥藟矣
 [25] 四 54 才 筍 尔雅注云筍【音隼字亦作笋太加无奈】竹初生也本草云竹筍味甘平無毒燒
而服之
 [26] 四 70 ウ 芥 本草云芥味辛歸鼻【芥音介賀良之】
 [27] 六 43 才 白芷香 本草云白芷香【芷音止】味辛生河東
 [28] 六 59 才 蠶沙 本草云蠶沙【古久曾】蠶矢名也
 [29] 七 48 才 蜀水華 本草云蜀水華【宇乃久曾】鸕鷀矢名也
 [30] 七 73 才 奴角 本草云奴角一名食角【犀乃波奈都能】犀鼻上角之名也

¹⁶⁵ [1] [2] [3] の三例。

¹⁶⁶ [4] から [20] までの十七例。

¹⁶⁷ 河野（1983）は『和名抄』の底本に二十巻本を用いているので、項目の所在表示が本研究と異なっている。「卷十七 13 ウから卷十七 21 ウ」を『箋注倭名類聚抄』で見ると、卷九 23 才から卷九 54 ウとなる。

上記のような例は、分散して『和名抄』に収録されているので、前述の河野（1983）の解釈が成り立つとは考え難い。

なお、狩谷栞斎は、これらの部分において源順が『新修本草』を見ていたと想定しているので、なぜ『本草和名』にない注文を挙げているかについては特に言及していない。

7.4 狩谷栞斎による誤引の指摘

「7.2.2 誤引が生じた背景」では『本草和名』の構造を図 7-1 に示した。『和名抄』の誤引は A の部分、B の部分、或いは A と B の間に生じることがある。河野（1983）は A の部分に生じた誤引（証拠一）について論じているが、それ以外の部分に生じた誤引については言及していない。

一方、栞斎は箋注で、各部分に生じた誤引を網羅的に指摘している。次に、栞斎の指摘に従い、誤引を三種類に分けて検討する。

7.4.1 新修本草の本文にない内容を「本草云」として引用している例

『和名抄』には、『新修本草』の本文にみられない内容を「本草云」として引用している例がある。図 7-1 に示した『本草和名』の構造と合わせて考えると、このような例には、

- ① A にある『食経』等の内容を誤って『新修本草』の本文として引用してしまったもの
- ② B にある内容を誤って A にある『新修本草』の本文として引用してしまったもの

の二種類がある。誤引が生じた原因としては、『本草和名』の A の部分においては、出典が明記されていないことと、A の部分と B の部分の間に区切りを示す符号などが見られないことが挙げられる。

種類①については、「7.3.2.1 証拠一」で確認したので、次に、種類②について、具体例から見よう。

◆下十五 11 ウ 2 雄鵠 一名飛駁【楊玄操音補角反出陶景注】一名神女雀一名嘉賓一名鷓
【音□州鳥一名鷓【音卑已上四名出兼名苑】飛駁馬泥【腦也出墨子五行記】和名加佐々
岐

七 37 ウ 鵠 本草云鵠【且略反加佐々岐】飛駁馬泥鵠腦名也

箋注：新修本草獸禽部中品雄鵠條陶注云、五月五日、鵠腦入術家用、一名飛駁、無馬泥之名、按本草和名雄鵠條云、飛駁馬泥、腦也出墨子五行記、則知源君從本草和名引之、誤五行記為本草也……

◆下十五 6 ウ 8 犀角 通天犀【夜露不濡】一名水犀角【出水中】駭鷄犀【陶景注邊鷄驚□
尸干不敢喙】□从兀犀【楊玄操音似】雌犀也一名班犀駭鷄一名駭禽【通天犀也出兼名苑】
鼻上角一名奴角一名食角【已上出拾遺】唐

七 73 オ 奴角 本草云奴角一名食角【犀乃波奈都能】犀鼻上角之名也

箋注：原書獸部中品有犀角不載所引文、按本草和名犀角條云、鼻上角、一名奴角、一名食角、
已上出拾遺、證類本草亦引陳藏器本草云、其鼻角、一名奴角、一名食角、則知奴角食角
之名出本草拾遺、源君單云本草非是……

◆上十二 54 ウ 7 枸杞 【蔣考苑注云枸杞根下洞黃其精靈多為犬子或為小兒】一名杞根一名
地骨一名苟忌【楊玄操音起】一名地輔一名羊乳一名却暑一名仙人杖一名西王母杖【已上
本條】一名天精一名朮盧一名却老【以上三名出抱朴子】……和名奴美久須祢

十 95 オ 枸杞 本草云枸杞根下洞黃泉其精靈多為犬子或為小兒【枸杞二音苟起沼美久須利
此間音久古】抱朴子云一名朮盧【託盧二音】一名却老

箋注：原書上品有枸杞、不載所引文、陶蘇注亦無、按本草和名引蔣考苑注全同、蓋源君誤引……

7.4.2 新修本草の本文にある内容を「〇〇云」として引用している例

また、『和名抄』には、次に示すような、『新修本草』の本文にある内容を「〇〇云」に入れ
てしまった例がある。これは、Aにある『新修本草』の本文を誤ってBにある出典名として引
用してしまったものであり、『本草和名』のBの部分に施された出典注記を、Aの部分にまで
かかると誤解して引用してしまった結果である。

◆上三 03 ウ 4 消石 一名芒消一名北帝玄珠【出丹口訣】一名化石【出兼名苑】一名昆濤梁
【出藥訣】出讚岐国

◆上三 03 ウ 3 朴消 一名消石朴一名東野【出藥訣】出若〈狭〉¹⁶⁸備中国

一 66 オ 消石【朴消附】丹口訣云消石一名芒消藥決云朴消一名消石朴【今案消石朴消是一物
也要方云朴消者芒消之大者也消石者芒消之根盤者練之成芒消是也】

箋注：按本草和名云、消石一名芒消、一名北帝玄珠、出丹口訣、又云、朴消一名消石朴、一
名東野、出藥訣、據千金翼方證類本草、消石一名芒消、及朴消一名消石朴、皆本草正文、
則北帝玄珠之名出丹口訣、東野之名出藥決也、源君以本草和名芒消下消石朴下並不著出
典、併本草諸名爲出丹口訣藥決、誤也……

¹⁶⁸ 「狭」という字が万延元年影写本では空白となっている。

◆上七 21 才 4 王不留行 一名王不流行【出釈薬性】和名須々久佐一名加佐久佐

十 59 才 王不留行 釋薬性云王不留行【今案一本留作流加佐久散】

箋注：本草和名云、王不留行、一名王不流行、出釋薬性、按千金翼方證類本草、並作王不留行、是王不留行本草所載、王不流行之名、出釋薬性也、此恐源君誤引……

◆上七 24 才 3 茵陳蒿 一名馬先【出釈薬性】和名比歧与毛歧

十 56 ウ 茵陳蒿 釋薬性云茵陳蒿【比歧與毛歧】

箋注：本草和名云、茵陳蒿一名馬先、出釋薬性、千金翼方證類本草中品有茵陳蒿、是輔仁依本草載茵陳蒿、依釋薬性載馬先之名也、此蓋源君誤引……

◆上八 30 ウ 9 白薇 一名白幕一名薇草一名春草一名骨美一名白蜜曹【出釈薬性】一名白草一名巖草【出雜要訣】和名美奈之古久佐一名久呂女久佐一名阿末奈

十 40 才 白薇 釋薬性云白薇【美奈之古久佐一云久路久散又云阿末那】

箋注：本草和名云、白薇一名白幕、一名薇草、一名春草、一名骨美、一名白蜜曹、出釋薬性、按千金翼方證類本草、骨美以上五名、皆本草本條所載、則白蜜曹一名、出釋薬性也、而本草和名骨美下失著出典、源君誤謂諸名皆出釋薬性、非是……

7.4.3 新修本草の両注・その他の諸書における誤引

さらに、『和名抄』には、次に示すような、『本草和名』の B の部分に生じた誤引もある。B の部分において、複数の出典注記がなされており、『和名抄』はその出典名を取り違えてしまったことが誤引に繋がったと考えられる。

◆上三 02 ウ 1 空青 一名青要【此一名出丹口訣】一名青油羽【出丹薬訣】一名金精【上者也出稽疑】一名青要中女【出洞真丹経】一名曾青【出兼名苑】空青者天精也【出範注方】

唐

五 31 才 空青 丹口訣云空青一名曾青

箋注：本草和名云、空青一名青要、此一名出丹口訣、一名曾青出兼名苑、據之丹口訣所載空青一名是青要、而空青一名曾青出兼名苑也、源君所引恐誤……

7.5 狩谷掖斎の考証

7.5.1 テキストの厳選

「7.3.1 出典名「本草」「陶隱居注」「蘇敬注」の同定」で述べたように、掖斎は、仁和寺で発見された『新修本草』の古写本の第四巻、第五巻、第十二巻、第十五巻、第十七巻、第十九巻を書写し、それを『和名抄』の考証に用いた¹⁶⁹。

『新修本草』が現存しない部分においては、次の「礬石」条と「滑石」条に対する箋注に示すように、掖斎は『証類本草』と『千金翼方』を用いた。この二書を『新修本草』の復元に使用するという方法が、後世の学者によって受け継がれている。

一 68 才 礬石 蘇敬曰礬石【礬音繁此間云悶石】有青礬白礬黒礬絳礬黄礬五種矣

箋注：唐蘇敬新修本草二十一卷、見唐書、按乾隆四庫全書總目、不載是書、知西土逸亡、皇國所傳本、亦多逸亡、纔存六卷、此所引在逸亡中、證類本草玉石部上品、引蘇敬注云、礬石有五種青礬白礬黒礬絳礬黄礬、此所引即是、按證類本草、宋大觀中、唐慎微所撰、於今世所存諸本草中爲最古、其爲書、以本草經作白字、次之以名醫別錄、下列陶弘景蘇敬諸注、實足窺新修本草之舊、故本書所引本草注、逸亡之處、取以校之……按古本新修本草殘本、及醫心方、作礬石、本草和名作礬石……岡村氏遜曰、作礬爲是、礬燒也、礬石煎煉乃成、故名礬石……

一 68 ウ 滑石 本草云滑石一名脆石【蘇敬曰極軟滑故以名之】

箋注：千金翼方、證類本草上品、並作一名脱石、本草和名是字半缺、唯存肉傍、按據軟滑之義、則作脆似是……按千金翼方本草部各條、與新修本草、證類本草正文全同、其次叙亦與新修本草、本草和名無異、則知是亦唐本草之正文、故本書引本草正文、而今逸者、亦取校之

また、「滑石」条の箋注では「本草和名是字半缺、唯存肉傍」とあるように、『本草和名』のこの部分にある「脆」の文字が一部欠損していることを言及している。『本草和名』の紅葉山文庫古写本を影写した万延元年影写本¹⁷⁰で確認すると、掖斎の言及と符合していることが分かった。すなわち、掖斎は『本草和名』の底本に万延元年影写本系統のものをを用いたと考えられる。

上記のことから、掖斎が当時における最も優れたテキストを考証に用いたことが窺える。

¹⁶⁹ 掖斎が死後七年の天保十三年（1842）に、小島宝素は京都で『新修本草』の第十三巻、第十四巻、第十八巻、第二十巻を写した。第二十巻の識語に「此書原卷仁和寺宮宝庫所藏云」とあるが、原巻の所在は不明である。

¹⁷⁰ 武（2013）、武（2016）を参照。

7.5.2 祖形の推定

掖斎が校例提要で言及したように、彼の考証の最も重要な目的は「復源君之舊」、すなわち、『和名抄』の祖型を復元すること（「7.5.2.1」で後述する）である。その延長で、掖斎は『本草和名』の祖形を推定すること（「7.5.2.2」で後述する）にも努めた。

7.5.2.1 和名抄に対する祖形の推定⇒校例提要 [c] : 「復源君之舊」

◆下十六 20 才 8 紫貝 一名文具【出兼名苑】和名牟末乃久保加比

八 44 ウ 紫貝 兼名苑云紫貝一名文具【牟末乃久保加比見本草】

箋注：本草和名引同、各本文具作大貝、今依本草和名及類聚名義抄改……按注於和名後云見本草、蓋謂本草和名、單言本草、非是……

◆上七 21 才 6 藍實 木藍子【葉圓大】菘藍【為淀】蓼藍【不堪為淀】和名阿為乃美

六 51 才 藍【澱附】唐韻云藍【魯甘反木藍都波岐阿井蓼藍多天阿井見本草】染著也本草云菘藍堪作澱

箋注：……按本草和名藍實訓阿為乃美、又載木藍子菘藍蓼藍、別無和名……

（證類本草唐本注）菘藍爲澱、惟堪染青、其蓼藍不堪爲澱、惟作碧色爾、此所引即是、而爲澱惟堪染青、作堪作澱者、源君所隲括、本草和名亦云、木藍子葉圓大、菘藍爲淀、蓼藍不堪爲淀、各本菘藍誤木藍、木藍已載上文注中不應復載明矣、今依證類本草本草和名改……

7.5.2.2 本草和名に対する祖形の推定⇒校例提要 [a] : 「今本非是者亦復臚列示異」

◆上三 03 才 9 石鐘乳 一名公乳一名蘆石一名夏石一名虛中【出積藥性】一名孔公乳石鐘乳者水精也【已上出神仙服餌方】石鐘乳者石精也【出範注方】出備中国

一 65 ウ 石【鍾乳附】陸詞曰石【常尺反和名以之】凝土也新抄本草云石鍾乳【出備中國英賀郡和名以之乃知】

箋注：新抄本草、謂本草和名、原書今本玉石部上、無英賀郡三字、又不載和名、醫心方並有之、蓋今本本草和名、傳寫偶脫也、當依此所引補正……

7.5.3 和訓の関連に対する分析

河野（1983）は、「和名に関して言えば、『輔仁本草』から「孫引き」されたとすれば、これらの部分に付されている和名もあわせて引用された蓋然性が高くなる」と述べており、漢文の

関連から和訓の関連を推定しようとしている。それに対して、椋斎は両書の間で異なる漢籍を引用していても、和訓には関連性があると想定しているため、両書の関連を広く捉えているのである。

例えば、下掲する「鐵」条において、『和名抄』の漢文正文は『本草和名』の出典注記にない漢籍（『説文』『唐韻』）によっており、和訓も『本草和名』と異なっている。一見両書の関連が見いだせないようであるが、椋斎は箋注で現存本『本草和名』の脱項を指摘した上で和訓の関連を分析している。

◆上四 07 ウ 5 鐵 和名阿良加禰

◆上四 07 ウ 6 剛鐵 【陶景注云雜練者也】一名跳鉄和名布介留加禰

三 80 オ 鐵【鑛附】 説文云【他結反久路加禰此間一訓禰利】黒金也唐韵云鑛【音賓】鐵爲刀甚利

箋注：……又按新修本草、舉鐵生鐵、剛鉄、本草和名脱生鐵一條、只有鐵剛鐵二條云、剛鐵和名布介留加禰、鐵和名阿良加禰、陶注云、生鐵是不被鑄鎗釜之類、剛鐵是雜練生鉄作刀鑄者、蘇注云、單言鐵者鉄鐵也、然則輔仁必不訓鐵爲阿良加禰、應訓鐵爲禰利加禰、生鐵爲阿良加禰、今本傳寫、脱鐵和名及生鐵名故生鐵和名合在鐵條也、則知此訓禰利、依輔仁也……

上記箋注の内容を整理すると、次の通りである。『本草和名』と『新修本草』を比較すると、『本草和名』の項目「鐵」と「剛鐵」の間に「生鐵」が抜けていることが分かる。また、『新修本草』の記述によれば、「剛鐵」は精練された鉄であるのに対して、「生鐵」は精練されてない鉄であるため、「阿良加禰」を「生鐵」の和訓とするのが妥当である。源順が見た『本草和名』のテキストでは、「鐵」と「和名阿良加禰」の間に、鐵の和名「禰利加禰」と項目名の「生鐵」が記されていることから、『和名抄』の和訓「禰利」がその記述に由来することが推測される。

このように、椋斎の考証はテキストの校訂に止まらず、内容の分析にまで及んでいる。類似する例には次の「金屑」条、「銀屑」条がある。

◆上四 05 オ 8 金屑 生金【陶景注云作屑謂之生金】金沙【陶景注云建晋亦有金沙】一名太真【仙方名之】一名黄金【陶景注云古舊名金為黄金】金屑者日之精也【出練名方】和名古加禰出陸奥国

三 79 オ 金屑 陶隱居曰金屑一名生金【古加禰乃須利久豆】

箋注：……新修本草玉石部中品、陶注云、出水沙中、作屑、謂之生金、此云一名、蓋源君所鑿括……按陶氏所説謂水沙中之善作屑者、非經磨研、故謂之生金、不與銀屑之研爲粉同、輔仁單訓古加禰是也、源君引陶注、爲須利久豆、依屑字誤訓也……

◆上四 05 ウ 3 銀屑 一名白銀【陶景注云銀名白銀】黃銀【蘇敬注云又有黃金本草不載】銀屑者月之精也和名之呂加祢出對馬國

三 79 ウ 銀屑 陶隱居曰銀屑一名銀蘇【銀乃須利久豆】

箋注：新修本草玉石部中品銀屑條陶注、不載銀蘇之名、本草正文及蘇敬注、本草和名皆無是名、按本草和名銀屑條題一名白銀夾注、陶景注云、銀名白銀、又題黃銀、夾注、蘇敬注云、又有黃銀、疑源君從本草和名引之、所見本脫正文黃字、注蘇字誤爲正文、遂以銀蘇爲銀屑一名也……輔仁單訓之呂加祢……銀屑必經研磨者不與金屑同、然則訓銀乃須利久豆爲無難……

7.5.4 倭名類聚抄引用書の選定に対する分析

また、次の「錫」条に対する箋注にあるように、掖斎は『和名抄』が『本草和名』にある出典注記に従わない原因についても分析している。

◆上五 10 オ 3 錫銅鏡鼻 【陶景注云今破古銅鏡鼻耳】鉛【蘇敬云出臨賀者名鉛】一名白鑞【仁謂音臘已上二名出蘇敬注】……一名釧【出兼名苑】和名奈末利

三 82 ウ 錫 唐韻云錫【先聲反】鉛錫爾雅云錫謂之釧【常委反】兼名苑云一名白鑞【盧盍反之路奈万利】

箋注：……按郭璞注爾雅錫謂之釧、云白鑞、兼名苑蓋本之、周禮職方氏注、錫鑞也、急就篇注、錫在銀鉛間、即今白鑞也、皆與郭璞同、本草和名、錫銅鏡鼻條云、鉛一名白鑞、已上二名出蘇敬注、一名釧、出兼名苑、而不載兼名苑錫有白鑞之名、然以源君引載白鑞之名見之、蓋兼名苑錫有白鑞之名、輔仁以蘇敬注已云鉛一名白鑞、不及舉之也、然蘇敬以白鑞爲鉛一名、其說與鄭玄郭璞顏師古不同、故源君引兼名苑、不引本草注也……

上記箋注の内容を整理すると、次の通りである。「白鑞」という漢名は『郭璞注爾雅』『周禮職方氏注』『周禮急就篇注』においては「錫」の別名であるが、『新修本草』においては「鉛」の別名である。『兼名苑』は『郭璞注爾雅』に従い、「白鑞」を「錫」の別名として挙げている。『本草和名』は『新修本草』と『兼名苑』の両方を引用しているが、『新修本草』の引用部分で既に「白鑞」を「鉛」の別名として挙げたので、『兼名苑』の引用部分では「白鑞」という別名を省略した。源順は『本草和名』を参照しているので、『新修本草』の説を知っているはずである。しかし、『新修本草』の説が『郭璞注爾雅』などの説と異なるので、それを引かずに、『兼名苑』を引いたと推測できる。

7.6 おわりに

本章は、狩谷栞斎の箋注を手掛かりに、『倭名類聚抄』における『本草和名』の誤引について考察を行った。まず、箋注の校例提要より「誤引」という概念を導入し、それが生じた背景を分析した。次に、近年の研究にみられる「孫引き」説について、追認した上で批正を加えた。さらに、誤引の体系化も試みた。最後に、栞斎の考証については、その研究がテキストの校訂に止まらず、内容の分析にまで及んでいることを指摘した。

狩谷栞斎の箋注が参照されるべきものであることを提唱すると共に、引き続きその考証の方法について検討していきたい。なお、今回は栞斎の指摘に従うという前提で、誤引を考察したが、今後は視点を変えて分析する必要があることも付言しておきたい。

8 結論

8.1 全体のまとめ

以上、本論部分において、『本草和名』の成立と継承について論じてきた。各章における検討内容とその結果は次の通りである。

第2章では、『本草和名』に関する先行研究を、江戸明治初期の研究と明治以降の研究とに分けて整理した。江戸明治初期の研究では、多紀元簡、狩谷掖斎、小島宝素・尚真父子、森立之・約子父子らの考証の成果を紹介した。明治以降の研究では、書誌学、国語学、医史学の分野別に、代表的な研究を紹介した。

第3章では、日本と台湾の所蔵機関で積み重ねた書誌調査に基づき、『本草和名』の写本（万延元年影写本、博愛堂鈔本）、版本（松本書屋本など）、及び諸本間の関係について考察を行った。従来、国語学の研究分野においては知られていなかった万延元年影写本、松本書屋本、博愛堂鈔本について紹介したが、この成果は、今後の研究に確かな底本情報を提供できるという点で、有意義なものであるといえよう。

第4章では、『本草和名』の出典を『新修本草』とそれ以外の漢籍に分けて検討した。『新修本草』については、小島宝素によって行われた『本草和名』との校合を通して、両書の間を考察した。それ以外の漢籍出典については、佚書も多く含まれることから、『日本国見在書目録』（藤原佐世、891年頃）と中国の正史芸文・経籍志への掲載状況、ならびに現存状況を調査した。

第5章では、この研究のために構築した『本草和名』データベースに基づき、本書における薬物について、その漢名の列挙の仕方と和名の示し方を考察した。漢名を見出し項目の漢名と項目内の漢名とに分けて検討し、項目内の漢名に対して、その列記形式を分類・統計したが、これは関連する先行研究にはみられない初めての試みである。

第6章では、『倭名類聚抄』における『本草和名』の出典注記について検討を行った。まず、『倭名類聚抄』における「本文」の成立要素を『本草和名』に求めることができることから、前者は後者の出典注記を手掛かりに本文を掲載したと推論した。次に、従来の研究で殆ど検討されていなかった『新修本草』以外の共通出典に注目し、両書の間で共通する部分がどれほどみられるのか、という点について分析を試みた。そこから、確実な例をもって、諸家食経書、医方書等の引用においては、『倭名類聚抄』は『本草和名』をそのまま引用するのではなく、原典を直接参照した可能性があることを指摘した。

第7章では、『倭名類聚抄』における『本草和名』の誤引について考察した。まず、狩谷掖斎の箋注を手掛かりにして、「誤引」という概念を導入し、それが生じた背景を分析した。次に、近年の研究にみられる「孫引き」説について、追認した上で批正を加えた。さらに、誤引

の体系化も試みた。最後に、椽斎の考証については、その研究がテキストの校訂に止まらず、内容の分析にまで及んでいることを指摘した。

上記各章の検討結果を踏まえて、本研究の成果を要約すれば、多分野に利用される『本草和名』について新たな研究材料を提供したこと、江戸考証学者の研究成果を再評価したこと、データベースによる構造の分析を実現したこと、『倭名類聚抄』との引用関係について従来の研究を一步前進させたことの四点である。

8.2 今後の課題と展望

今後の課題として、以下の作業を引き続き遂行したい。

第一に、本研究では『本草和名』の成立について、漢名の出典と列記形式について詳しく考察できたが、これからは和名の出典についても検討していきたい。本書は薬の漢名に和名を対照させた資料としては、現存最古であるとされるため、和名の出典を検討するには、参照できる資料に限られるなど様々な制約を受ける。今後は、同書に先行する漢和辞典の『新撰字鏡』、和歌集の『万葉集』、および訓点資料などを視野に入れて調査を試みたい。

第二に、本研究では『本草和名』の継承について、同書の引用が多く、かつ成立年代が近い『倭名類聚抄』を取り上げて、両書の引用関係を考察したが、今後は、それ以降に編纂された医学全書の『医心方』、漢字字書の『類聚名義抄』、香薬事典の『香字抄』、国語辞書の『色葉字類抄』との比較調査も行いたい。近年、古辞書のデータベース化が進んできていることから、本研究が構築する『本草和名』データベースと前掲文献のデータベースとの連携を図り、調査を進展させる所存である。

最後に、今後の展望として、『本草和名』にある個々の和名について、語誌調査を行いたいことをここに述べて拙論を終える。

参考文献

【論著】

- 池田源太（1969）「平安朝に於ける『本文』を権威とする学問形態と有職故実」『延喜天曆時代の研究』吉川弘文館, pp.387-412
- 池田証壽（2014）「平安時代漢字字書総合データベースの構築」『北海道大学文学研究科紀要』142, pp.79-90.
- 磯野直秀（2001）「日本博物学史覚え書 XI」『慶応義塾大学日吉紀要・自然科学』30, pp.23-48
- 岩本篤志（2015）『唐代の医薬書と敦煌文献』（立正大学文学部学術叢書 01），角川学芸出版
- 梅谷文夫（1994）『狩谷棧斎』人物叢書新装版，日本歴史学会編集，吉川弘文館
- 岡西為人（1964）「關於復原新修本草之考察」『重輯新修本草』国立中国醫藥研究所, pp.27-39
- 岡西為人（1977）『本草概説』創元社
- 小倉肇（2001）「『衣』と『江』の合流過程:語音排列則の形成と変化を通して」『國語學』52（1），pp.1-15
- 吳美寧（2004）「倭名類聚抄における本草和名—河野（1983）の再考—」『日本學報』韓國日本學會（59），pp.141-156
- 加藤大鶴（2005）「『医心方』字音注記出典と加点方針についての一考察—『本草和名』『和名類聚抄』との比較を通じて—」論集，アクセント史資料研究会(1), pp.145-165
- 川瀬一馬（1955）「第三章：第五節 本草和名」『古辭書の研究』大日本雄辯會講談社, pp.70-76
- 木下武司（2010）『万葉植物文化誌』八坂書房
- 木場由衣登（2015）「『甲午筆乘』記載の医書と医学について」『日本医史学雑誌』61（1），p.55
- 藏中進ほか（1999）『倭名類聚抄十卷本廿卷本所引書名索引』勉誠出版
- 河野敏宏（1983）「『和名類聚抄』と『輔仁本草』の関係について：『和名類聚抄』漢文本文に關して」『岡大國文論稿』11, pp.16-26
- 河野敏宏（1988）「『和名類聚抄』の音注の文献的性格：『本草和名』の音注との比較による」『愛知学院大学論叢（一般教育研究）』35（3, 4），pp.49-74
- 小曾戸洋（1996）『中国医学古典と日本：書誌と伝承』塙書房
- 小曾戸洋（1998）「江戸の考証医家」『日本医史学雑誌』44（3），pp.437-438
- 小曾戸洋（2013）「漢方のたからもの（25）森立之とその著述」『漢方と診療』4（2），pp.132-133
- 杉本つとむ（2011）「(余論)『本草和名』寸見」『日本本草学の世界—自然・医薬・民俗語彙の

- 探究』八坂書房, pp.120-130
- 反町茂雄 (1993a) 『反町茂雄文集上 古典籍の世界』文車の会刊, 八木書店発売
- 反町茂雄 (1993b) 『反町茂雄文集下 古書業界を語る』文車の会刊, 八木書店発売
- 高橋忠彦ほか (2006) 「倭名類聚抄序—国語辞典の濫觴—」『日本の古辞書：序文・跋文を読む』大修書店, pp.19-34
- 龍野一雄 (1978) 「本草和名の言語学的考察」『漢方医学大系第十六巻 医籍解説・考証・医史学篇』雄渾社, pp.6559-6566
- 築島裕 (1963a) 「和名類聚抄の和訓について」『訓点語と訓点資料』25, pp. 四の 491-四の 523
- 築島裕 (1963b) 「図書寮本類聚名義抄と和名類聚抄」『国語と国文学』40 (7), pp.45-70
- 築島裕 (1965) 「本草和名の和訓について」『国語学研究』5, pp.1-10
- 築島裕 (1981) 「第一章：四 万葉仮名の襲用と変転—九世紀以降—：音義・辞書の中の和訓」大野晋, 丸谷才一編『日本語の世界 5 仮名』中央公論社, pp.80-90
- 築島裕 (1987) 「『本草和名』の和訓と『医心方』の万葉仮名和訓」『国書逸文研究』20, pp.3-12
- 中尾万三 (1930) 「食療本草の考察」『上海自然科學研究所彙報』1 (3), 東方文化事業上海委員會
- 中尾万三 (1936) 「唐新修本草之解説」『新修本草』仁和寺影印本付録, 本草図書刊行会, pp.1-47
- 日本古典全集刊行会 (1926) 「本草和名解題」『日本古典全集：本草和名 上巻』, pp.1-12
- 馬継興 (1984) 「『食療本草』文献学的研究」『食療本草』謝海洲編, 人民衛生出版社
- 武倩 (2013) 「『本草和名』の諸本に関する一考察—万延元年影写本と全集本との関係を中心に—」『訓点語と訓点資料』131, pp.43-52
- 武倩 (2016) 「松本書屋本『本草和名』について」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』15, pp.51-60
- 武倩・劉冠偉 (2017) 「『本草和名』データベースの構築に向けて」第23回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集, pp.37-42
- 松本光隆 (1980) 「書陵部蔵医心方・成簣堂文庫蔵医心方における付訓の基盤：和名類聚抄・本草和名との比較を通して」『鎌倉時代語研究』3, pp.133-154
- 堀勝博 (1988) 「『本草和名』和名の考察—ヲチ、ミクリ、ホホヅキ、タチクキなど—」『城南国文』8, pp.1-10
- 真柳誠 (1985) 「『医心方』所引の『神農経』『神農食経』について」『日本医史学雑誌』31 (2), pp.258-260
- 真柳誠 (1987a) 「『本草和名』所引の古医学文献」『日本医史学雑誌』33 (1), pp.25-27

- 真柳誠 (1987b) 「『本草和名』引用書名索引」『日本医史学雑誌』33 (3), pp.381-396
- 真柳誠 (1993) 「中国本草と日本の受容」『日本版 中国本草図録』9, 中央公論社, pp.218-229
- 真柳誠 (1996) 「国宝、『新修本草』仁和寺本」『漢方の臨床』43 (4), pp.474-476
- 真柳誠 (2000) 「3巻本『本草集注』と出土史料」『薬史学雑誌』35 (2), pp.135-143
- 真柳誠 (2001) 「大英図書館所蔵の敦煌医薬文書 (1)」『漢方の臨床』48 (7), pp.906-908
- 真柳誠 (2006) 「故宫博物院所蔵の医薬古典籍 (三十)」『漢方の臨床』53 (6), pp.1073-1080
- 真柳誠 (2008a) 「楊守敬之醫書校刊與江戸考證醫學家之文獻研究」『故宮學術季刊』26 (1), pp.75-132
- 真柳誠 (2008b) 「楊守敬と小島家—古醫籍の蒐集と校刊」『東方學報 (京都)』83, pp.157-218
- 真柳誠 (2014a) 「第五章 第四節：一 仁和寺本」『黄帝医籍研究』汲古書院, pp.357-380
- 真柳誠 (2014b) 「第六章 第五節：一 楊玄操注『黄帝明堂經』『明堂音義』」『黄帝医籍研究』汲古書院, pp.507-513
- 宮澤俊雅 (1986) 「『和名類聚抄』の和訓について」続貂—和訓に冠する「和名」の有無について—『倭名類聚抄諸本の研究』(2010年, 勉誠出版) 所収, pp.265-283
- 宮澤俊雅 (1997) 「倭名類聚抄諸本の出典について」『倭名類聚抄諸本の研究』(2010年, 勉誠出版) 所収, pp.385-408
- 宮澤俊雅 (1998a) 「倭名類聚抄と漢語抄類」『倭名類聚抄諸本の研究』(2010年, 勉誠出版) 所収, pp.409-427
- 宮澤俊雅 (1998b) 「和名類聚抄の十巻本と二十巻本」『倭名類聚抄諸本の研究』(2010年, 勉誠出版) 所収, pp.429-471
- 宮下三郎 (2001) 「福井崇蘭館旧蔵 古鈔本 新修本草 獸禽部卷第十五 複製本の解説」『杏雨』武田科学振興財団 (4), pp.1-10
- 森鷗外 (1917) 「小嶋寶素」『森鷗外全集』(第四卷) 筑摩書房, pp.287-302
- 森鹿三 (1940) 「新修本草と小嶋寶素」『本草学研究』(1999年, 武田振興財団杏雨書屋編) 所収, pp.2-34
- 森鹿三 (1960) 「『薬種抄』について」『本草学研究』(1999年, 武田振興財団杏雨書屋編) 所収, pp.244-260
- 森鹿三 (1961) 「亮阿闍梨兼意の『香要抄』について」(1999年, 武田振興財団杏雨書屋編) 所収, pp.261-275
- 森鹿三 (1964) 「修文殿御覽について」『本草学研究』(1999年, 武田振興財団杏雨書屋編) 所収, pp.276-305

- 森潤三郎（1933）『多紀氏の事蹟』 思文閣
- 森銑三（1935）「椋翁雜記」『書誌学』 5, pp.23-43
- 山田健三（1995）「第二章：第一節 奈良・平安時代の古辞書」『日本古辞書を学ぶ人のために』 西崎亨編, 世界思想社, pp.68-118
- 横山学（2003）『書物に魅せられた英国人 フランク・ホーレーと日本文化』 吉川弘文館
- 吉田幸一（1938）「和名抄引書の存佚と誤引（上）」『國學院雑誌』 44（12）, pp.29-57
- 吉田幸一（1939）「和名抄引書の存佚と誤引（下）」『國學院雑誌』 45（3）, pp.47-70
- 林忠鵬（2001）「『倭名類聚抄』所引『兼名苑』について」『和漢比較文学』 和漢比較文学会（27）, pp.51-61
- 渡邊幸三（1955a）「敦煌本食療本草に対する文献学的研究」『本草書の研究』（1987年, 武田振興財団杏雨書屋編）所収, pp.266-283
- 渡邊幸三（1955b）「太平御覽所引本草經の文献学的性格」『本草書の研究』（1987年, 武田振興財団杏雨書屋編）所収, pp.284-306
- 和田英松（1990）『本朝書籍目録考證』 パルトス社

【使用テキスト】

『新修本草』

- 卷第四・五・十二・十七・十九：本草図書刊行会, 1936 - 1937 年刊
- 卷第十五：『零本新修本草卷第十五』 武田科学振興財団杏雨書屋編, 2000 年刊
- 卷第一・三・六・七・八・九・十・十一・十八：『重輯新修本草』 岡西為人重輯, 國立中國醫藥研究所, 1964 年刊

『本草和名』

- 「全集本」：日本古典全集刊行会, 1927 年刊
- 「松本書屋本」：『松本書屋貴書叢刊』 第 1 卷, 松本一男編, 谷口書店, 1993 年刊
- 「万延元年影写本」：無窮会専門図書館神習文庫蔵本

『和名抄』十卷本系

- 「箋注本」：『箋注倭名類聚抄』 京都大学文学部国語学国文学研究室編, 1943 年刊
- 「京本」：『古写本和名類聚抄集成 第二部 十卷本系古写本の影印対照』 馬淵和夫編, 勉誠出版, 2008 年刊（所収「前田本」）
- 「尾張本」（卷一、二）：『古写本和名類聚抄集成 第二部 十卷本系古写本の影印対照』 馬淵和夫編, 勉誠出版, 2008 年刊（所収「真福寺本」）
- 「昌平本」（卷一～六）：東京都立中央図書館蔵河田文庫本
- 「曲直瀬本」（卷一～四）：同上

- 「下総本」(第一～第五冊) : 『倭名類聚抄天文本』(東京大学国語研究室資料叢書 12) , 東京大学国語研究室編, 汲古書院, 1987 年刊

『和名抄』二十卷本系

- 「伊勢広本」(卷一～二、十一～二十) : 『古写本和名類聚抄集成 第三部 二十卷本系諸本の影印対照』馬淵和夫編, 勉誠出版, 2008 年刊 (所収「伊勢本」)
- 「大東急本」: 『古写本和名類聚抄集成 第三部 二十卷本系諸本の影印対照』馬淵和夫編, 勉誠出版, 2008 年刊 (所収「天正本」)
- 「高山寺本」(卷六～十) : 『古写本和名類聚抄集成 第三部 二十卷本系諸本の影印対照』馬淵和夫編, 勉誠出版, 2008 年刊 (所収「高山寺本」)

【辞典・目録・古記録等】

『浅井氏家譜大成：古医方小史 浅井国幹遺稿』浅井国幹著, 矢数道明解説, 名著出版, 1980 年刊

『延喜式』(新訂増補), 吉川弘文館(國史大系編修會編, 第2部 8-10), 1952-1953 年刊

『漢書藝文志』(『中国古典新書』所収) 鈴木由次郎著, 明德出版社, 1968 年刊

『神習文庫圖書目録』無窮會, 1935 年刊

『京都の医学史』京都府医師会編, 思文閣, 1980 年刊

『享保以後江戸出版書目』(新訂版), 朝倉治彦・大和博幸編, 臨川書店, 1993 年刊

『經籍訪古志』森立之撰, 廣文書局(臺北), 1967 年刊

『慊堂日曆』六合館(昭和4年刊)の復刻, 『松崎慊堂全集』(冬至書房, 1988 年刊) 所収

『弘文莊待賈古書目総索引』鈴木徳三編, 八木書店, 1988 年刊

『國立故宮博物院善本舊籍總目』國立故宮博物院, 1983 年刊

『續日本紀』(新訂増補), 吉川弘文館(國史大系編修會編, 第2卷), 1966 年刊

『隋書經籍志詳攷』興膳宏, 川合康三著, 汲古書院, 1995 年刊

『宋史藝文志廣編』脱脱等修, 楊家駱主編, 中國學術名著 第6輯, 中國目錄學名著 第3集第3-4冊, 世界書局, 1963 年刊

『大東急記念文庫書目』(第一), 大東急記念文庫, 1955 年刊

『唐書經籍芸文合志』劉昫撰, 楊家駱編, 中國學術名著 第6輯, 中國目錄學名著 第3集, 世界書局, 1963 年刊

『日本國見在書目録』(宮内庁書陵部所蔵室生寺本) 名著刊行会, 1996 年刊

『日本國見在書目録—集証と研究—』藤原佐世撰, 矢島玄亮著, 汲古書院, 1984 年刊

『日本人名大辞典』上田正昭(ほか) 監修, 講談社, 2001 年刊

『本朝医家古籍考』中川壺山著, 新松堂, 1932 年刊

【電子化資料】

「国立国会図書館デジタル化資料」国立国会図書館〈<http://dl.ndl.go.jp/>〉（参照：2018-11-9）

「ここは医史学の真柳研究室です」真柳誠〈<http://square.umin.ac.jp/mayanagi/>〉（参照：2018-11-9）

「古典籍総合データベース」早稲田大学図書館
〈<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>〉（参照：2018-11-9）

「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」京都大学図書館機構〈<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>〉（参照：2018-11-9）

謝辞

本論文は、筆者が北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程に在学中に行った研究をまとめたものです。本研究を遂行するにあたり、中国国家留学基金管理委員会から奨学金を頂きました。武田科学振興財団から「杏雨書屋研究奨励」の支援を頂きました。また、論文を執筆し、まとめるにあたって、多くの方々にお世話になりました。

まず、修士課程の研究生時代から八年にもわたって、熱心かつ丁寧なご指導を賜りました、池田証壽教授に謹んで謝意を表します。私は博士課程在学中に、出産などの事情で一時休学をはさみましたが、復学後、論文をまとめるにあたり、試行錯誤を繰り返してきました。池田先生は、助言を求めてきた私に対して、ご多忙の中にも拘わらず、親身になって相談に乗って下さいました。そして常日頃より、研究に対する姿勢から論文の書き方まで、時には励まし、時には厳しくご指導頂きました。池田先生のもとで日本国語学の研究に携わったことは、私にとってなにより貴重な経験になりました。

言語情報学講座の小野芳彦先生、加藤重広先生、佐藤知己先生、李連珠先生にも、長年にわたり、たくさんのご指導とご助言を頂きました。研究室の仲間たちには、専門分野での議論に限らず、様々な面で私を励まして頂きました。ご厚誼に感謝を申し上げます。

また、これまでの学会発表と論文投稿に際し、石塚晴通先生（北海道大学名誉教授）、宮澤俊雅先生（北海道大学名誉教授）、月本雅幸先生（東京大学教授）、小助川貞次先生（富山大学教授）、山田健三先生（信州大学教授）、川口洋先生（人文系データベース協議会議長）、大西拓一郎先生（国立国語研究所教授）ほかたくさんの方にご意見を頂きました。深く感謝いたします。

さらに、書誌調査の段階においては、小曾戸洋先生（日本医史学会理事長）から貴重な情報を頂戴しました。台北故宫博物院、無窮会専門図書館、静嘉堂文庫、杏雨書屋での閲覧に際しては、関係各位の御高配を賜りました。データベースの分析においては、共同研究者である劉冠偉さん（同研究室後輩）に、情報処理の方法について、ご意見を頂きました。最終的な論文の修正と加筆においては、中国学を専門とする江尻徹誠さん（同研究科専門研究員）に多大な助力を頂きました。

本論文執筆後、真柳誠先生（茨城大学名誉教授）に、医史学の観点から貴重なご教示を頂きました。また、小曾戸洋先生、町泉寿郎先生（二松学舎大学教授）に、最近の研究動向について紹介して頂きました。

そして、武田雅哉先生、加藤重広先生には、お忙しい中、本論文の副査として時間を割いて頂き、論文に対する丁寧かつ貴重なコメントと、今後の研究テーマに対するご提案を頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます。

最後に、温かく見守り、辛抱強く支えてくれた家族にも感謝の気持ちを伝えたいです。